（財）大阪府文化財センター調査報告書　第153集

泉佐野市

大西遺跡、若宮遺跡

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その４）に伴う発掘調査報告書

２００７年３月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第153集

泉佐野市

大西遺跡、若宮遺跡

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その４）に伴う発掘調査報告書

２００７年3月

財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

本書で報告いたします大西遺跡および若宮遺跡は、南海本線泉佐野駅周辺に広がる遺跡です。このたび南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴い発掘調査を実施いたしました。この事業に伴う調査を平成元年以来継続的に実施し、泉州の拠点地域である泉佐野のさまざまな歴史の姿を明らかにしてまいりました。

今回の調査は、南海泉佐野駅西方の旧和歌山方面線路部分を対象としました。調査地は幅が６ｍほどと狭いものですが、長さは約500ｍにもおよび、広い範囲で過去の土地利用の変遷が明らかになりました。

調査地の周辺では、旧石器時代以来、今日に至る人々の暮しの痕跡が、濃淡はありますが垣間見ることができます。そうした歴史の中でことに重要な変換点は、天福二（1234）年の官宣旨によりなされた日根荘の開発です。こののち中～近世を通じて、水田開発は海岸部方面にも拡大され、調査地周辺へは近世の始めにその波がおよんでいます。

こうした水田開発や耕作が盛んに行なわれた一方、調査地東方に熊野街道、北には紀州へとつながる孝子越街道が通り、人、物、情報が行き交っていました。その様子は、熊野街道沿いに位置する上町遺跡や上町東遺跡などの中世集落、孝子越街道の宿として繁栄した「佐野町場」が如実に物語っています。ことに「佐野町場」は、18世紀前葉には堺に次ぐ規模を誇り、食野家や唐金家をはじめとする豪商が輩出されました。今回の調査地は二つの街道の中間に位置していて、中世以来のそうした歴史的変遷の一端をうかがい知る調査成果を得ることができました。

調査にあたりましては、大阪府岸和田土木事務所、大阪府教育委員会、泉佐野市教育委員会、南海電気鉄道株式会社をはじめとする関係各位から多大なご指導・ご助力をいただき、厚く感謝いたしております。また今後とも当センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年３月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は大阪府泉佐野市高松北２丁目地先に所在する大西遺跡06－１・若宮遺跡06－２の発掘調査報告書である。
2．調査は大阪府岸和田土木事務所から財団法人　大阪府文化財センターが平成18年５月１日～平成19年３月23日の間委託を受け、平成18年５月23日から同年９月29日まで調査を行ない、平成18年10月１日から平成19年３月23日まで遺物整理作業を行ない、平成19年３月23日本書刊行を以て完了した。
3．発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。
調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、南部調査事務所長　大野　薫、調査第一係長　岡本敏行、主査　三木　弘、主任技師　立花正治［写真］、専門調査員　奈良拓弥
4．本書の編集は三木が行ない、三木および奈良が執筆した。各文責は目次に示した。また陶・磁器の観察については美濃部達也（新宿区教育委員会）、渡辺晴香（本センター非常勤職員）両氏の教示を得た。
5．調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所をはじめ、関係諸機関や下記の方々の援助を賜った。記して感謝します（敬称略）。
玉井　功・橋本高明（大阪府教育委員会）、鈴木陽一（泉佐野市教育委員会）、美濃部達也・大八木謙司・栩木　真（新宿区教育委員会）
6．本調査に係わる写真、実測図などの各種記録類は、大阪府文化財センターで保管している。

凡　　例

1．本書中の基準高は、すべて東京湾平均海水位（T.P.）＋値を使用している。
2．遺構図の座標は国土座標軸（世界測地系）を使用し、第Ⅵ座標系に準拠している。表記の単位はすべてｍである。
3．方位はすべて座標北で示している。調査地の座標北は磁北より東へ６°37′、真北より西へ０°23′振れる。
4．現地調査および遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター2003『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』に準拠した。地区割りの第１区画はＣ３、第Ⅱ区画は９で、第Ⅲ区画以下は細分される。
5．本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6．遺構番号は、検出順に付与した。したがって必ずしも調査区や時代の順になっていない。
7．実測図の縮尺は、各調査区平面図は200分の１、遺構図は40分の１を基本としているが、必要に応じて縮尺を変えたものもある。
8．遺物実測図は通し番号とした。遺物図面の縮尺は土器類・瓦類・金属製品は３分の１、それ以外は３分の２を基本としたが、大きさに応じて縮尺を変えたものもある。
9．写真図版の縮尺は任意である。

目　　次

序文
例言・凡例

第１章　調査の経緯・経過と方法
第１節　調査の経緯・経過 ……（三木）…… 1
第２節　調査方法 ……（三木）…… 2
第２章　調査地の立地環境と歴史
第１節　立地環境 ……（三木）…… 3
第２節　遺跡周辺の歴史 ……（三木）…… 4
第３章　調査成果
第１節　基本層序 ……（三木）…… 6
第２節　基盤層の調査 ……（三木）…… 11
第３節　発掘調査の成果
1　第１遺構面の調査 ……（三木）…… 11
2　第２遺構面の調査 ……（三木）…… 22
3　第３遺構面の調査 ……（三木）…… 37
4　出土遺物 ……（三木）…… 40
第４章　まとめ
第１節　調査地周辺の水田開発……（三木）…… 56
第２節　土錘について ……（奈良）…… 62

遺物観察表 …… 65
参考文献 …… 80

挿　図　目　次

第１図　調査地の位置
第２図　調査地の地区割り・座標値
第３図　調査地周辺の地形
第４図　調査地周辺の遺跡
第５図　調査地と若宮遺跡・大西遺跡
第６図　基本層序（１・２・３区）
第７図　基本層序（４・５区）
第８図　トレンチ土層
第９図　第１遺構面（１・２・３区）
第10図　第１遺構面（４・５区）
第11図　005溝・006溝
第12図　075小穴・076溝・077溝
第13図　078樋
第14図　128溝・130溝・131溝・136溝
第15図　第２遺構面（１・２・３区）
第16図　第２・３遺構面（４・５区）
第17図　027溝・036溝
第18図　022土坑・023土坑・070土坑
第19図　045井戸・064井戸・066土坑
第20図　064井戸出土遺物

第21図　079土坑・080土坑
第22図　091井戸
第23図　092溝・093小穴・094溝
第24図　095溝・096土坑・097小穴
第25図　153土坑・156溝・158溝
第26図　159土坑・160土坑・169落込み
第27図　167小穴・168土坑
第28図　須恵器
第29図　瓦器
第30図　土器（中世）
第31図　須恵質・瓦質土器
第32図　青・白磁
第33図　磁器（１）／紅猪口
第34図　磁器（２）
第35図　磁器（３）
第36図　陶器
第37図　炻器
第38図　土器（近世）・軟質陶器
第39図　簪
第40図　金属製品
第41図　玩具（１）
第42図　玩具（２）
第43図　瓦
第44図　石製品
第45図　土錘（１）
第46図　土錘（２）
第47図　土錘（３）
第48図　調査地および14年度調査地の水田関連遺構・中世遺構
第49図　泉佐野周辺の溜池
第50図　佐野村用水絵図と調査地
第51図　佐野村・湊村立会絵図と調査地
第52図　大西遺跡出土土錘法量統計

挿　表　目　次

表１　第１層・耕作土出土遺物の大きさ

図　版　目　次

図版１　大西遺跡、若宮遺跡遠景
　１　大西遺跡、若宮遺跡遠景（東から）　２　大西遺跡、若宮遺跡遠景（垂直）
図版２　１・２・３区第１遺構面
　１　１区第１遺構面（東から）　２　１区第１遺構面（西から）　３　005・006溝土層（西から）
　４　２区第１遺構面（東から）　５　３区第１遺構面（東から）
図版３　４区第１遺構面
　１　078樋（西から）　２　078樋土層（南から）　３　４区第１面（西から）
　４　130・136溝（垂直）　５　128・130・131溝（垂直）
図版４　４区第１遺構面
　１　４区第１遺構面（東から）　２　４区西端耕作痕群（西から）　３　４区西端耕作痕群（垂直）
図版５　１・２区第２遺構面
　１　１区第２遺構面（垂直）　２　２区第２遺構面（垂直）
図版６　３区第２遺構面
　１　３区第２遺構面（垂直）　２　３区第２遺構面（垂直）　３　３区第２遺構面（垂直）

図版７　３区第２遺構面、４・５区第３遺構面

１　３区第２遺構面（東から）　２　045井戸土層（南から）　３　064井戸土層（西から）

４　４区第３遺構面（東から）　５　５区第３遺構面（西から）

図版８　出土遺物

１　瓦器：椀・皿　２　土師器：皿　３　軒丸瓦　４　青磁：碗・鉢

図版９　出土遺物

１　泥面子、芥子面、面摸　２　芥子面、玩具

図版10　出土遺物

１　簪、サイコロ、煙管　２　磁器：紅猪口　３　磁器：皿

図版11　出土遺物

１　磁器：皿・蓋　２　磁器：蓋・碗

図版12　出土遺物

１　磁器：碗・仏飯器、陶器：仏飯器　２　軟質陶器：灯明皿・秉燭、火打石

図版13　出土遺物

１　陶・磁器　２　土錘

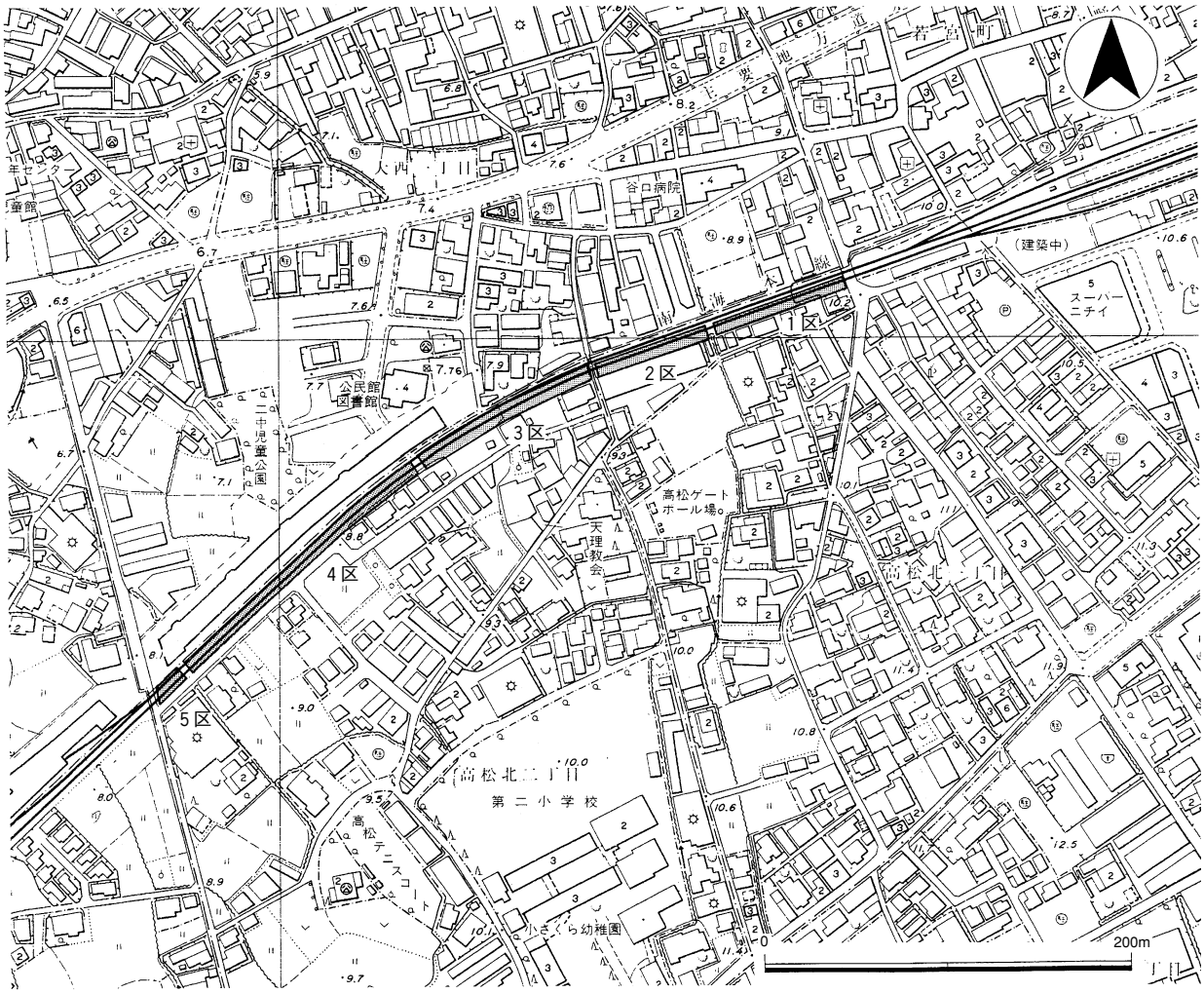
第１章　調査の経緯・経過と方法

第１節　調査の経緯・経過

本調査は、南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴うものである。平成元年に（財）大阪府埋蔵文化財協会が湊遺跡において発掘調査を実施したのを皮切りに、平成７年の（財）大阪文化財センターとの統合後も当センターが事業を継続してきた。

本調査地の北に隣接した範囲（旧難波方面線路部分）については、平成14年度に当センターが発掘調査を行なっている。14年度調査区のうち本調査と関連するのは、Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｏ・Ｐ区である。今回、下り方面（和歌山方面）の高架橋建設工事がほぼ完了したことを受け、調査の実施となった。調査地の東半は若宮遺跡、西半は大西遺跡に該当する。

調査はまず重機で盛土・攪乱を除去し、そののち人力により遺構の調査や遺物包含層の掘削などを行なった。14年度調査区とは鋼矢板により仕切られた箇所もあるがすでに抜き取られた部分もあり、また調査区南は民地と隣接していることから、調査区壁の崩落を防止しながら調査を進めた。また排土置場の関係から、１・２区、３区、４・５区に分けて調査を実施した。



第１図　調査地の位置

遺構の実測は、各地山面（第２・３遺構面）上の遺構についてはヘリコプターよる航空測量を実施し、第１遺構面については人手により実測を行なった。

第２節　調査方法

【地区名】

調査地は長さ約500ｍにおよぶが、道路や水路などにより分断され、５区に分れる。東（大阪側）より１・２・３・４・５区と呼称する。

【地区割り】

調査区の地割りは、大阪府発行の10,000分の１地形図を基準にして、第Ⅰ～第Ⅳの最少４段階の細分で示している。

第Ⅰ区画は、10,000分の１地形図の南西隅を基点にして、南北を15分割（Ａ～Ｏ）、東西を９分割（０～８）して、縦（南北）６㎞、横（東西）８㎞に分割した区画である。

第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北・東西それぞれ４分割した縦（南北）1.5㎞、横（東西）2.0㎞の区画で、南西端区画を１番として順次横方向に施番する。

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画の北東隅を基点にして南北を15分割（Ａ～Ｏ）、東西を20分割（１～20）した、１辺100ｍの区画である。

第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画の北東隅を基点として南北10分割（ａ～ｊ）、東西10分割（１～10）した１辺10ｍの区画である。

調査地は長さ約500ｍにおよぶ。そのため第Ⅰ区画は「Ｃ３」、第Ⅱ区画は「９」で共通するが、第Ⅲ区画以下が複数に分かれ、第Ⅲ区画は東よりＧ10、Ｇ11、Ｇ12、Ｈ12、Ｈ13、Ｉ13、Ｉ14となる。遺物の取り上げにあたっては、第Ⅲ区画を100分割した第Ⅳ区画を基本単位とした。

【水準】

標高値は東京湾平均海面（Ｔ.Ｐ.＋）を用いた。

【座標値】

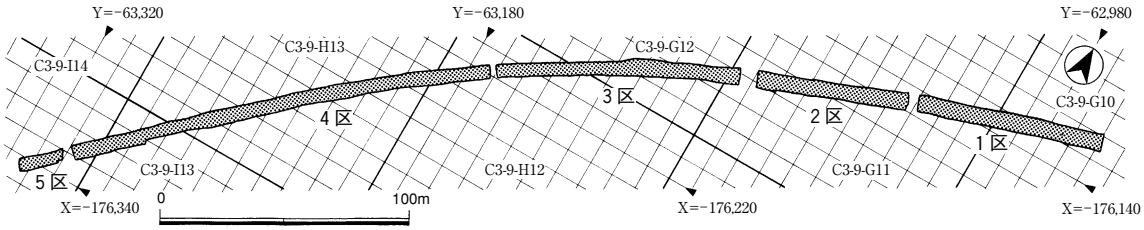
国際基準に基づく座標値を、方位は座標北を用いた。

【遺構番号】

検出順に通し番号を与え、遺構の種別をうしろに付した。

【図化】

遺構面は４区西端より16ｍ以西では３面、それ以外では２面が存在したが、２面目（第２遺構面）および３面目（第３遺構面）についてヘリコプターによる航空測量・図化（50分の１・100分の１）を測量委託により行なった。それ以外の面については、人手による実測作業（20分の１・100分の１ほか）を行なった。



第２図　調査地の地区割り・座標値

第２章　調査地の立地環境と歴史

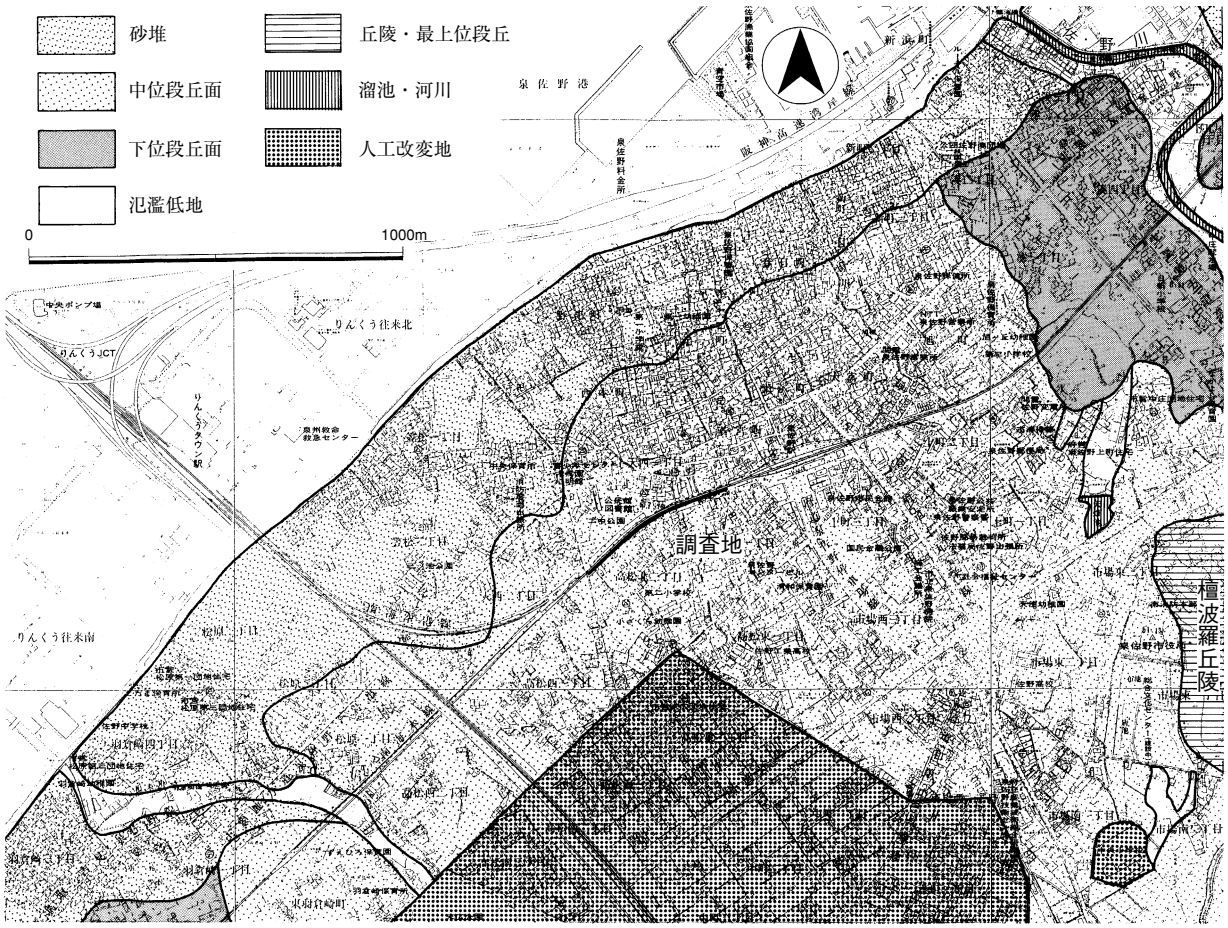
第１節　立地環境

調査地は南海本線泉佐野駅の西に近接した地点から西方約500mの範囲である。調査地はすべて中位段丘面上にある。この中位段丘面は、海岸線に沿う砂堆の南に広がっている。

調査地内においては基盤層が東から西へ緩やかに下降していて、１区東端と４区西端では約1.2mの比高差を認める。また５区に至って基盤層の下降はさらに顕著となり、長さ約10m間で0.3mの高低差がある。これは、調査地の西方で中位段丘面が南に後退しているためとみられる。

また１区では西端以東16m間にわたって基盤層の落込みが認められた。これは調査地にほぼ直交した小支谷が存在するためである。この小支谷は、平成14年度調査のＪ区においてもみられた。

佐野川西岸には低位段丘が認められ、中世以前の遺構や遺物が検出されているが、その広がりは限られた範囲である。また調査地の南東には檀波羅丘陵が海岸方面へ舌状に延び出ているが、調査地周辺ではこの檀波羅丘陵を除くと丘陵・最上位段丘は認められない。したがって、和泉山脈から緩やかに下降する、ほぼ平坦な中位段丘面の先端近くに位置している本調査地からは、近代以前にあっては周辺一帯への眺望がきいたことであろう。



第３図　調査地周辺の地形

第２節　遺跡周辺の歴史

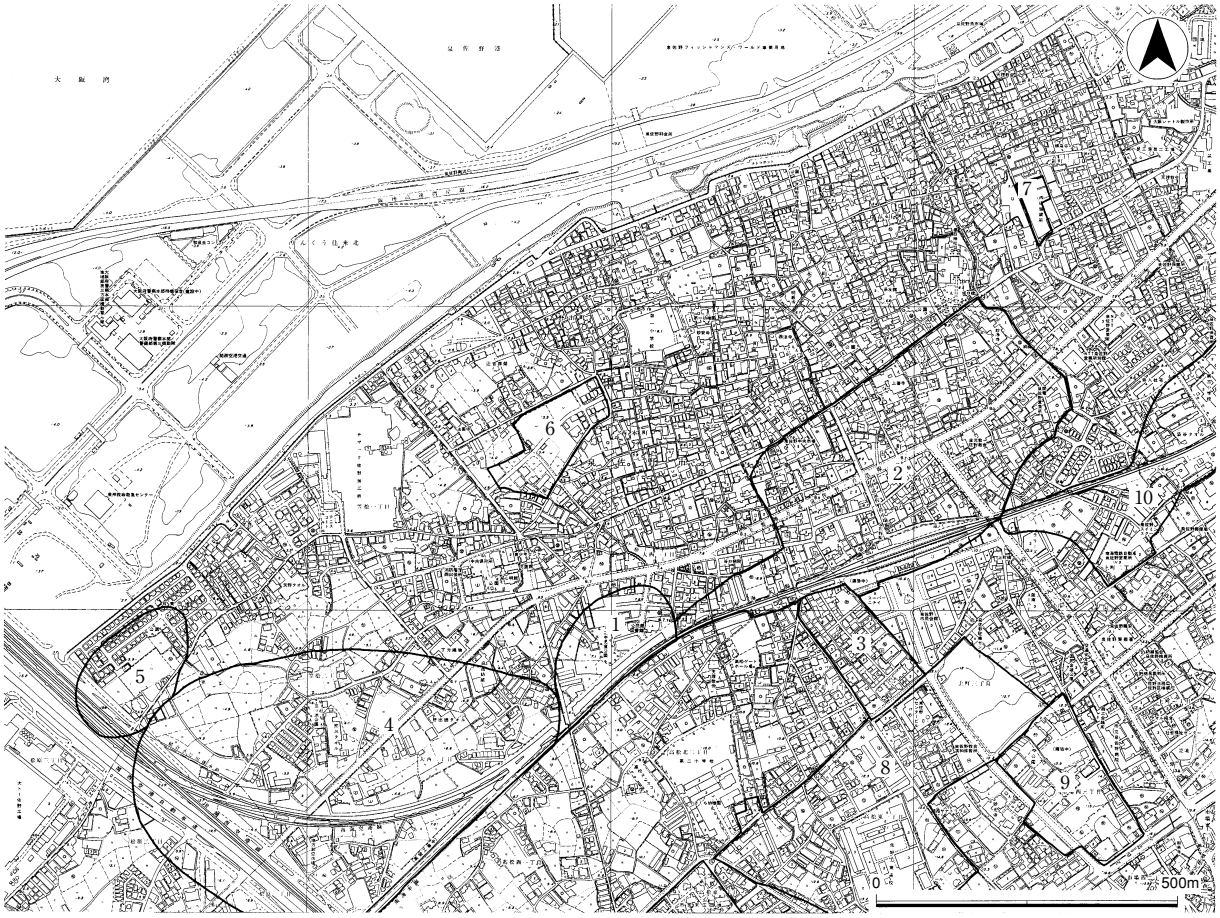
発掘調査地は長さ500ｍほどにおよぶため、３区中程を境に東が若宮遺跡、西が大西遺跡となる。この大西遺跡および若宮遺跡はともに、中世の遺構や遺物が検出されるとはいえ、おもに「佐野町場」およびその周辺に広がる生活・生産域である。

ところでこの地域の大きな歴史的画期は、鎌倉時代前葉の日根荘の開発にある。日根荘は天福二（1234）年に九条家の発議により開墾が始まり、中世代を通じて当地周辺の重要な生産拠点であった。また檀波羅密寺は平安時代の創建といわれ、応仁の乱の戦火を蒙るまでは権勢を誇り、地域への強い求心力をもっていた。

次いで中世中期になり地域興隆の引き金となったのは、本調査地東方に位置する熊野街道である。この街道に沿って、市が開かれ、その周囲には集落が形成された。

上町遺跡では、溝で囲われ、その内に掘立柱建物、井戸、土坑、墓などが設けられた室町時代の屋敷地が検出され、15,000㎡内に25区画あったと想定されている。

上町東遺跡では平安～室町時代の遺構が検出されているが、鎌倉時代に形成された集落が中心的なものである。溝で囲まれた屋敷地には掘立柱建物、柵列、井戸、土壙墓などが設けられていた。なお屋敷地の区画溝は１回、建物は２～３回ほどの造り変えがあったとみられていて、数時期にわたっている。また櫛の未製品、鞴の羽口や鉄滓などが出土し、集落内に職人層が存在していたと考えられている。



1　大西遺跡　2　若宮遺跡　3　中ノ畑遺跡　4　中開遺跡　5　松原遺跡　6　大場遺跡　7　新町遺跡　8　上町遺跡　9　市場西遺跡　10　上町東遺跡

第４図　調査地周辺の遺跡

市場西遺跡は上町遺跡の南東に隣接している。上町遺跡と同じく溝で囲まれた14～15世紀の屋敷地群が発見されている。

これらの集落は熊野街道に沿う、あるいは近在することで繁栄を享受することができた。なおこの時期になると、日根荘だけでなく、檀波羅丘陵西麓に沿って設けられた溜池からの水路によって、周辺の耕地開発も積極的に進められていった。

中世末～織豊期になると、熊野街道沿いの集落に代わって、港湾に近接し、しかも孝子越街道沿いという立地条件に恵まれた「佐野町場」が、漁撈や流通拠点として興隆し始めた。そして近世中期になると泉州有数の宿として発展をみせる。孝子越街道付近の遺跡は、主にこの時期のものである。

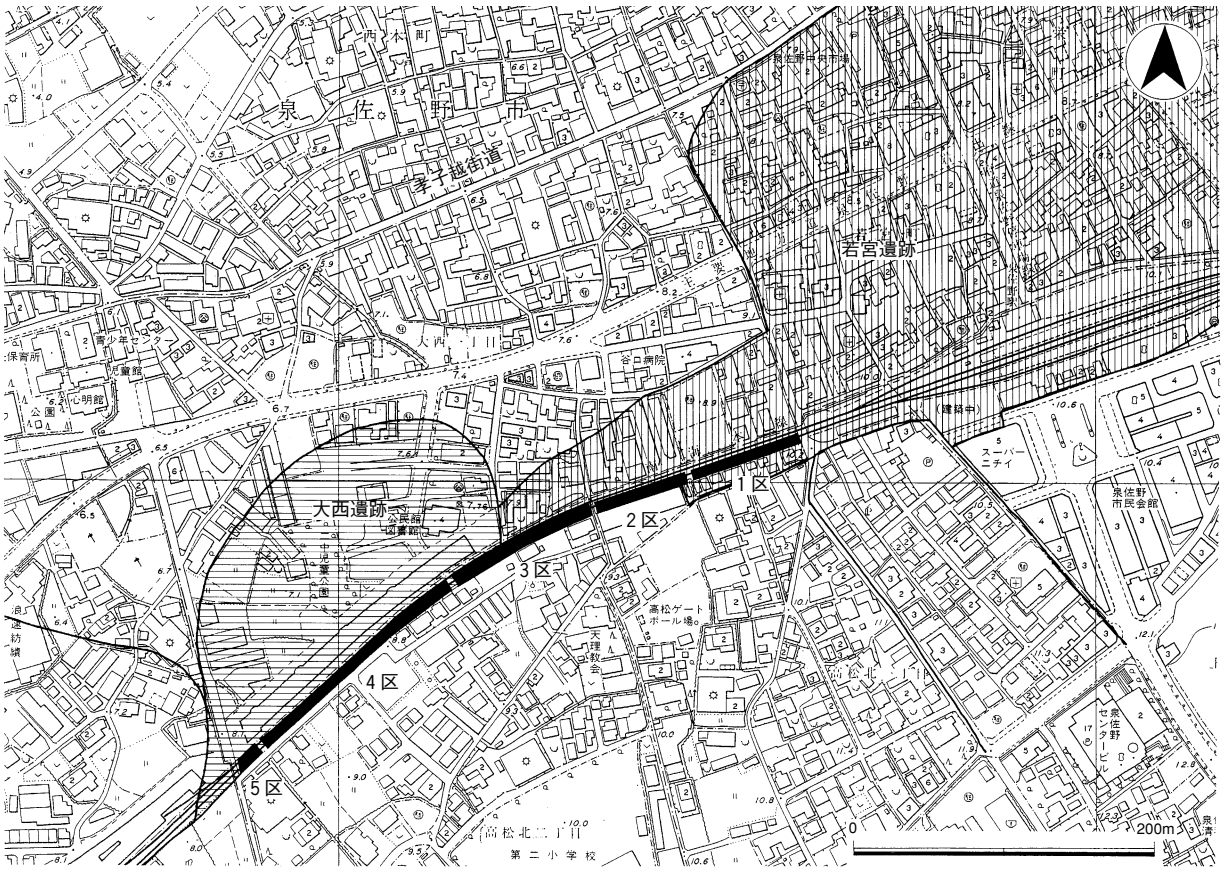
また近世前期には、檀波羅丘陵西麓に留まらず、中位段丘面上には大小の溜池の開削とそれらを結ぶ水路の整備が進み、丘陵裾部から海岸部近くまでの広い範囲にわたって新田開発も行なわれた。

若宮遺跡は、14世紀前半から集落形成が始る。15世紀代には一度集落は縮小するが、上町遺跡の衰退と入れ替わるように中世末に再び集落が拡大し、「佐野町場」の原型が生まれた。とはいうものの、この遺跡の主とした性格を表わすのは、「佐野町場」と関わる近世の遺構・遺物である。

大西遺跡でもまた中世の遺構・遺物は認められるが、「佐野町場」に近在するという地理的位置から、若宮遺跡と同様に、近世の遺構・遺物が主なものである。

大場遺跡でも龍泉窯青磁や白磁を始めとする中世の遺物が出土しているが、やはり主となる遺構・遺物は近世のものである。さらに「佐野町場」の南限を画する石列や大溝なども発見されている。

今回の調査でもまた、こうした中世の「市場」から近世の「町場」周辺にかけての開発状況の様相を知る調査成果を得ることができた。



第５図　調査地と若宮遺跡・大西遺跡

第３章　調査成果

第１節　基本層序

現基盤層下にはまず、明治30（1897）年以降に線路敷設のため施された盛土が各調査区いずれにおいても60～80㎝ほどの厚さで堆積している。

その下は褐色あるいは褐色味のある灰色系の粘・砂シルトを基調とする耕作土である。包含された遺物は、主として近世代の磁器、陶器の小片である。その製作年代からすると、18世紀中葉までには水田化されていて、明治30年代の線路敷設まで攪拌と客土を繰り返して耕作土が形成されたとみられる。

盛土中からは型紙摺絵や銅版転写による印判手の磁器が出土しているが、耕作土中には全く包含されていなかった。したがって攪乱部分を除き、線路敷設の盛土によって耕作土が密閉されていたといえる。

この耕作土を第１層、その上面を第１遺構面とした。この第１遺構面には主として、近世代の水田耕作に関わる遺構が分布している。

第１層は、最もよく残っている部分では40㎝ほどの厚さがあるが、上部が削平されているなどのために平均20㎝前後の厚さを認めるのみである。

４区の西端から東方25ｍの範囲および５区を除いて、第１層下は礫を含んだ黄橙色粘土である洪積層の地山となる。なお１区西辺から東方約16ｍの範囲では、それより東方で認められた第１層下の基盤層が下降し、その上にやや軟質の黄色系粘土が堆積していた。14年度の調査では、Ｔ.Ｐ.7.0～7.5ｍで認められる堅固さのある灰色系粘土までの間のこの黄色系粘土を中世包含層としている。

本年度の調査でも、その軟質粘土層を掘り下げてみた。その結果、瓦器片３点と土師器片１点の出土をみた。しかしいずれも１辺２㎝以下の細片であり、しかも上部からの出土であった。この４点以外に出土遺物はなく、包含層とは呼びがたい状況である。

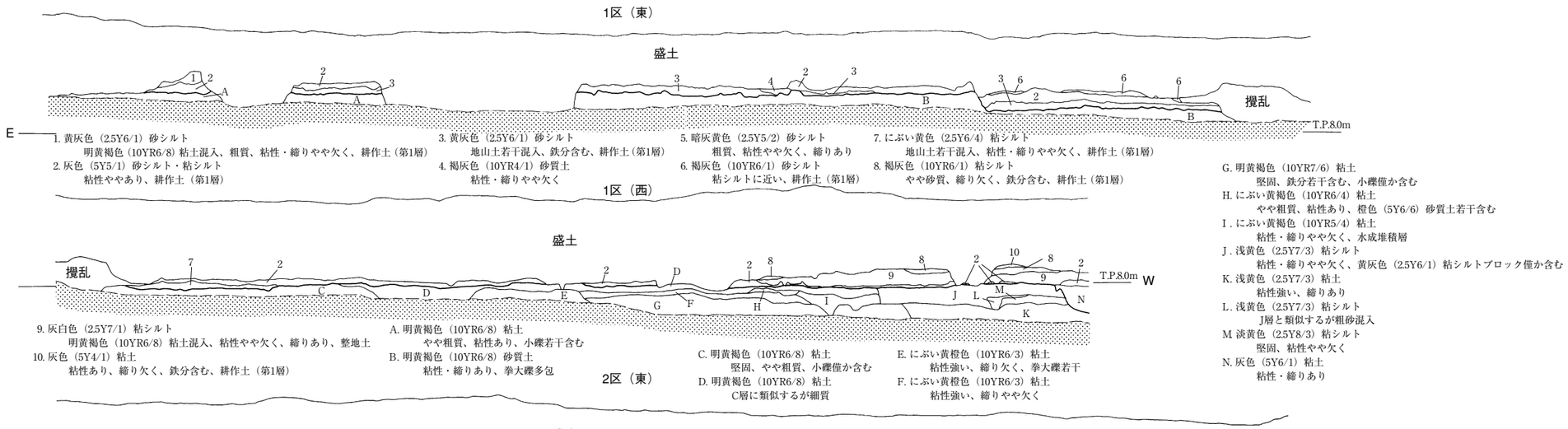
14年度の調査では、灰色系粘土上面でＪ13～18溝が検出されているが、いずれにも出土遺物は認められていない。したがって、本年度調査で出土した４片の遺物は、上層からの混入品である可能性が高い。

さらに、この範囲にトレンチ（トレンチ№１）を設定し、土層の状況を観察した。そこでは７・14層を除くと、周辺部で認められた地山は見当たらなかった。こうしたことから、１区西端付近の軟質粘土は小支谷内堆積土であり、小支谷は中世以前にすでに埋没していたと考えられる。よって粘土層下で検出した落込みは、人工的なものとは考え難い。なお軟質粘土層上面では耕作痕を検出している。

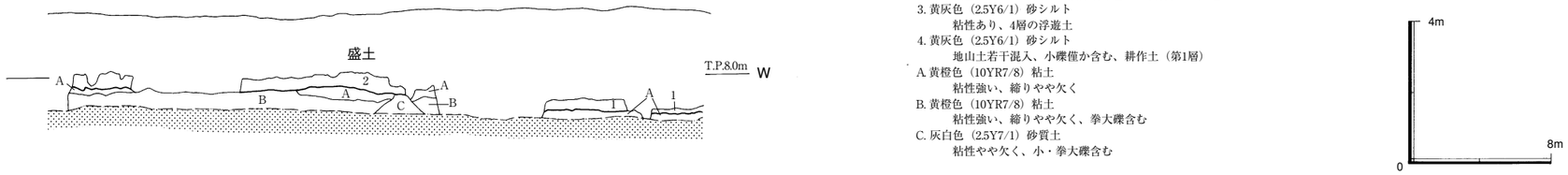
第１層下では地山面が現われ、それを第２遺構面とした。第２遺構面では、水田化される以前に形成された遺構が検出される。３区066土坑は中世にまで遡る可能性があるが、この面の遺構の多くは近世初頭から水田地となる17世紀末～18世紀中葉までの間に形成されたものである。

この第２遺構面は１区東端でＴ.Ｐ.8.6ｍ、同西端でＴ.Ｐ.8.0ｍ、２区東端でＴ.Ｐ.7.8ｍ、同西端でＴ.Ｐ.7.5ｍ、３区東端でＴ.Ｐ.7.8ｍ、同西端でＴ.Ｐ.7.9ｍ、４区東端でＴ.Ｐ.7.8ｍ、同西端より25ｍ東方でＴ.Ｐ.7.5ｍを測り、多少の起伏をしながらも西方に僅かづつ下降していく。

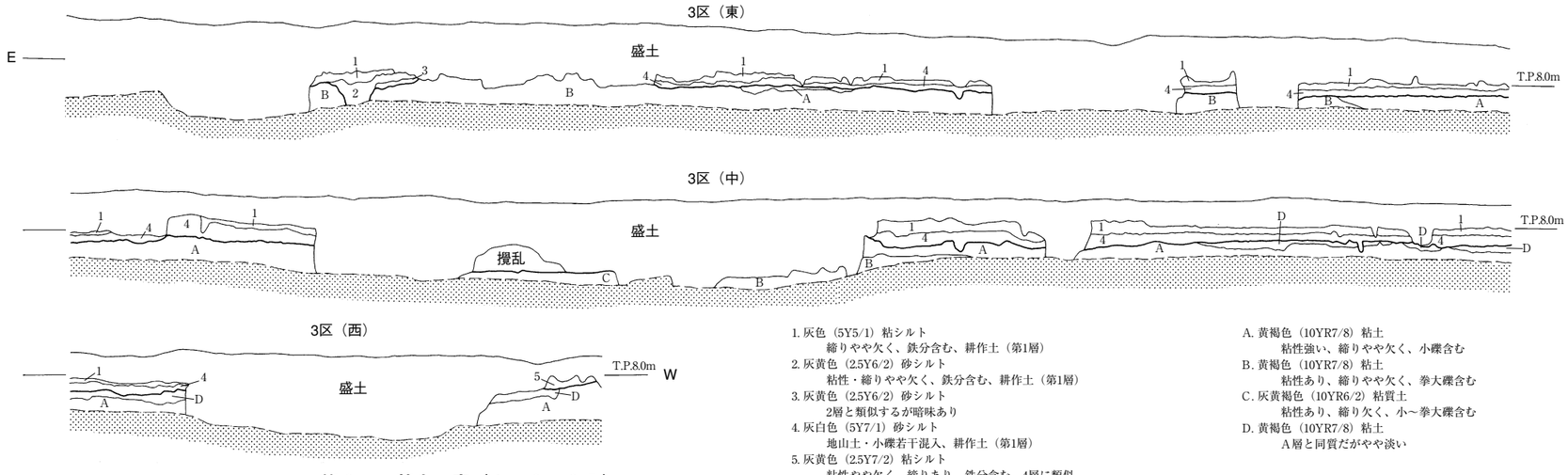
４区の西端から25ｍほどの範囲と５区では、第１層下は地山ではなく、灰色系の砂シルトとなる。白味のある上層（第２層）と黄色味のある下層（第２′層）に分離できるが、いずれも中世の遺物包含層である。よってこの範囲では第２層上面を第２遺構面、第２層下の地山面を第３遺構面とした。



1. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
明黄褐色（10YR6/8）粘土混入、粗質、粘性・締りやや欠く、耕作土（第1層）
2. 灰色（5Y5/1）砂シルト・粘シルト
粘性ややあり、耕作土（第1層）
3. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
地山土若干混入、鉄分含む、耕作土（第1層）
4. 褐灰色（10YR4/1）砂質土
粘性・締りやや欠く
5. 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂シルト
粗質、粘性やや欠く、締りあり
6. 褐灰色（10YR6/1）砂シルト
粘シルトに近い、耕作土（第1層）
7. にぶい黄色（2.5Y6/4）粘シルト
地山土若干混入、粘性・締りやや欠く、耕作土（第1層）
8. 褐灰色（10YR6/1）粘シルト
やや砂質、締り欠く、鉄分含む、耕作土（第1層）
9. 灰白色（2.5Y7/1）粘シルト
明黄褐色（10YR6/8）粘土混入、粘性やや欠く、締りあり、整地土
10. 灰色（5Y4/1）粘土
粘性あり、締り欠く、鉄分含む、耕作土（第1層）
A. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
やや粗質、粘性あり、小礫若干含む
B. 明黄褐色（10YR6/8）砂質土
粘性・締りあり、拳大礫多包
C. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
堅固、やや粗質、小礫僅か含む
D. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
C層に類似するが細質
E. にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土
粘性強い、締り欠く、拳大礫若干
F. にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土
粘性強い、締りやや欠く
G. 明黄褐色（10YR7/6）粘土
堅固、鉄分若干含む、小礫僅か含む
H. にぶい黄褐色（10YR6/4）粘土
やや粗質、粘性あり、橙色（5Y6/6）砂質土若干含む
I. にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土
粘性・締りやや欠く、水成堆積層
J. 浅黄色（2.5Y7/3）粘シルト
粘性・締りやや欠く、黄灰色（2.5Y6/1）粘シルトブロック僅か含む
K. 浅黄色（2.5Y7/3）粘土
粘性強い、締りあり
L. 浅黄色（2.5Y7/3）粘シルト
J層と類似するが粗砂混入
M. 淡黄色（2.5Y8/3）粘シルト
堅固、粘性やや欠く
N. 灰色（5Y6/1）粘土
粘性・締りあり



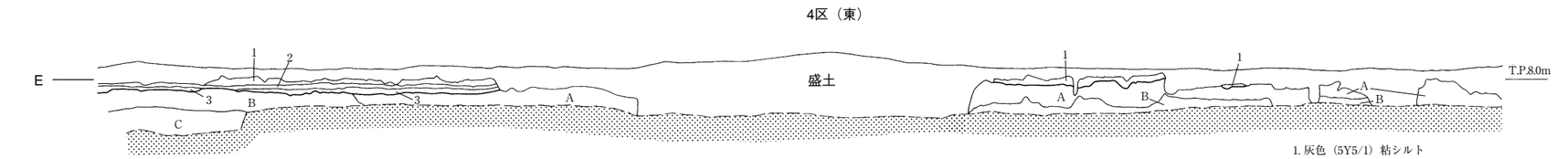
1. 灰色（5Y5/1）粘シルト
鉄分含む、締り欠く、耕作土（第1層）
2. 灰色（5Y6/1）粘シルト
粘性・締りやや欠く、鉄分若干含む、耕作土（第1層）
3. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
粘性あり、4層の浮遊土
4. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
地山土若干混入、小礫僅か含む、耕作土（第1層）
A. 黄橙色（10YR7/8）粘土
粘性強い、締りやや欠く
B. 黄橙色（10YR7/8）粘土
粘性強い、締りやや欠く、拳大礫含む
C. 灰白色（2.5Y7/1）砂質土
粘性やや欠く、小・拳大礫含む



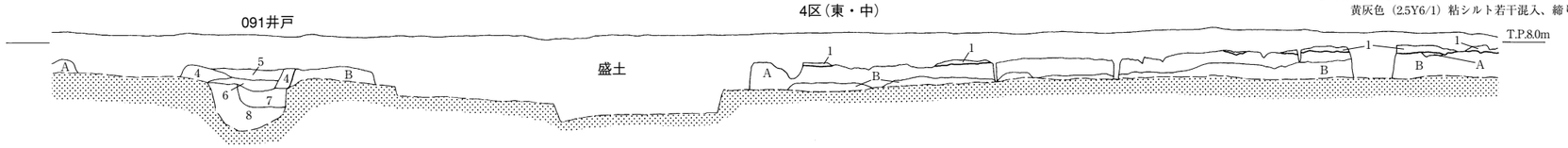
1. 灰色（5Y5/1）粘シルト
締りやや欠く、鉄分含む、耕作土（第1層）
2. 灰黄色（2.5Y6/2）砂シルト
粘性・締りやや欠く、鉄分含む、耕作土（第1層）
3. 灰黄色（2.5Y6/2）砂シルト
2層と類似するが暗味あり
4. 灰白色（5Y7/1）砂シルト
地山土・小礫若干混入、耕作土（第1層）
5. 灰黄色（2.5Y7/2）粘シルト
粘性やや欠く、締りあり、鉄分含む、4層に類似

A. 黄褐色（10YR7/8）粘土
粘性強い、締りやや欠く、小礫含む
B. 黄褐色（10YR7/8）粘土
粘性あり、締りやや欠く、拳大礫含む
C. 灰黄褐色（10YR6/2）粘質土
粘性あり、締り欠く、小～拳大礫含む
D. 黄褐色（10YR7/8）粘土
A層と同質だがやや淡い

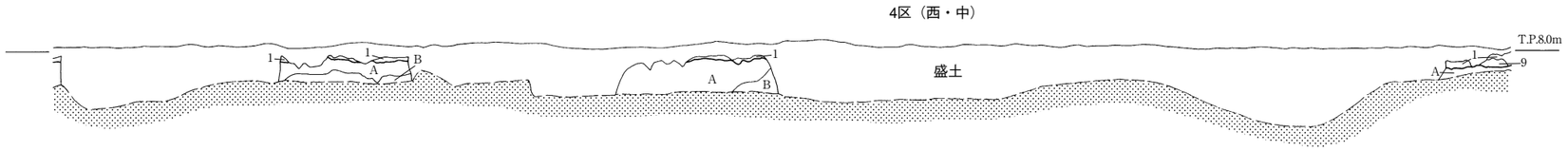
第６図　基本層序（１・２・３区）



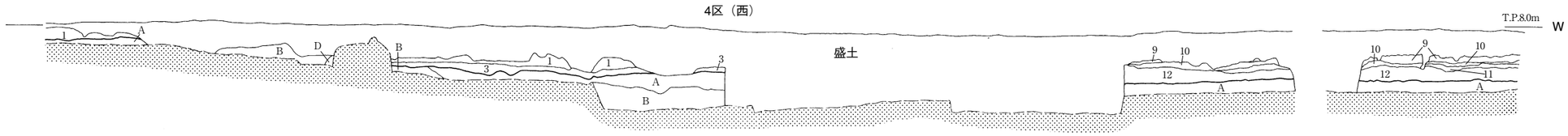
1. 灰色（5Y5/1）粘シルト
　鉄分含む、締りやや欠く、耕作土（第1層）
2. 明黄褐色（10YR6/8）砂シルト
　鉄分含む、締り欠く、やや粗質、床土
3. 灰色（5Y6/1）砂シルト
　079覆土
4. 明黄褐色（10YR6/8）粘土（091井戸）
　黄灰色（2.5Y6/1）粘シルト若干混入、締り欠く
5. 灰黄色（2.5Y6/2）砂シルト（091井戸）
　締りあり、炭化物僅か含む、破砕礫若干含む
6. 黄褐色（10YR7/8）粘土（091井戸）
　粘性強い、締りやや欠く、埋戻し土
7. 明黄褐色（10YR6/8）粘土（091井戸）
　締りやや欠く
8. 黄灰色（2.5Y6/1）粘土（091井戸）
　締り欠く、拳大礫多包

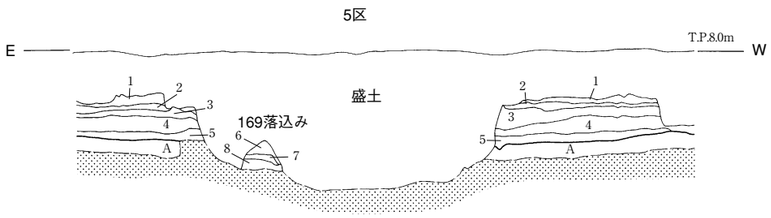


9. にぶい黄橙色（10YR6/4）粘シルト
　ブロック状、1層と同質、耕作土（第1層）
10. 灰白色（2.5Y7/1）砂シルト
　全体に酸化、中世包含層（第2層）
11. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
　締り欠く、地山土僅か含む、中世包含層（第2´層）
12. 黄灰色（2.5Y5/1）砂シルト
　締りやや欠く、地山土僅かに含む、粗質、中世包含層（第2´層）

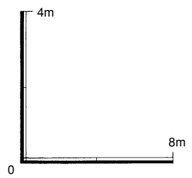


A. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性強い、締りやや欠く、鉄分含む、小礫若干含む
B. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性あり、締りやや欠く、拳大礫含む
C. 明黄褐色（10YR7/6）砂質土
　締り欠く、小～拳大礫多包
D. 灰色（5Y6/1）砂シルト
　鉄分含む、粘性・締りあり





1. 灰色（5Y5/1）砂シルト
　粘性・締り欠く、鉄分含む、小礫若干含む、耕作土（第1層）
2. 灰白色（5Y7/1）砂シルト
　全体に酸化、粘性・締り欠く、床土
3. 灰白色（2.5Y7/1）砂シルト
　全体に酸化、中世包含層（第2層）
4. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
　締り欠く、地山土若干含む、中世包含層（第2´層）
5. 黄灰色（2.5Y5/1）砂シルト
　粘性ややあり、締りやや欠く、地山土若干含む、中世包含層（第2´層）
6. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト（169落込み）
　粘性ややあり、地山土若干含む
7. 灰色（N4/1）粘土（落込み）
　粘性やや欠く、締りあり、地山土僅か含む
8. 灰色（5Y6/1）粗砂（169落込み）
　締り欠く、地山土・小礫僅か含む
A.明黄褐色（2.5Y6/8）粘土
　締りあり、小～拳大・破砕礫含む



第７図　基本層序（４・５区）

第２・２′層からは高台の退化した瓦器や瓦質の羽釜が出土しており、13世紀中葉～15世紀頃に形成された土層とみられる。第３遺構面は４区西端でＴ.Ｐ.7.4m、５区西端でＴ.Ｐ.7.1mほどで、地山の西方への下降が顕著である。

第２節　基盤層の調査

調査地の基盤層の状況を調べるために、９箇所のトレンチを設定した。

トレンチ№１は、１区西端における軟質の粘土層を明らかにするため、長さ34mにおよぶ長いものとなった。その結果、既述したように軟質粘土層は小支谷内堆積土であり、中世以降の遺構形成時における基盤層であったことが判明した。このトレンチにおける洪積礫層は、下部の７層と14層である。

トレンチ№２は、２区の東寄りに設定した。ここでは、黄褐色粘土層が20㎝弱の厚さで堆積している部分もみられたが、洪積礫層が露頭する箇所もあり、粘土層は概して薄い。

トレンチ№３は、２区の西寄りに設定した。部分的に粘土層が陥没したような堆積状況を示すが、１層下は洪積礫層である。

トレンチ№４は、３区の東寄りに設定した。ここでも１層下は洪積礫層である。

トレンチ№５は、３区の西寄りに設定した。黄褐色粘土層が20～30㎝の厚さで水平堆積しており、その下が洪積礫層である。

トレンチ№６は、４区中央付近に設定した。黄褐色粘土が最大40㎝ほど堆積するが、西にいくほど薄くなり、トレンチの途中で洪積礫層が露頭する。

トレンチ№７は、４区の中央やや西寄りに設定した。ここでは、黄褐色粘土層はトレンチの東端付近で僅かに認められるのみであり、洪積礫層の露頭が顕著であるが、礫層間に水成堆積状の粘土層（３層）を介在している。この状況はトレンチ№８でも認められた。

トレンチ№８は、４区の西寄りに設定した。黄褐色粘土層がごく薄く、部分的に認められるのみであり、洪積礫層が露頭している。このトレンチでも水成堆積状の粘土層（８層）が部分的に認められる。

トレンチ№９は、４区西端に設定した。ここでは黄褐色粘土層が30～60㎝の厚さで堆積している。これは、地形が緩やかに西方に下降していることと関連している。その粘土層下は洪積礫層である。

９箇所のトレンチの状況からわかるように、第１層である水田耕作土は、その大半が洪積礫層上に形成されている。トレンチ№５の状況が示すように、本来は礫層上に粘土層が発達していたのであろうが、もとより薄層であったためか、地形の改変を受けて消失した部分が多い。

第１遺構面に伴うとみられる耕作痕が地山の礫層上でも認められることもあり、水田化の時点では粘土層の多くは失われていたと考えられる。粘土層を攪拌し、水田耕作土とした可能性は高い。だがしかし、耕作土中に磁器や陶器などが含まれ、しかも複数点の化粧具も出土していることを考慮すれば、水田開発ののちも町場周辺の土が客土された可能性が高い。なお水田層の形成に伴って、中世期の遺構の多くも消滅したのであろう。

第３節　発掘調査の成果

１　第１遺構面の調査

（１）調査成果の概要

第１遺構面は、17世紀末～18世紀中葉に形成が始まり、19世紀末まで継続された水田耕作に伴う遺構

が主なものである。

１区では、調査区に平行する方向の畦やそれに伴う側溝、あるいは水田面の段などが検出された。

２区でも畦と段が検出された。ただし、東端と中央の畦は調査区と斜交する東西方向、西端の畦とその東の段は調査区に直交する方向であり、水田の区画取りに変化が生じている。

３区では、調査区に平行する北東－南西方向の畦と、調査区に斜交する南北方向の畦・側溝が検出された。

４区では、調査区中央で水田面を画するとみられる溝、および樋を検出した。このほか西半では、南北方向の畦・側溝、西端では北西－南東方向の耕作痕群が認められた。

５区では、著しい攪乱のため、遺構は検出されなかった。

（２）検出遺構

【１区】

005・006溝（第11図）

１区東半において、東西に平行して延びる２条の溝である。005溝は009畦の西方で途切れたようになっているが、約60ｍにわたって検出された。また006溝は29ｍの長さで検出された。幅はともに上辺で0.4～0.5ｍ、下辺0.2ｍ前後を測り、断面逆台形を呈している。両溝間の地山の掘り残し部分が畦となり、両溝はその側溝にあたる。１区東半では、広い範囲で地山直上まで攪乱を受けているため、畦上部をなす盛土部分の状況については不明である。

調査区東壁をみると、005溝の覆土が褐灰色砂質土、006溝が灰黄褐色粘土であるが、両溝とも砂質土が基本的な堆積土であり、周辺の耕作土が流入して形成されたものである。両溝の外脇には堤状の高まりは認められず、耕作土が広がっているが、006溝の南では30～40㎝の幅で掘り残した地山の畦状の高まりがあったのち、約10㎝下がって耕作土（７層）が広がる。開墾された当初には、006溝の南辺には堤状の高まりがあったが、耕作土のかさ上げに伴って消滅したとみられる。なお耕作土との間に横板をわたしていた痕跡は認められなかったものの、その可能性は否定しきれない。

005溝からは磁器、陶器、土器、瓦器、瓦および土錘、泥面子が出土した。磁器には肥前系、瀬戸・美濃系、波佐見・平戸系がある。肥前系の碗には18世紀後葉～19世紀中葉に時期比定できるものがあり、鉄道線路が敷設された明治33（1897）年に近い時期であり、耕作土の終焉期を示している。

陶器には唐津焼と瀬戸・美濃系が認められる。土器には灯明皿（143）があるが、大半は小片のため器種などについての詳細は不明である。

瓦器は２点出土しているが、そのうち１点（21）を図示した。瓦も破片２点が出土していて、そのうち１点（197）を掲載した。また泥面子（163）、煙管（157）も図示した。

006溝からは磁器、陶器、瓦が出土している。磁器には肥前系、陶器には瀬戸・美濃系が認められる。瓦には桟瓦の破片も含まれていた。

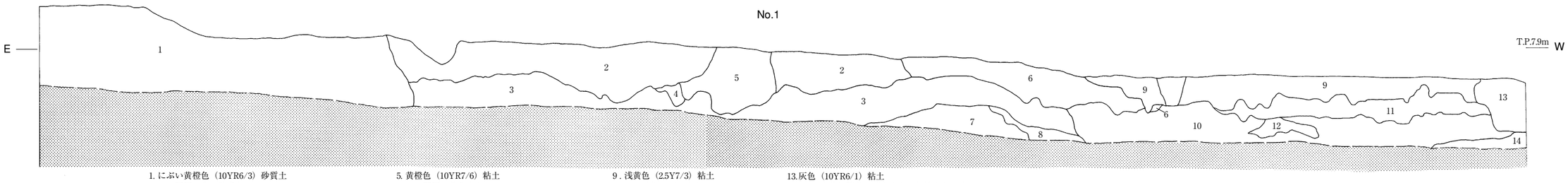
【４区】

075小穴（第12図）

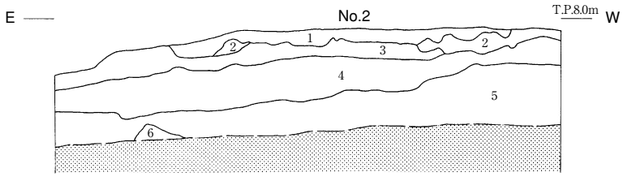
077溝の北東端と重複する小穴である。１辺１ｍほどで、隅丸方形を呈する。深さは約10㎝、覆土は暗灰黄色砂シルトの単一層であり、周辺の耕作土の再堆積土とみられる。出土遺物はなかった。

076溝（第12図）

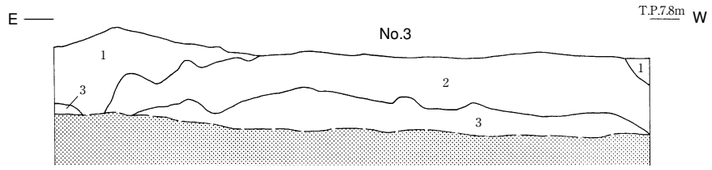
４区中央に位置する。調査区と平行する北東－南西方向に主軸をとる。北東端は地山と徐々に同化し



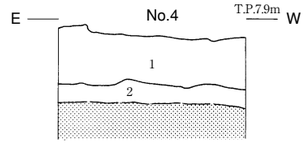
1. にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
　堅固、拳大礫多包
2. 橙色（7.5YR6/8）粘土
　粘性あり、破砕礫若干混入、鉄分含む
3. 明褐色（7.5YR5/8）粘土
　2層に類似するがやや粗質、径3cm以下の礫若干
4. 黄橙色（10YR7/6）粘土
　堅固、全体にくすむ
5. 黄橙色（10YR7/6）粘土
　堅固、鉄分含む
6. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
　粘性あり、締りやや欠く、細礫僅かに含む
7. にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
　締りあり、粗砂・拳大礫多包
8. にぶい黄橙色（10YR6/3）粗砂
　締り欠く、粗質
9. 浅黄色（2.5Y7/3）粘土
　粘性・締りあり
10. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　堅固、灰白色（2.5Y/1）粘土混入
11. 黄橙色（10YR8/8）粘土
　粘性・締りあり、10層の再堆積か
12. 灰黄褐色（10YR6/1）砂質土
　粗質、細礫含む
13. 灰色（10YR6/1）粘土
　全体に酸化、締りあり、粘性やや欠く
14. 緑灰色（10GY6/1）砂質土
　堅固、拳大礫多包



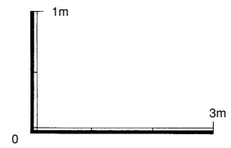
1. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　粘性・締りあり
2. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性・締りあり、拳大礫含む
3. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
　粘性あり、締りやや欠く
4. 黄橙色（10YR7/8）砂質土
　同色の粘土混入、拳大礫含む
5. 黄橙色（10YR7/8）砂質土
　4層に近似、礫混入少ない
6. にぶい黄橙色（10YR6/4）粗砂
　締りあり、小礫若干含む

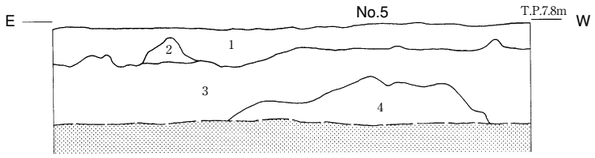


1. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性・締りあり
2. 黄橙色（10YR7/8）砂質土
　粘性・締りあり、やや粗質、拳大礫多包
3. 黄橙色（10YR7/6）砂質土
　締りあり、小礫多包・拳大礫若干含む



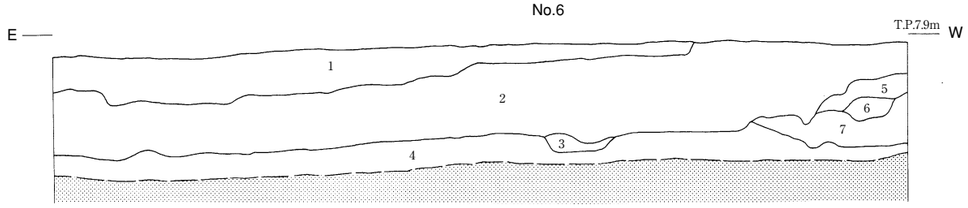
1. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　粘性あり、拳大礫含む
2. 明黄褐色砂質土（10YR7/6）砂・粘質土
　粗質、小礫含む



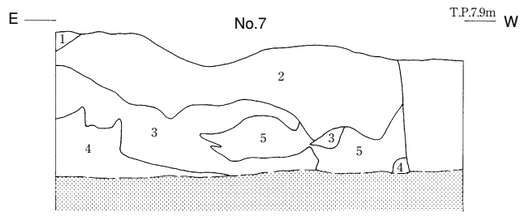


1. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　粘性・締りあり、小礫僅か含む
2. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　1層と同質土だが拳大礫含む
3. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　粘性あり、粗質、拳大礫含む
4. 明黄褐色（10YR7/6）粘質土
　粗質、小礫含む

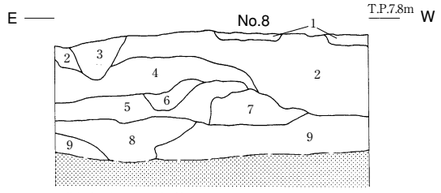
No.6



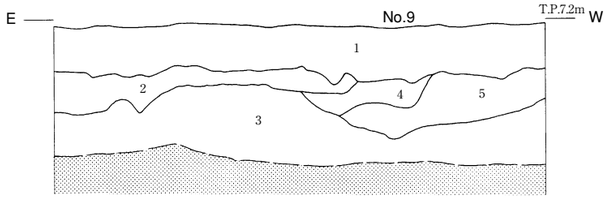
1. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　粘性あり、締りやや欠く、小礫僅か含む
2. 黄褐色（10YR7/8）粘土
　締りやや欠く、粗質、拳大礫多包
3. 黄橙色（10YR7/8）粗砂
　締りやや欠く、小礫僅か含む
4. 明黄褐色（10YR6/6）砂質土
　締りあり、粗質、拳大礫多包
5. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性・締りやや欠く、小礫若干含む
6. 明黄橙色（10YR7/6）粘土
　粘性・締りやや欠く、拳大礫多包
7. 明黄橙色（10YR7/6）粘土
　灰白色（10YR7/1）粘土ラミナー状に含む、粘性あり、締りやや欠く



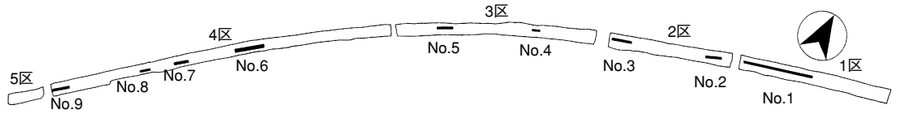
1. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性強い、小礫僅か含む、鉄分あり
2. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　締りやや欠く、拳大礫多包
3. 明黄褐色（10Y R 7/6）粘土
　灰白色（10Y R 7/1）粘土ラミナー状に含む、粘性強い、締りやや欠く、小礫僅か含む
4. 明黄褐色（10Y R 6/6）砂質土
　締りあり、拳大礫多包
5. 黄褐色（10Y R 7/8）砂質土
　粗質、締りやや欠く、小・拳大礫含む



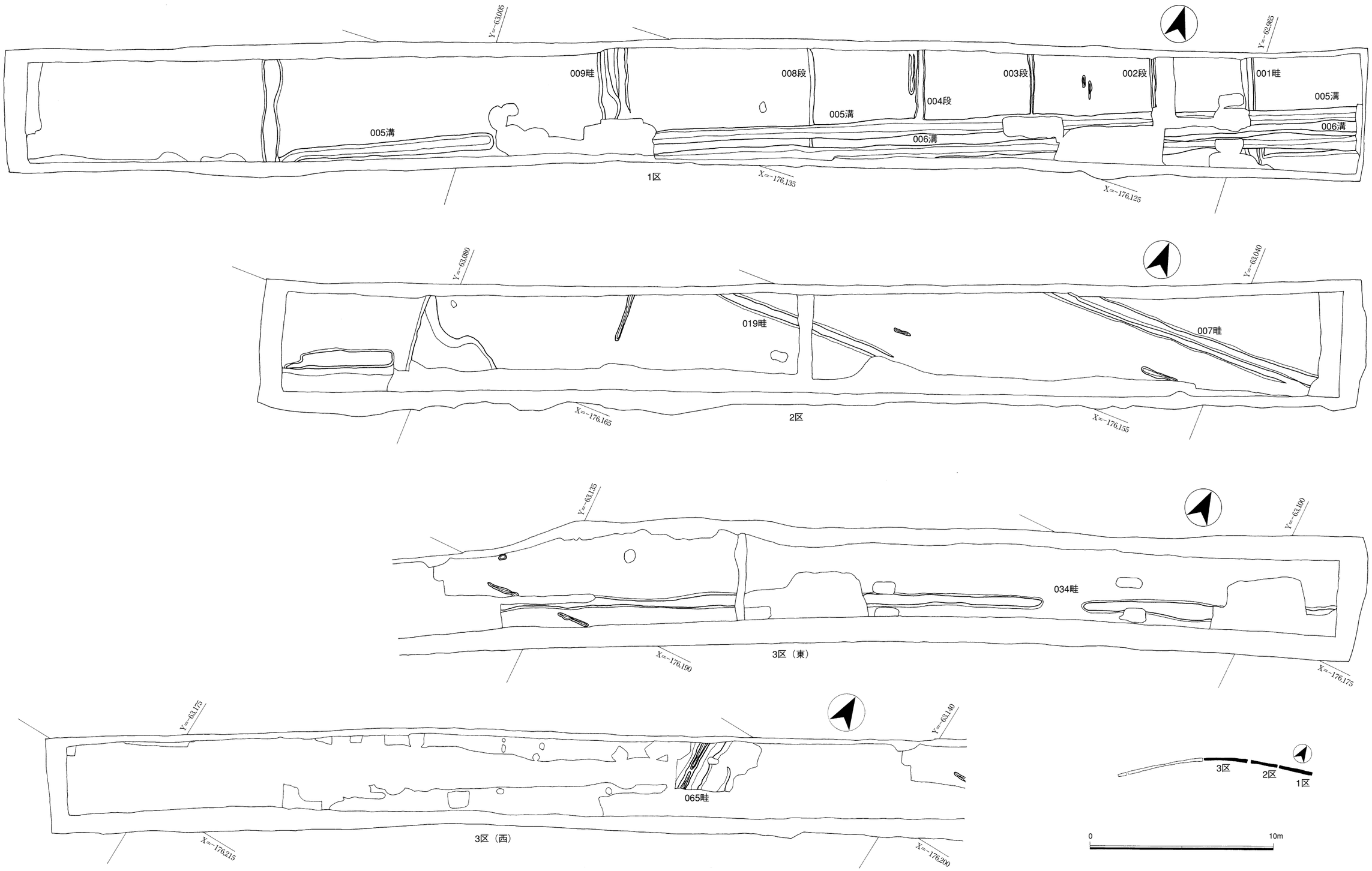
1. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　粘性強い、小礫僅か含む、鉄分あり
2. 黄橙色（10YR7/8）粘土
　締りやや欠く、拳大礫多包
3. 明黄褐色（10YR7/6）砂質土
　締りやや欠く、小～拳大礫多包
4. 黄褐色（10YR7/8）粘質土
　締りやや欠く、小礫・破砕礫多包
5. 明黄褐色（10YR6/6）砂
　同色の粘土混入、締りやや欠く
6. 黄褐色（10YR7/8）砂
　締りやや欠く、小礫若干含む
7. 黄褐色（10YR7/8）砂質土
　粗質、締りやや欠く、小・拳大礫含む
8. 明黄褐色（10YR）粘土
　灰白色（10YR7/1）粘土ラミナー状に含む、粘性強い、締りやや欠く、小礫僅か含む
9. 明黄褐色（10YR6/6）砂質土
　締りあり、拳大礫多包



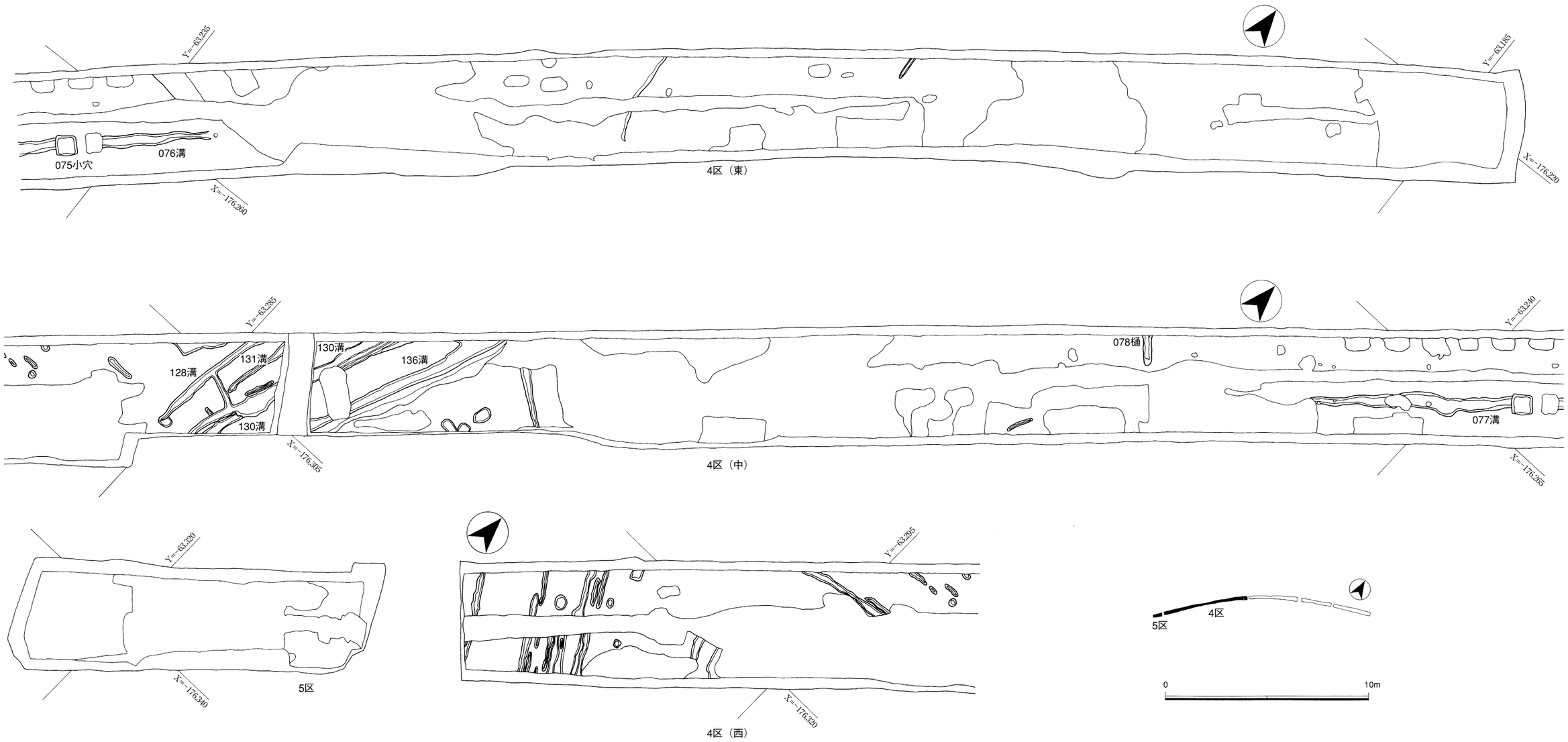
1. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
　粘性強い、締りあり、鉄分含む
2. 明黄褐色（10YR6/8）粘土
　1層と同質土だが色調淡い
3. 明黄褐色（2.5Y6/8）粘土
　締りあり、小・拳大・破砕礫含む
4. 明黄褐色（2.5Y6/8）粘土
　2層と同質土だが礫やや少ない
5. 明黄褐色（2.5Y6/8）粘土
　2層と同質土だが礫やや少ない破砕礫少ない



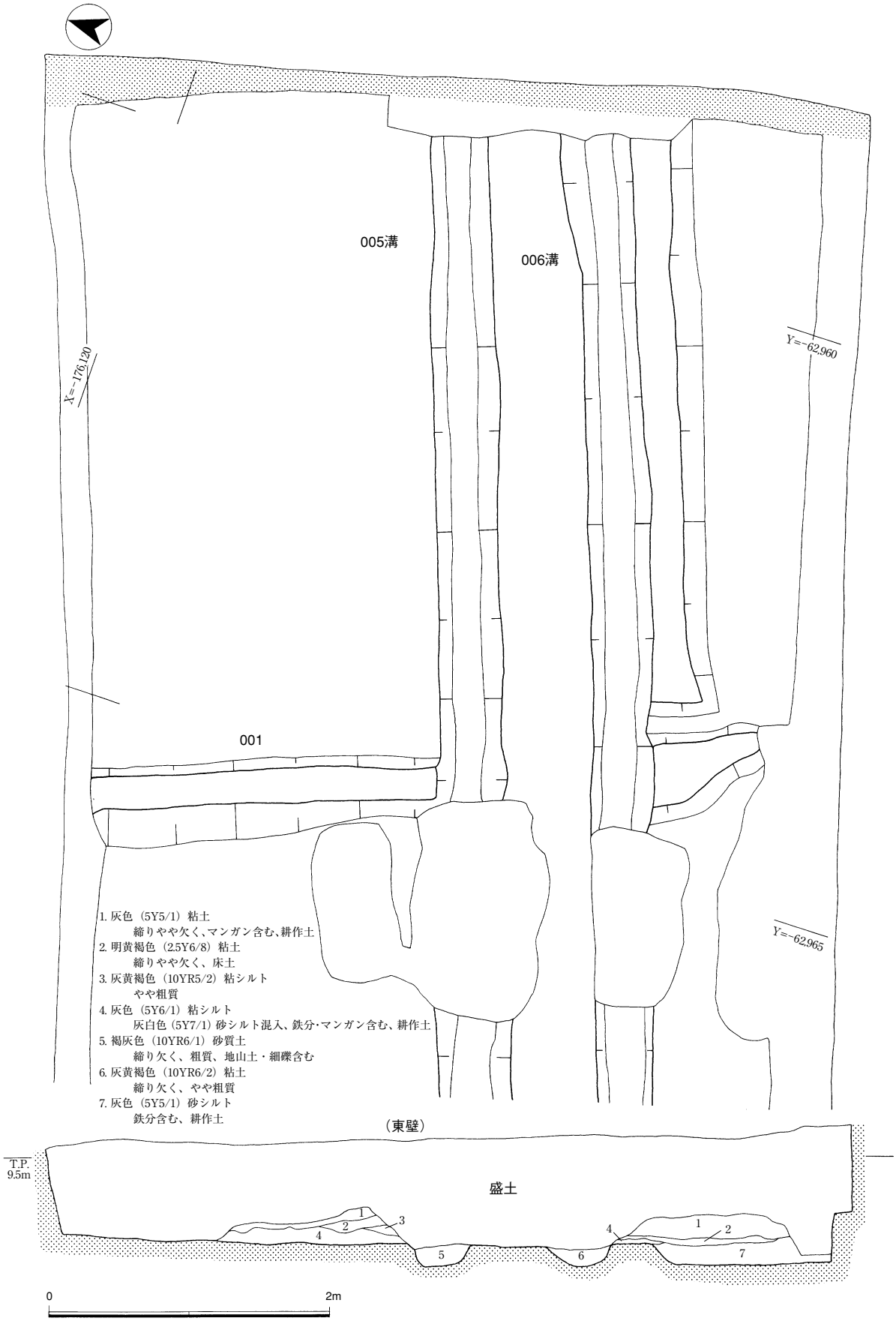
第８図　トレンチ土層



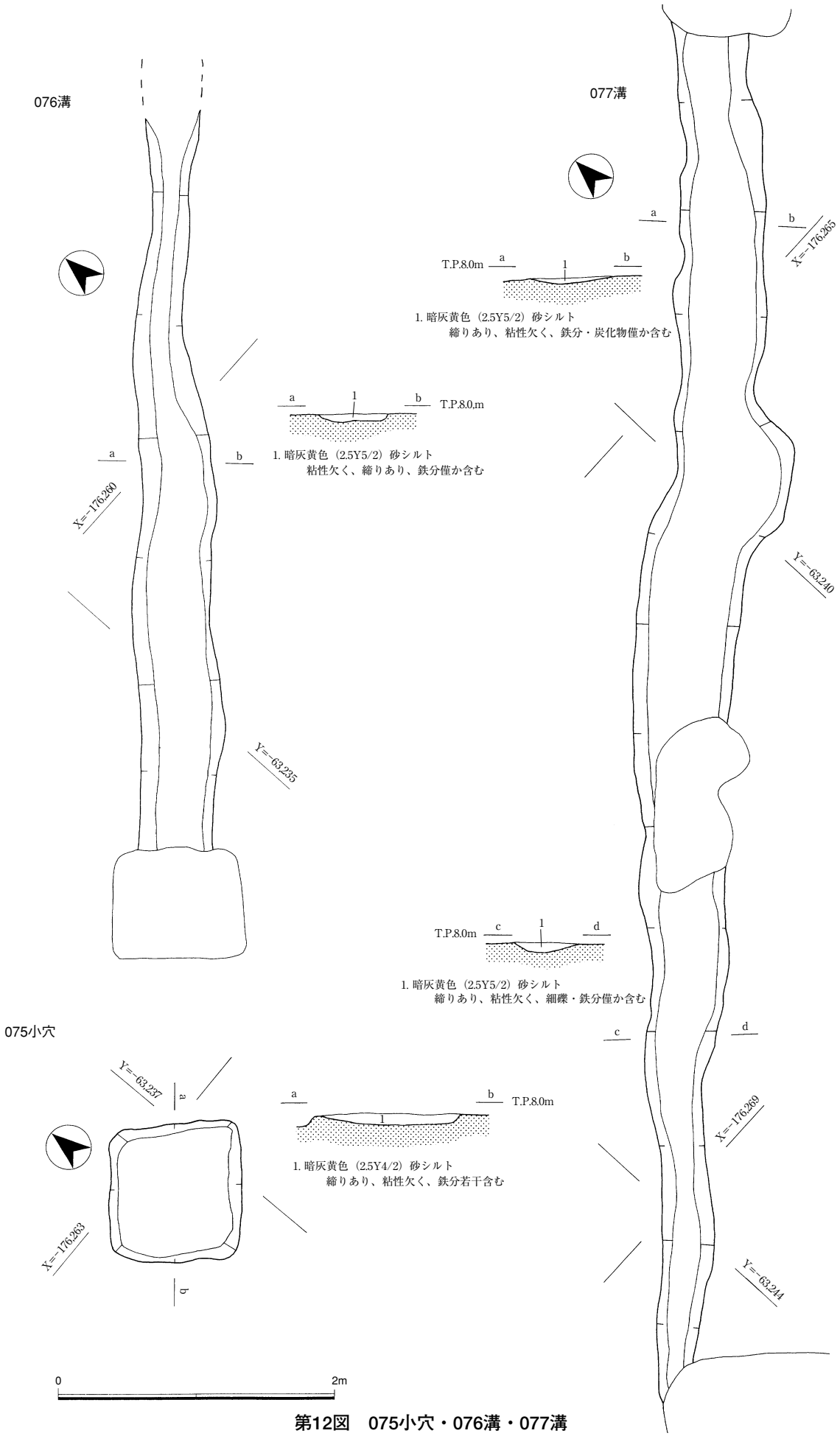
第９図　第１遺構面（１・２・３区）



第10図　第１遺構面（４・５区）



第11図　005・006溝



第12図　075小穴・076溝・077溝

ていく。また南西端は攪乱されている。南西端のさらに南西には同規模の077溝が同方向に走行しており、同一溝の可能性が高い。しかし、最小でも50㎝の途切れた部分があるため、別遺構として扱った。

検出長約５ｍ、幅は0.3～0.6ｍ、深さは10㎝以下であり、先述のように北東端では周辺の地山との比高差がなくなる。覆土は、暗灰黄色砂シルトの単一層である。これは耕作土の再堆積土である。側縁に畦とみられる痕跡は認められなかったが、077溝とともに水田面を分ける区画溝と捉えておきたい。

なお磁器碗の破片が１点出土した。小片であるため図示できないが、肥前系で、17世紀末～18世紀後半のものである。

077溝（第12図）

076溝の南西延長上にある溝で、076溝と同じく北東－南西方向に主軸をとる。検出長は約9.5ｍ、幅や深さは076溝とほぼ同一である。北東端は075小穴により切り込まれ、また南西端は攪乱を受けているため全容は不明である。

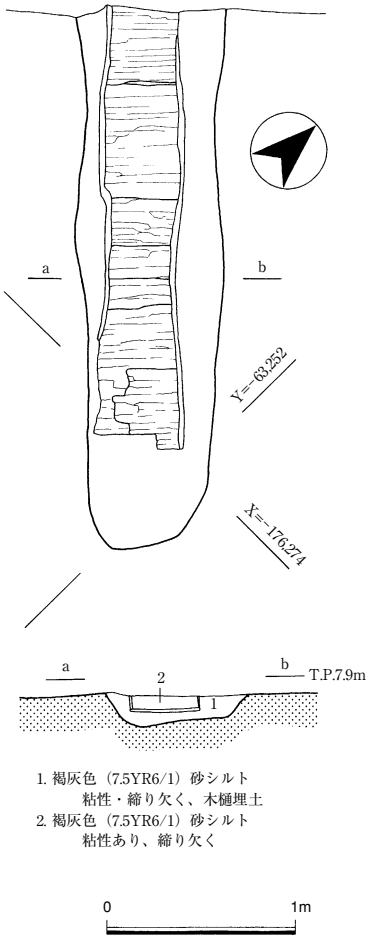
覆土も076溝と同じく、耕作土の再堆積土とみられる暗灰黄色砂シルトの単一層である。

磁器の破片が数点出土したが、そのうちの１点は菊花形紅猪口（72）である。肥前系で17世紀末～18世紀中葉に製作年代が求められる。

078樋（第13図）

４区の東寄りに位置する。現状において、掘方は長さ2.85ｍ、幅0.6～0.8ｍ、樋本体は長さ2.3ｍ、幅0.4～0.5ｍである。縦幅40～50㎝、横幅30～40㎝程度の板材を、木目方向を横にして敷き並べ、その縁辺に長さ40～80㎝の板材を部分的に重ねながら直列させて側板としている。蓋材は全く検出されなかったが、蓋を架構し、暗渠にしたとみられる。掘方は、北西端に比べて南東端が20㎝ほど高く、北西方向への通水であったといえる。

樋の南東端は、掘方が次第に浅くなり、地山と同化してしまう。また50㎝も間をあけないで、攪乱が調査区南辺まで及んでいるため、樋の最終状況については不明である。また北西部分は調査区外に延び出ているが、14年度調査では樋を捉えていない。よってこの樋がどのような機能を果たしていたかは不明である。なお出土遺物はなかった。



第13図　078樋

128・130・131・136溝（第14図）

４区西端近くに位置する溝群で、131溝を除いて畦の側溝である。136溝の東脇で、東からの地山が30～40㎝下降し、136溝はその段に沿って南北に走行して水田面の境を形成する。幅は北側が広く80㎝、南側は30～50㎝である。深さは10㎝前後である。覆土は灰色砂シルトを混入した灰色粘土で、耕作土の再堆積土とみられる。出土遺物は、瀬戸・美濃系磁器碗の小片１点と土錘２点のみである。

130溝は、136溝の西約1.5ｍにあり、それと平行して南北方向に走行している。したがって両溝間1.5ｍが畦となる。検出長11.7ｍを測る。北端では底面の一部に掘り残しがみられ、また南端近くでは幅を狭めている。深さは５～10㎝と浅い。覆土は黄灰色砂シルトの単一層で、耕作土の再堆積土とみられる。陶器の小片１点が出土したのみである。

128溝は、130溝の西1.2～2.0mにあり、それと平行して南北方向に走行している。したがって両溝間もまた畦といえるが、その上に作物などが小規模に植えられていた可能性はある。検出長は６ｍほどで、現状では調査区南辺から約１ｍの地点で終っている。幅は40㎝前後で、130溝や136溝よりは狭いが、005溝や006溝と比べても格差はない。ただし、深さは５㎝ほどと浅い。覆土は灰色の砂質土あるいは粘土であり、やはり耕作土の再堆積土である。青磁の小片１点が出土したが、第２層からの混入であろう。

131溝は、130溝と128溝を側溝とする畦の中央に位置する。検出長3.5m、幅0.2～0.3mで、深さは２～３㎝と浅い。耕作痕の可能性が高く、畦上で小規模な耕作が行なわれていたことを示唆する。なお土器の小片２点が出土したが、器種などについては不明である。

２　第２遺構面の調査

（１）調査成果の概要

１区では、調査区に直交する溝１条のほかは、小穴が認められただけである。また既述したように、西端近くの下部粘土層上面で検出された落込みは、人為的なものではないとみられる。

２区では、２基の土坑のほか、小穴が検出されただけである。

３区では、検出された遺構が多い。なかでも素掘りの井戸２基はともに野井戸とみられ、水田化される前は畑地であった可能性を示し、土地利用の変遷を考える上で重要である。

４区でも素掘りの井戸１基が検出された。それ以外、土坑２基や複数の小穴などがある。

５区では、調査区に平行および直交する溝が検出され、そのほか土坑と小穴が認められた。

（２）検出遺構

【１区】

027溝（第17図）

１区の東寄りに位置する。北は調査区外に延び出ていて、また南は第１遺構面の005溝などと重複しているため、全容は不明である。現状での長さは3.3mを測る。西辺が鍵手状に屈曲していて、そのため、現状の北端の幅が1.45mであるのに対して南端では0.65mと狭くなっている。覆土は、幅の広狭に関わらず黄灰色砂シルトの単一層である。

出土遺物には、磁器、土器、そしてサヌカイト片がある。磁器には肥前系とみられる破片があるが、器種や製作年代については不明である。土器には灯明皿の破片もある。サヌカイト片（213）のみ図示した。時期比定はできない。

036落込み（第17図）

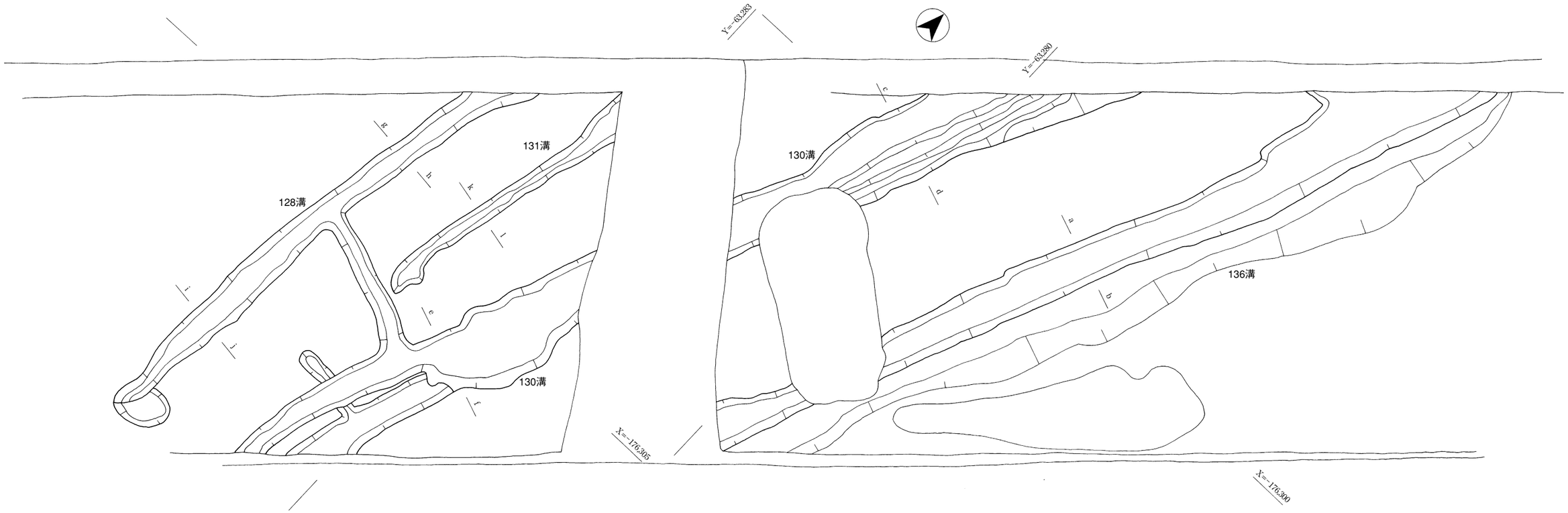
１区西端付近に位置する。既述のように、１区では西端より16mにわたって基盤層が下降していて、この落込みはその範囲に堆積する軟質粘土層下で検出された。また14年度調査区で検出されたＪ14溝の南延長にあたるとみられる。

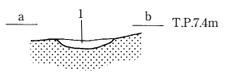
現状での長さは4.5m、最大幅1.2m、深さは35㎝を測る。一見すると溝を思わせるが、壁体、ことに西壁は基盤層との境界が不明瞭である。遺物の出土もなく、しかも周囲の基盤層から生じる湧水が激しい。こうした点を勘案すると、人工的な溝ではなく、自然流路の一部であると捉えるのが妥当と考える。この基盤層が下がった範囲で検出された他の落込みもまた、人為的なものとは考えられない。

【２区】

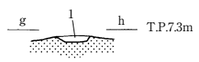
022土坑（第18図）

２区の西寄りに位置する。北半が調査区外に延び出ていて、全形を捉えることはできない。現状では

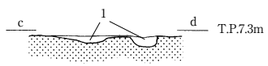




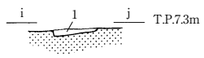
1. 灰色（N5/0）粘土
灰色（N5/0）砂・灰色（5Y6/1）粘シルト混入、締りやや欠く



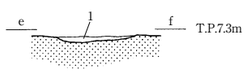
1. 灰色（5Y5/1）砂質土
粘性・締りやや欠く、地山土・鉄分含む



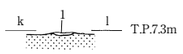
1. 黄灰色（2.5Y5/1）砂シルト
粘性やや欠く、小礫・地山土・鉄分若干含む



1. 灰色（5Y5/1）砂質土
粘性やや欠く、締りあり、細礫・地山土僅か含む、粗質

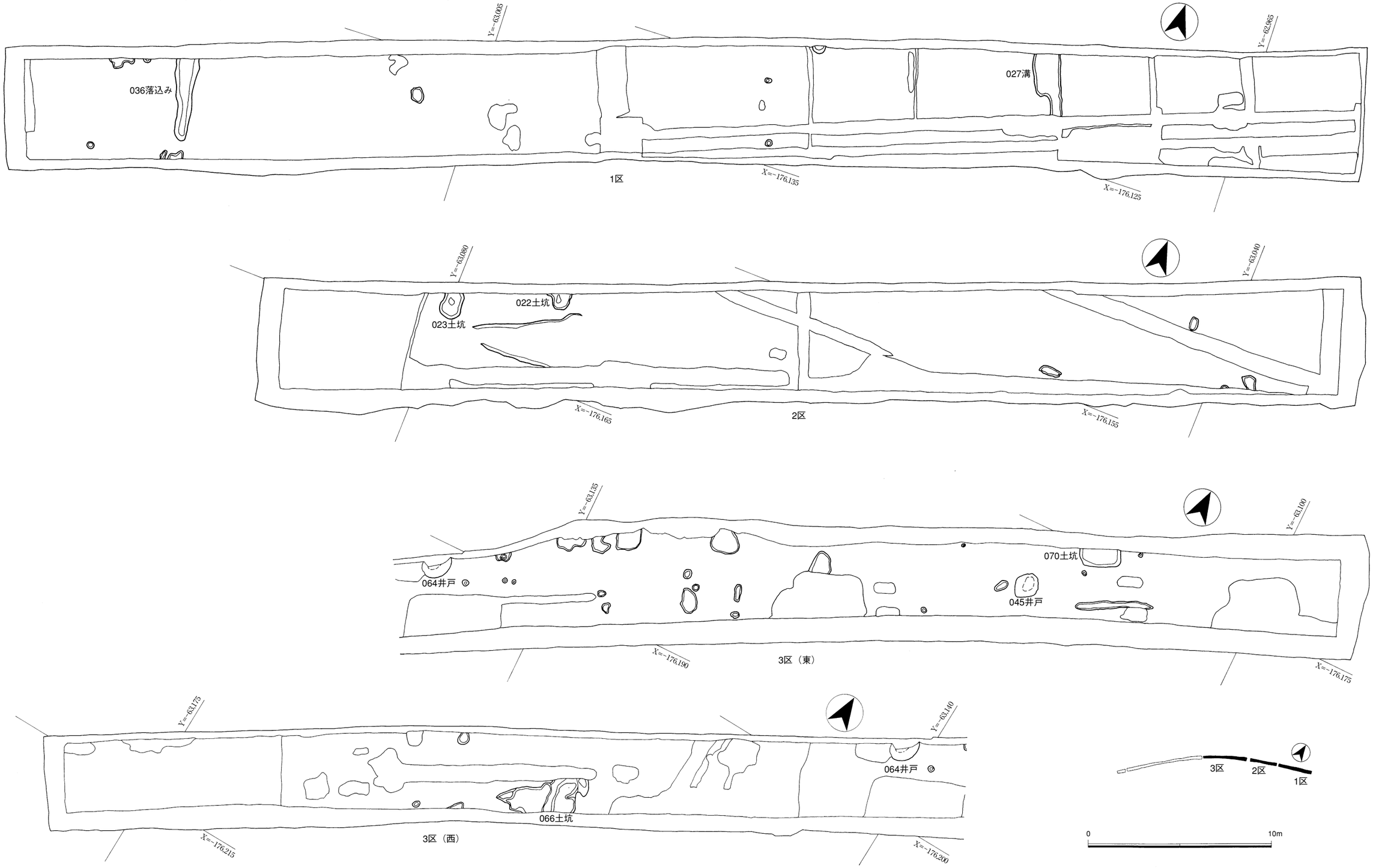


1. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
粘性やや欠く、締りあり、細礫・地山土若干含む

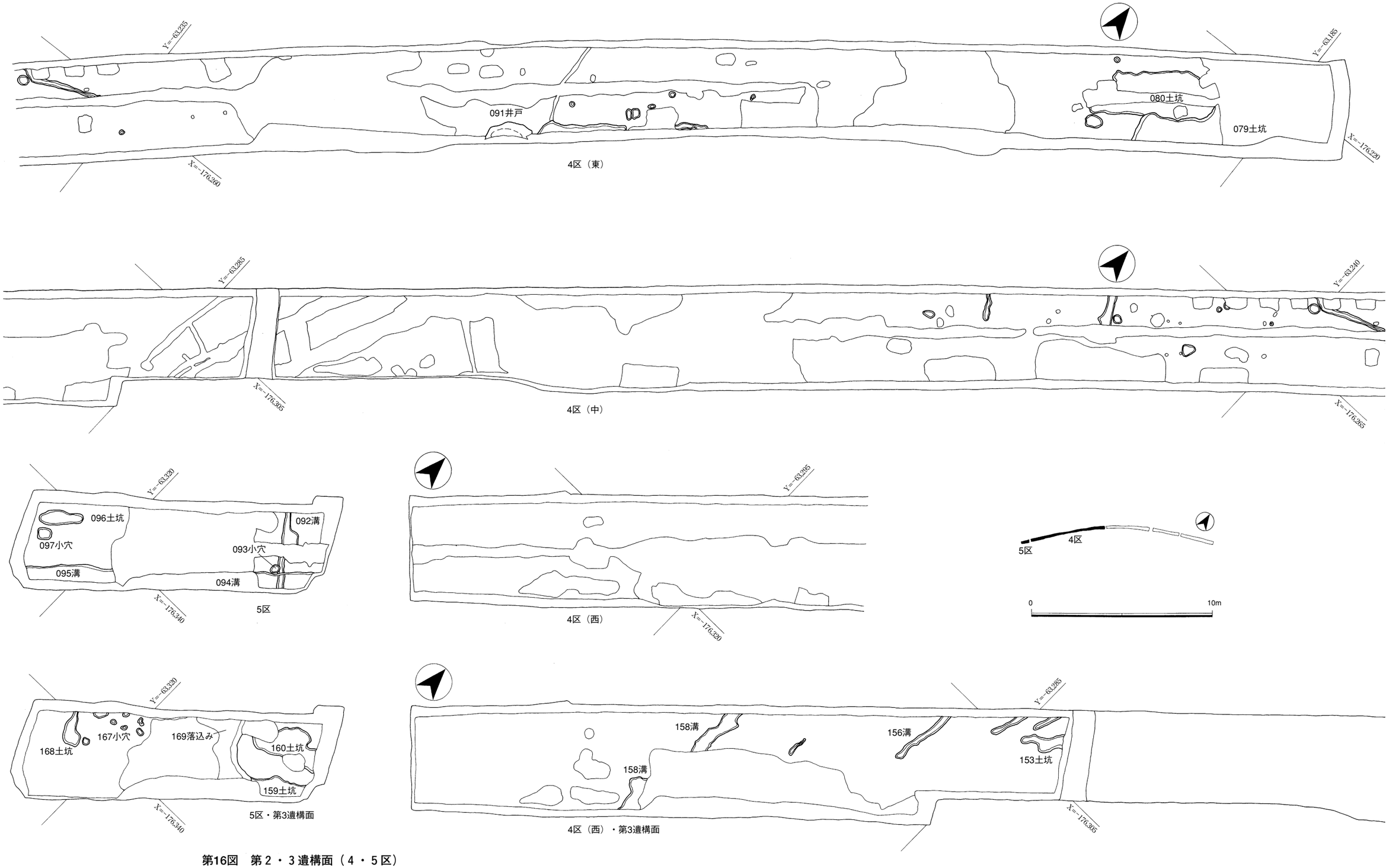


1. 灰色（5Y6/1）砂質土
締り欠く、地山土・細礫若干含む

第14図　128溝・130溝・131溝・136溝



第15図　第２遺構面（１・２・３区）



第16図　第２・３遺構面（４・５区）

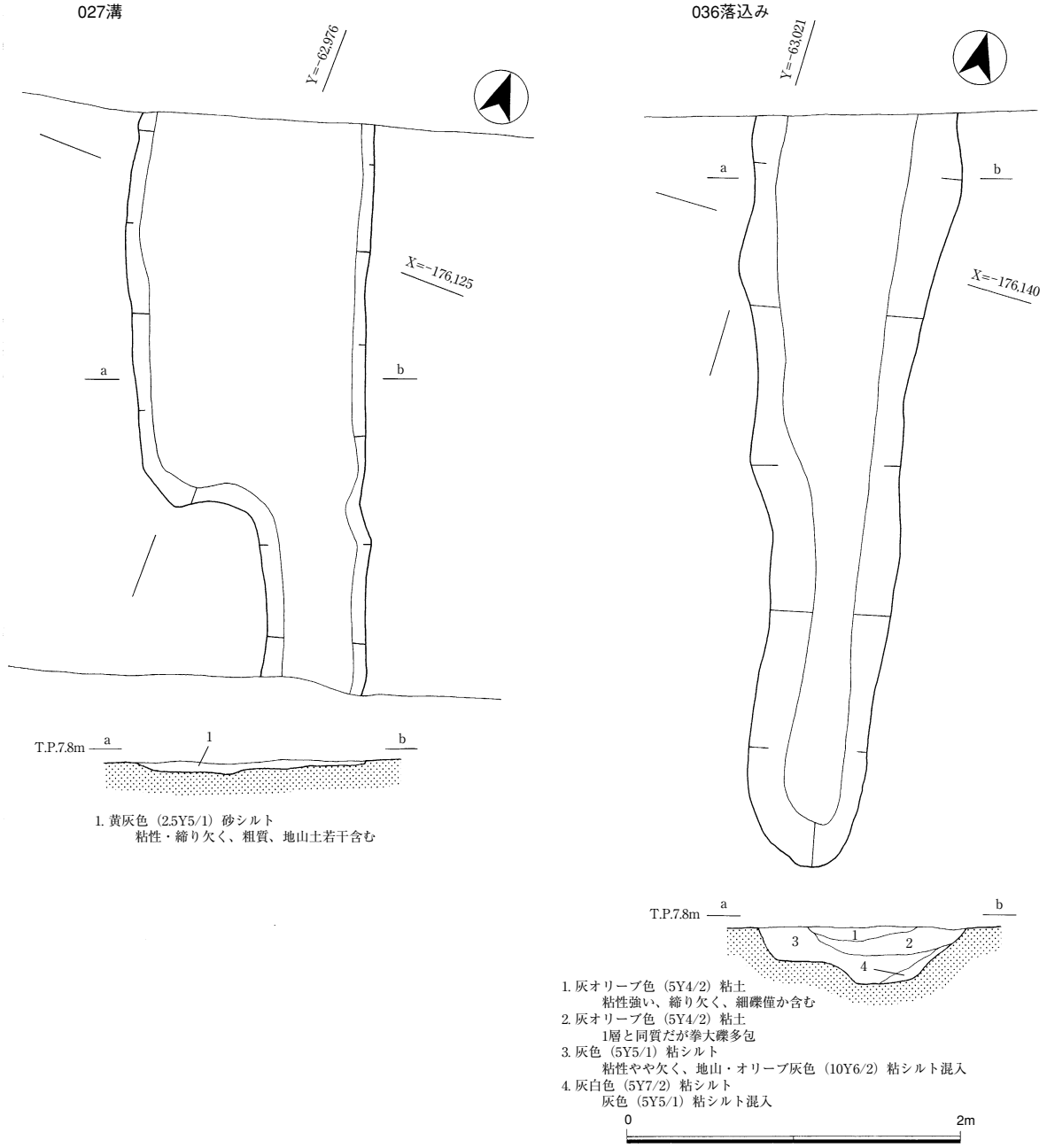
南北最大0.8m、東西1.35mを測る。深さは、最大９㎝であるにすぎない。

底面は、部分的に１段低くなるほかはほぼ平坦である。覆土は黄灰色砂シルトを基調とし、混入土の違いにより２分される。出土遺物はなかった。

023土坑（第18図）

２区の西寄りに位置する。北部分が調査区外に延び出ているが、平面形は隅丸長方形に近いとみられる。現状での最大長は1.5m、幅は1.2mを測る。中央に長円形を呈する攪乱を受けている。

底面は中央に向かって緩やかに下降し、深さは17㎝を測る。覆土は黄灰色砂シルトを基調とし、上層をなす１層には焼土・炭化物が含まれている。本土坑周辺では、焼土・炭化物を含む覆土が認められた遺構はなく、成因は不明である。



第17図　027溝・036溝

出土遺物は、２点の土器片にすぎない。そのうち１点は真蛸壺とみられる。

【３区】

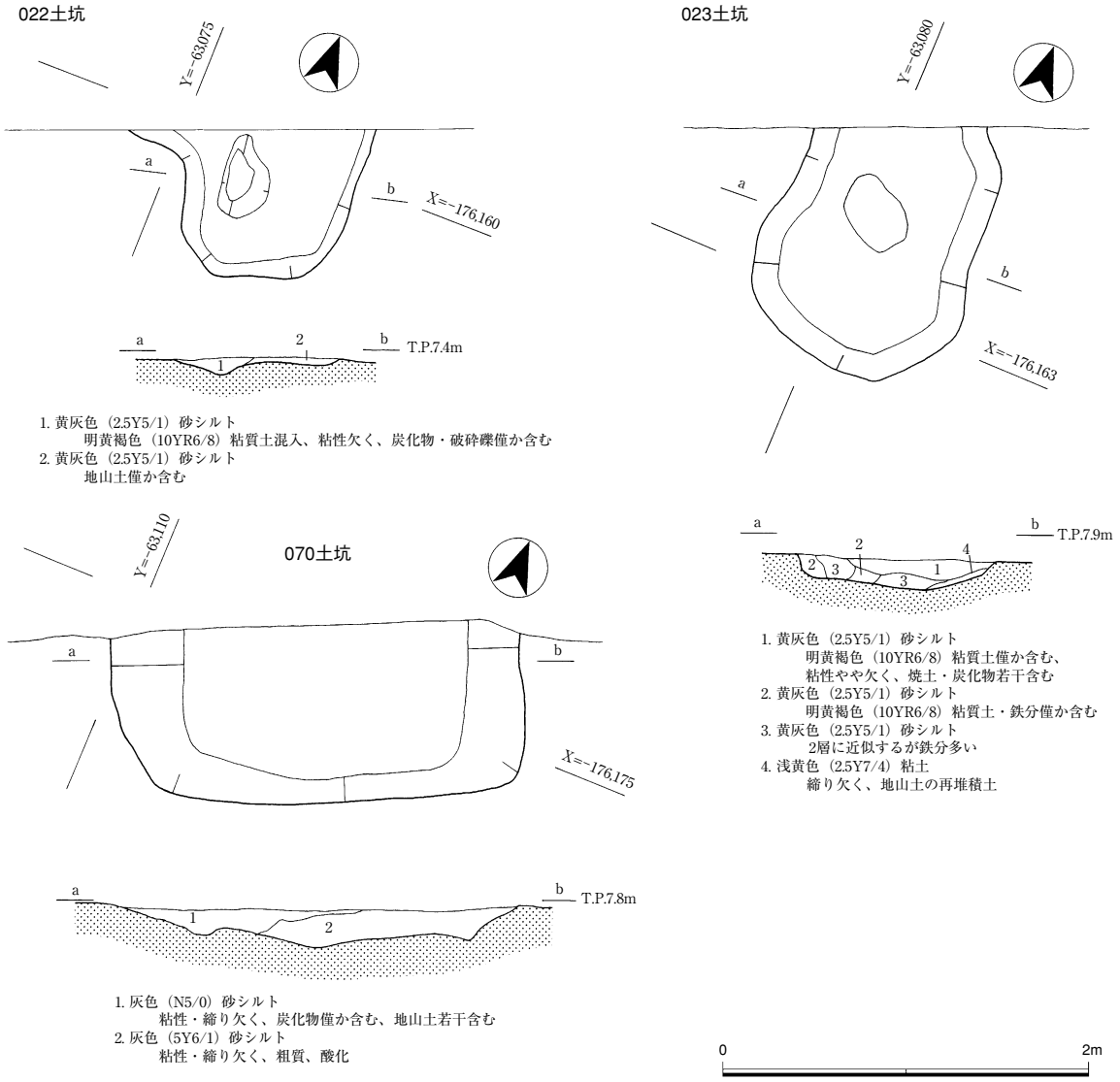
045井戸（第19図）

３区の東寄りに位置する、素掘りの井戸である。第１層・耕作土を除去して、存在が確認された。平面は隅丸方形に近く、長径1.5m、短径1.25mを測る。

検出面より1.1mまで人力掘削を行なったが、湧水と壁体の崩落のため、それ以下については重機により掘削した。その結果、さらに１m以上の深度があることが判明した。しかし、崩落が著しく、それ以下の掘削は中止した。

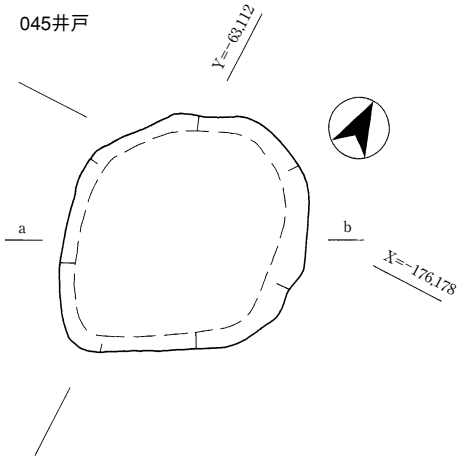
覆土は、検出面から1.1mの深さまでは３層に分かれ、重機による掘削範囲では、最下部の灰黄色砂質土（３層）がそのまま１m続いていた。

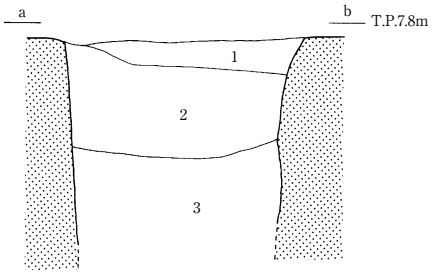
出土遺物は少なく、土器と瓦が少量出土したのみで、しかも土器１点は古代の甕である。よって、出土遺物からこの井戸の廃絶時期を求めることは難しいが、次に述べる064井戸と同様に第１層・耕作土により上部が覆われていたことから、同じ頃の廃絶とすれば、その時期を18世紀前半頃に求められよう。



第18図　022土坑・023土坑・070土坑

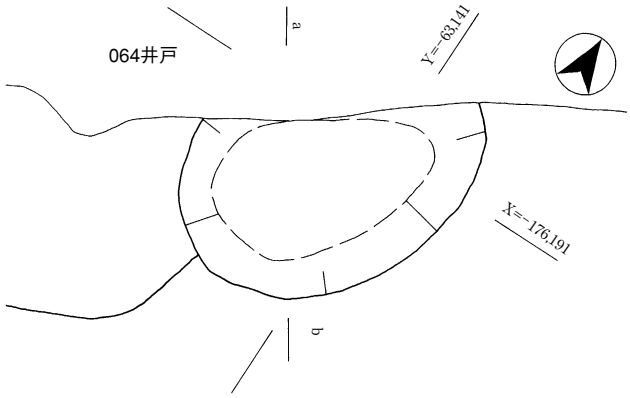
045井戸

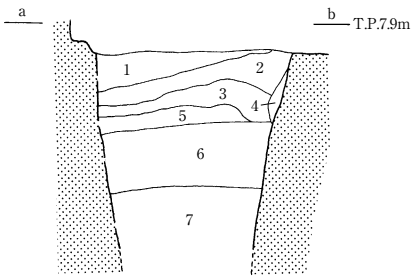




1. 黄灰色（2.5Y6/1）粘シルト
　　締りあり、粘性やや欠く、拳大礫若干含む
2. 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
　　同色粘土混入、締り欠く、拳大礫多包
3. 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
　　粗質、小礫多包

064井戸

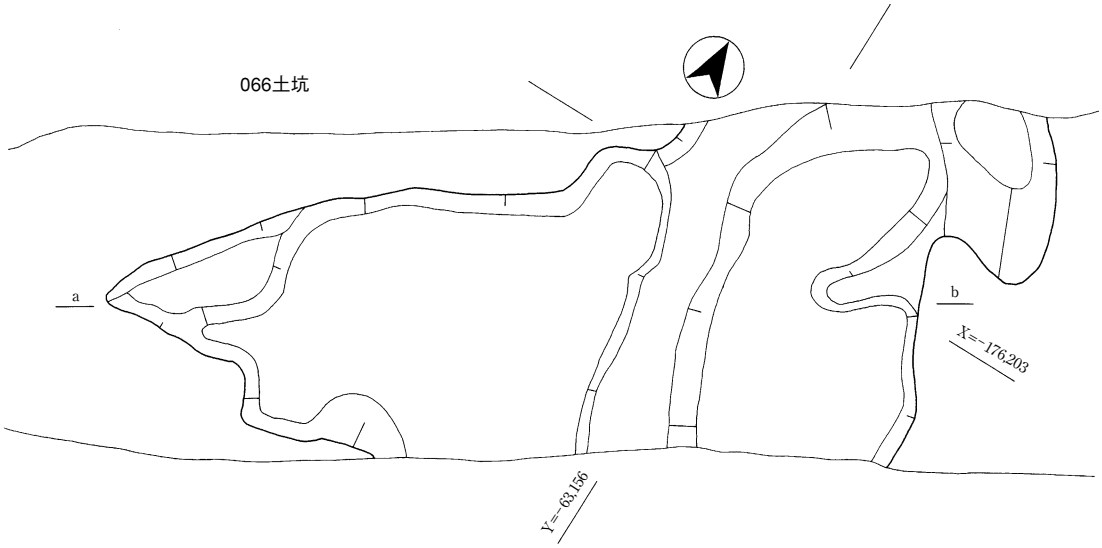


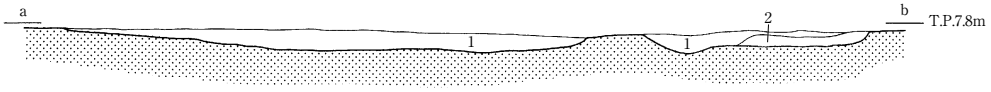


1. 灰色（5Y5/1）砂シルト
　　締りあり、粘性やや欠く、鉄分含む
2. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
　　粘性やや欠く、粗質、鉄分含む
3. 黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト
　　明褐色（7.5YR5/6）砂質土混入、粗質
4. 明黄褐色（10YR6/8）粘質土
　　黄灰色（2.5Y6/1）砂シルト混入、粘性あり、締り欠く
5. 灰白色（5Y7/1）砂質土
　　締りあり、やや粗質
6. 明黄褐色（10YR6/6）粘シルト
　　やや砂質、締り欠く、粗質
7. 灰色（N6/0）粘シルト
　　部分的に砂シルト

0　　2m

066土坑





1. 灰色（5Y5/1）砂質土
　　締りあり、地山土若干混入、鉄分含む
2. 灰色（5Y5/1）砂質土
　　1層と同質土だが地山土混入多い

第19図　045井戸・064井戸・066土坑

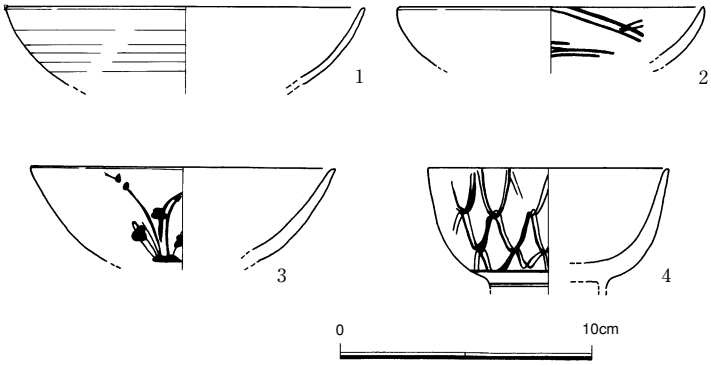
064井戸（第19図）

３区のほぼ中央に位置する、素掘りの井戸である。北半が調査区外に延び出ているため、全形は不明であるが、南北方向に主軸をとる長円形を呈するとみられる。現状では、最大長1.25m、最大幅1.1mを測る。第１層・耕作土を除去して、存在が認められた。

検出面から1.1mまで人力掘削を行なったが、湧水と壁体の崩落のため、それ以下については重機により掘削し、さらに約0.9mの深度があることを確認した。

覆土は、検出面から1.1mまでの範囲で７層に分かれる。それ以下では、最下位の７層がさらに20㎝ほど続き、その下は７層と色調の異なる灰色（5Y4/1）粘シルトが70㎝堆積している。覆土のうち１～５層は、意図的な埋め込み土とみられる。

出土遺物には磁器、陶器、炻器、土器、瓦がある。そのうち４点を図示した。磁器のうち２は波佐見・平戸系の小皿、３は肥前系の中碗、４は波佐見・平戸系の中碗で、２・４は17世紀末～18世紀末、３は17世紀末～18世紀前半の製作とみられる。これらは７層から出土したものであり、井戸の廃棄が18世紀前半頃である可能性を示している。なお、これら以外にも肥前系の碗などが出土した。



第20図　064井戸出土遺物

陶器のなかで図示した１は、肥前系京焼風の小鉢である。製作年代は17世紀末～18世紀前半に求められ、先述の３点の磁器と大差ない。またこれ以外にも京焼風の破片や唐津焼の破片がある。

炻器には擂鉢と瓶の底と思われる破片がある。また土器はいずれも小片であり、詳細を得ない。ただ、外面ハケ調整のなされた破片が６点あり、古墳時代の土器の可能性が高い。

066土坑（第19図）

３区の西寄りに位置する不定形の土坑である。北は攪乱され、南は調査区外に延び出ている。最長５mを測る。底面には起伏があり、中央が畦状に高まる。深さは、最大10㎝である。

覆土は灰色砂質土を基調としている。出土遺物には志野焼とみられる碗の小片３点を含む陶器、土器片、そして須恵質の瓦片がある。中世後期～近世初頭の遺構とみられる。

070土坑（第18図）

３区の東寄りに位置する。北半が調査区外に延び出ているが、長径2.2mほどの平面長方形を呈する土坑とみられる。深さは最大20㎝を測る。壁面は直線的に外傾して立上がる。底面には起伏がある。覆土は灰色シルトであるが、粘性や包含物の差異により２分される。

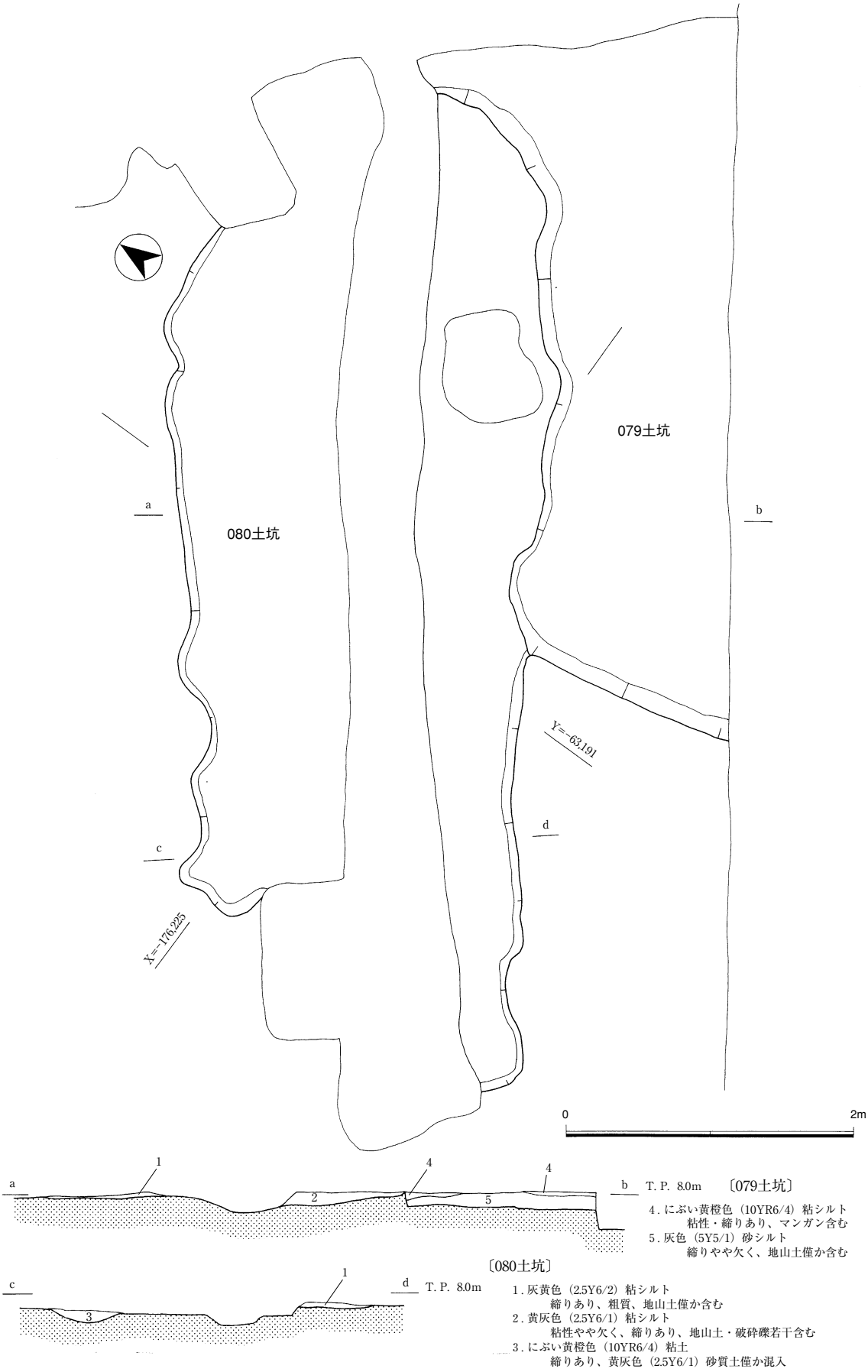
出土遺物には陶器と炻器がある。炻器には擂鉢１点が認められるが、その他は小片のため器種などについては不明である。

【４区】

079土坑（第21図）

４区東端近くに位置する。080土坑と僅かに重複し、本土坑が切り込んでいる。北東部分および南東部分が調査区外に延び出ているため、全形は不明である。現状では最大長5.0m、最大幅2.05mを測る。

深さは最大13㎝である。壁面の立上がりは割合に急峻である。覆土は上下２層に分かれるが、下層の



第21図　079土坑・080土坑

灰色砂シルトが主体をなしている。

出土遺物には磁器、土器、瓦質土器および２点の土錘がある。磁器には肥前系の碗がある。18世紀以降のものであろう。土器は６点あるが、いずれも小片のため詳細不明である。瓦質土器には捏鉢も認められたが、これも小片のため時期比定などはできなかった。

080土坑（第21図）

079土坑とともに４区の東端近くに位置する。北東－南西方向に主軸をとり、平面長方形を呈する土坑であるが、中央を大きく攪乱され、さらに南を079土坑と僅かながら重複しているため、全形を捉えることはできない。現状の長さは6.95m、最大幅は2.4mを測る。底面に達するほどの明確な破損を受けないまでも、上部に及んでいる攪乱の範囲は広く、そのため覆土の存在しない部分もあった。

深さは最大10cmを測る。覆土は３層に分かれる。いずれも黄色系の粘土・粘シルトであり、地山土を含む１・２層が基本をなしている。

出土遺物には磁器、陶器、土器、瓦質土器および土錘がある。陶器には瀬戸・美濃系とみられる破片があるが、詳細は不明である。土器もまた、小片のため詳細を得ない。瓦質土器は擂鉢であるが、混入の可能性が高い。

091井戸（第22図）

４区の東寄りに位置する、素掘りの井戸である。過半が調査区外に延び出ているため、全形を推測することはできない。現状の最大径は2.55mを測る。この井戸は、第１層・耕作土を除去して検出が可能となった。

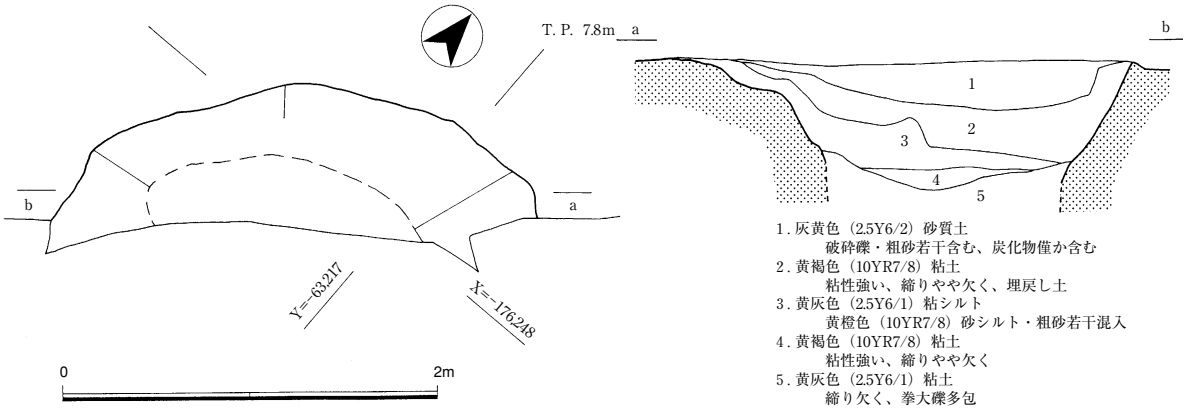
検出面から70cmほどまで人力掘削を行なったが、湧水が著しく、かつ調査区壁の崩落する恐れが高かったため、さらに掘り下げることはできなかった。

現状での覆土は５層に分かれる。そのうち２層は、井戸内部を意図的に埋め込んだものとみられる。

出土遺物は比較的多く、磁器、陶器、土器、瓦がある。磁器には小碗２点、皿１点、小杯１点が認められる。小碗のうちの１点（110）は瀬戸・美濃系で19世紀前半、他の１点は肥前系で18世紀中葉～19世紀中葉の製作年代が考えられる。皿（91）は肥前系で、その製作年代は17世紀末～18世紀後葉までとみられる。小杯は器壁が薄く、酒杯である可能性が高いが、小片のため詳細は不明である。

陶器には瀬戸・美濃系や京焼系のものが認められ、いずれも18世紀以降のものである。土器には真蛸壺があるほか、弥生～古墳時代の高杯の破片も出土した。また瓦には、平瓦と丸瓦がみられる。

出土遺物から、19世紀代には完全に埋没していたことがうかがわれるが、耕作土が井戸上部を完全に



第22図　091井戸

覆っていたことからすると、19世紀代の遺物は耕作土中から混入した可能性もあり、実際の廃棄は、各遺物の平均的な年代である18世紀中葉と考えられる。

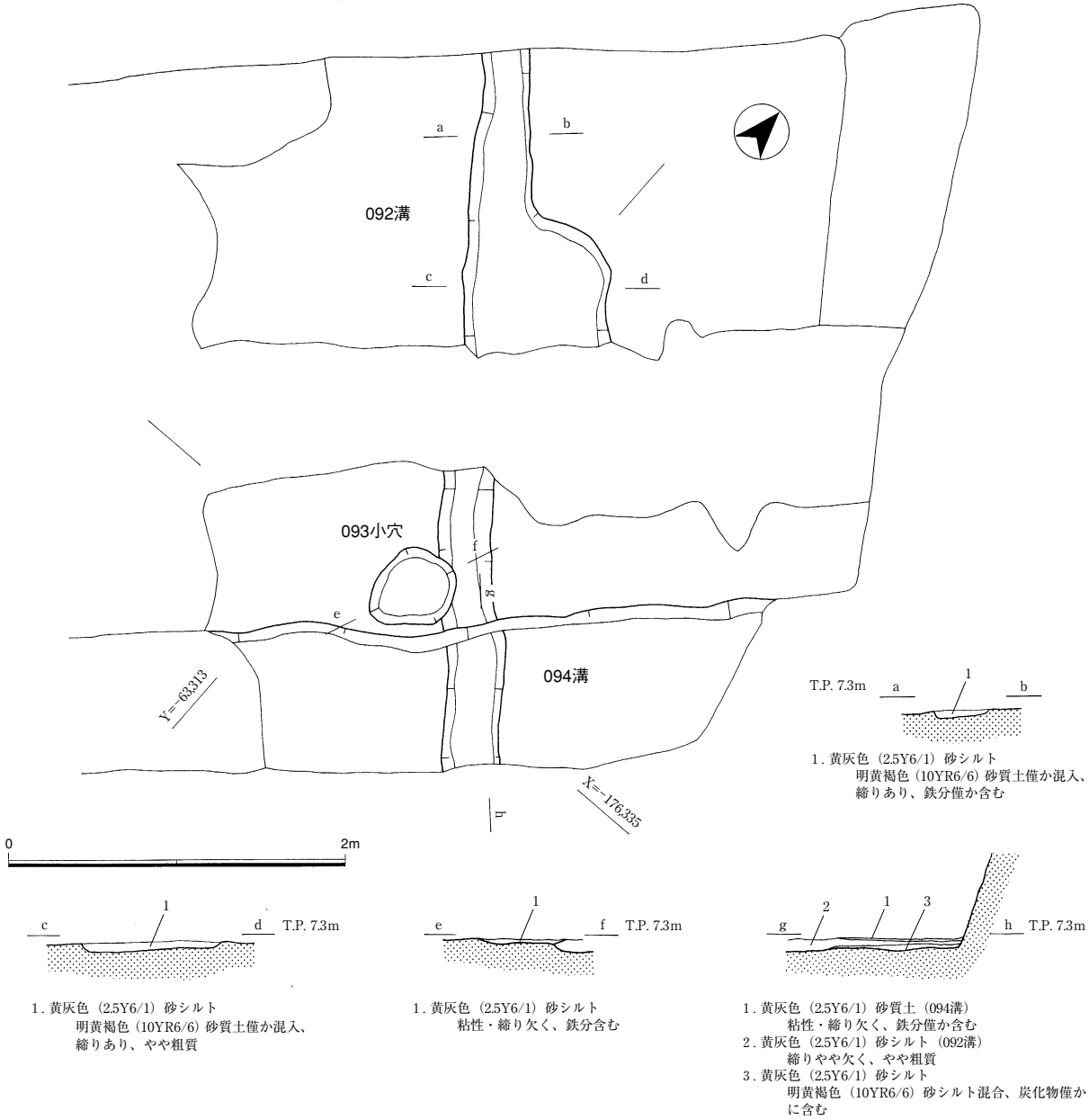
【５区】

092溝（第23図）

５区東南辺付近に位置する。調査区を縦断するように北西－南東方向に走行する溝である。幅は約0.3mを測る。攪乱付近で0.9mと幅を広めるが、部分的な広がりであろう。覆土は黄灰色砂シルトの単一層であり、それは幅が広まった部分においても同じである。

南東部で094溝に切り込まれているが、掘込みが浅いため、その底面において092溝の延長部分を捉えることができた。

出土遺物は、土器の小片２点および瓦器の小片１点のみである。土器については詳細不明であるが、瓦器は椀とみられる。ただしこれも図示することはできなかった。



第23図　092溝・093小穴・094溝

093溝（第23図）

092溝の一部を切り込んだ小穴である。長軸0.55m、短軸0.45mを測る。深さは２～３㎝と浅く、覆土は黄灰色砂シルトの単一層である。出土遺物はなかった。

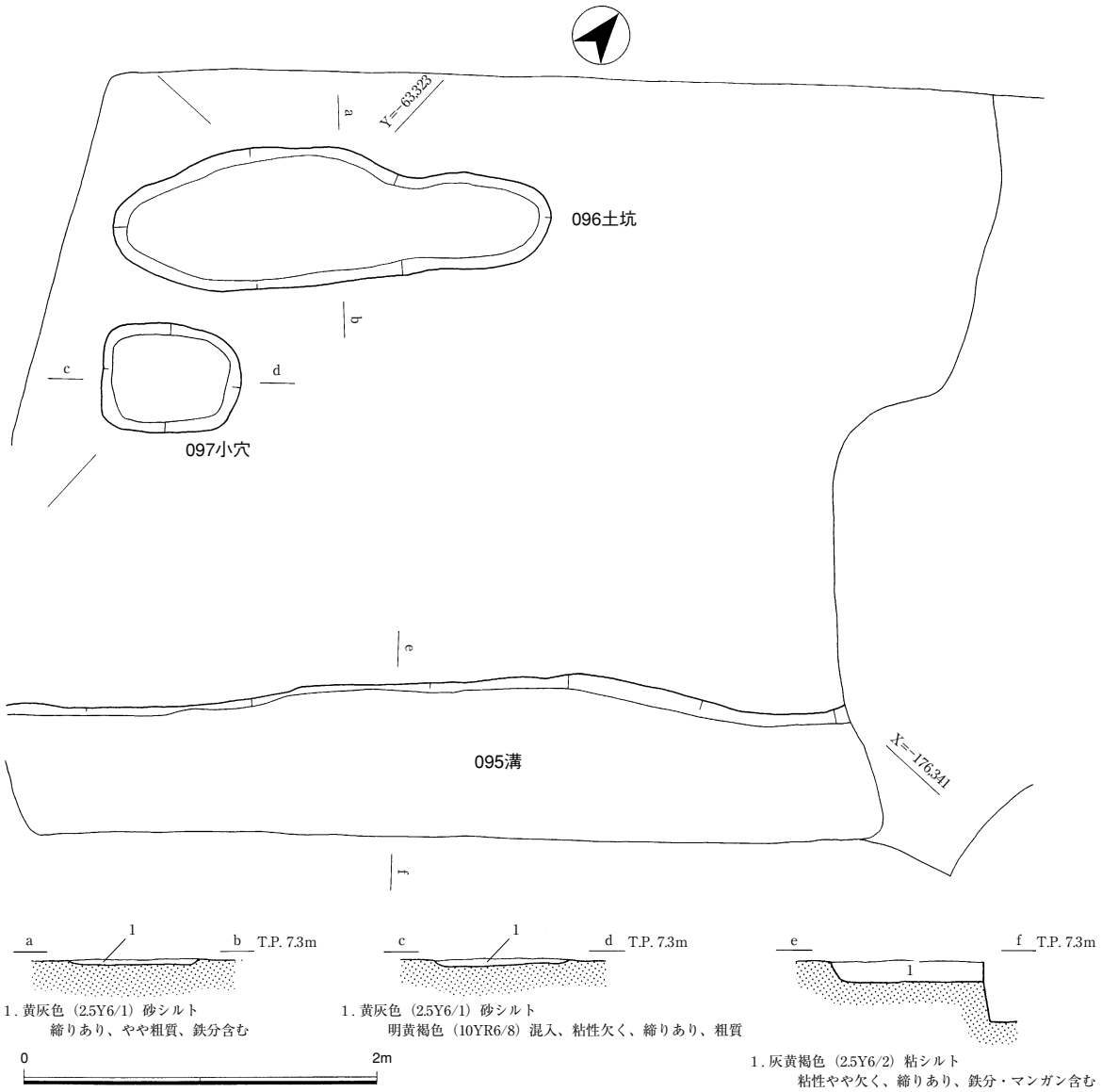
094溝（第23図）

５区南東辺に位置し、調査区を横断する北東－南西方向に走行する溝である。南東部分および北東部分は調査区外に延び出ていて、南西部分は攪乱されているため現状の長さ3.3m、幅0.8mを測るにすぎない。

攪乱を挟んで南西側に095溝が同方向に走行している。同一溝の可能性もあるが、深さが異なることから、別遺構と捉えた。深さは１～２㎝と極めて浅い。底面はほぼ平坦である。覆土は黄灰色砂質土の単一層である。土器の小片１点および瓦器小片２点が出土した。

095溝（第24図）

５区の南東辺に位置する。094溝と主軸を等しくしており、上述のように両者が同一である可能性も考えられるが、深さは10㎝を測り、094溝と深度差が認められる。現状の長さは4.9m、幅1.0mを測る。



第24図　095溝・096土坑・097小穴

壁の立上がりは比較的急峻である。

覆土は灰黄褐色粘シルトの単一層である。土器小片４点、須恵器小片１点、瓦器破片１点、瓦質土器小片３点および平瓦破片が出土した。そのうち瓦質土器の鉢１点（56）を図示した。

096土坑（第24図）

５区北西端付近に位置する。北東－南西方向に主軸をもち、長さ2.45m、幅0.75mを測る。深さは３～４㎝と浅く、覆土は黄灰色砂シルトの単一層である。出土遺物はなかった。

097小穴（第24図）

096土坑に近在して位置する。長軸0.8m、短軸0.6mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。深さは最大でも約５㎝と浅く、覆土は黄灰色砂シルトの単一層である。出土遺物はなかった。

３　第３遺構面の調査

（１）調査成果の概要

第３遺構面は、４区の西端から25mほどの範囲、および５区のみに存在する。13世紀後半～15世紀頃の遺物を含む第２・２′層を除去して現われる地山面が対応する。よってこの面で検出された遺構は中世期に属する。

４区では溝と土坑、５区では落込み、土坑、小穴を検出した。４区の溝２条は14年度調査区から続くものである。５区の落込みもまた14年度調査区から延びたものであるが、両調査区とも著しい攪乱が落込み付近に広がっているため、それが溝であるかについては明らかにできなかった。

（２）検出遺構

【４区】

153土坑（第25図）

４区の西寄りに位置する。北東－南西方向に主軸をとる不整形土坑で、北東部分は調査区外に延び出ている。現状の長さは2.3m、最大幅は0.75mを測る。深さは最大14㎝を測り、覆土は上下２層に分かれる。上層には細礫が多包されている。これに対して、下層は細礫をほとんど含まず、地山の再堆積土とみられる明黄褐色砂質土である。出土遺物はなかった。

156溝（第25図）

４区の西寄りに位置する。南北方向に走行する溝で、南端は調査区内にあるが、北部分は調査区外に延び出ている。現状の長さは3.6mを測り、割合に直線的である。幅は0.3mほどである。深さは約７㎝で、断面Ｕ字形を呈している。14年度調査区のＯ１溝の延長である。

覆土は灰白色粘シルトの単一層で、鉄分・マンガンを含む。出土遺物はなかった。

158溝（第25図）

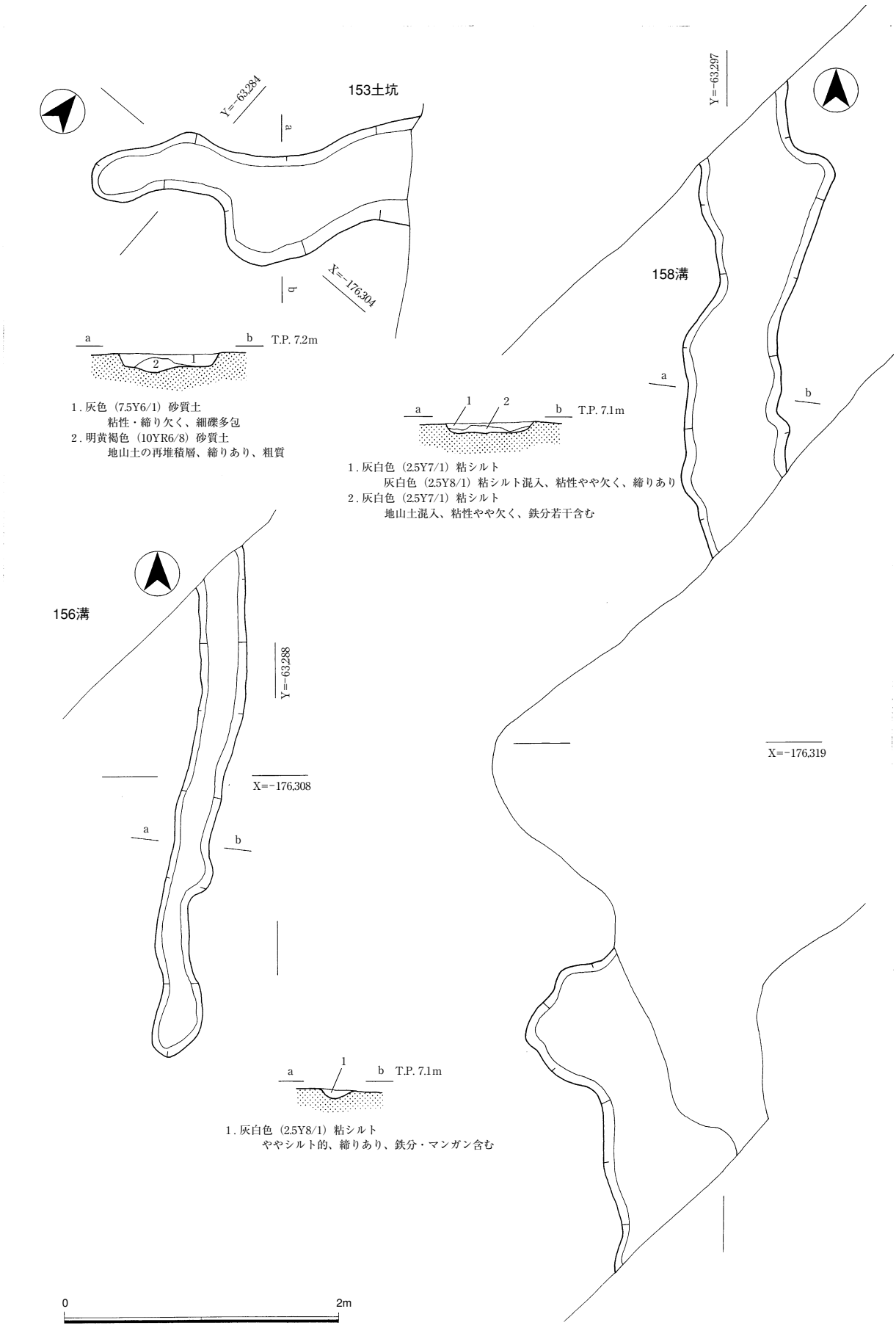
４区西端近くに位置する。調査区を縦断するように南北方向に走行する溝であるが、途中攪乱により分断されている。14年度調査区のＯ２溝の延長である。

現状の長さは8.2mである。幅は0.45～1.0mを測り、広狭がみられるが、おおよそ0.7～0.8m程度のものといえる。深さは７㎝ほどである。覆土は上下２層に分かれるが、ともに鉄分を含む灰白色粘シルトを基調としている。出土遺物はなかった。

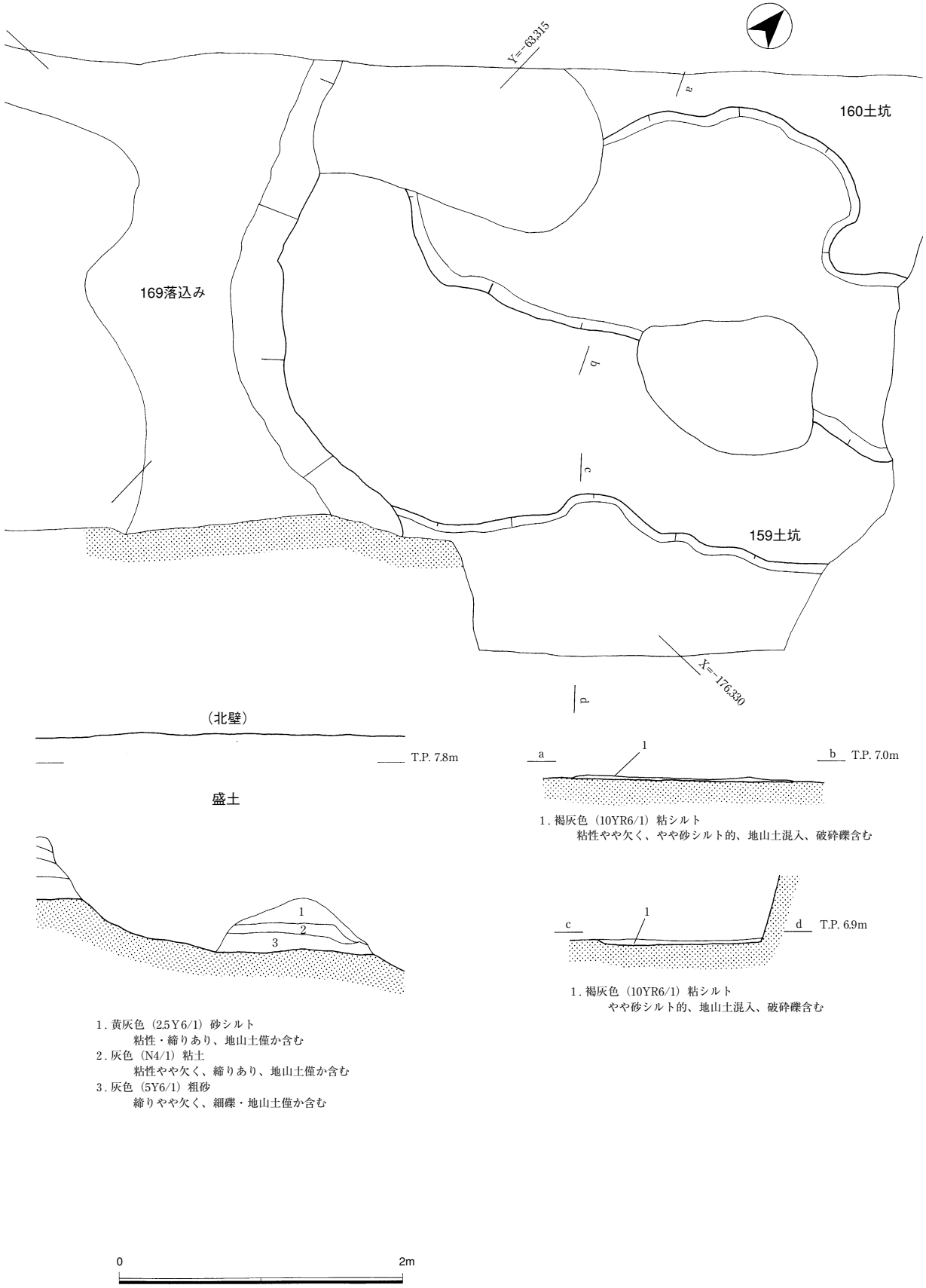
【５区】

159土坑（第26図）

５区南西辺に位置する。169落込みと重複するが、攪乱が著しく、先後関係は捉えられなかった。現



第25図　153土坑・156溝・158溝



第26図　159土坑・160土坑・169落込み

状の長さ3.0m、幅1.15mを測る。深さは最大５cmほどであり、上部が削平されているとみられる。

褐灰色粘シルトの単一層で、160土坑の覆土と近似している。出土遺物はなかった。

160土坑（第26図）

５区東南辺付近にあり、159土坑と平行気味に位置している。東部分が調査区外にあり、さらに西も攪乱されているため、端部の形状は不明である。現状の最大長は3.8m、幅は1.7mほどを測る。掘り込みは、現状では２～３cmを測るにすぎず、削平を受けていると考えられる。

覆土は褐灰色粘シルトの単一層である。土器の小片２点が出土したが、詳細は不明である。

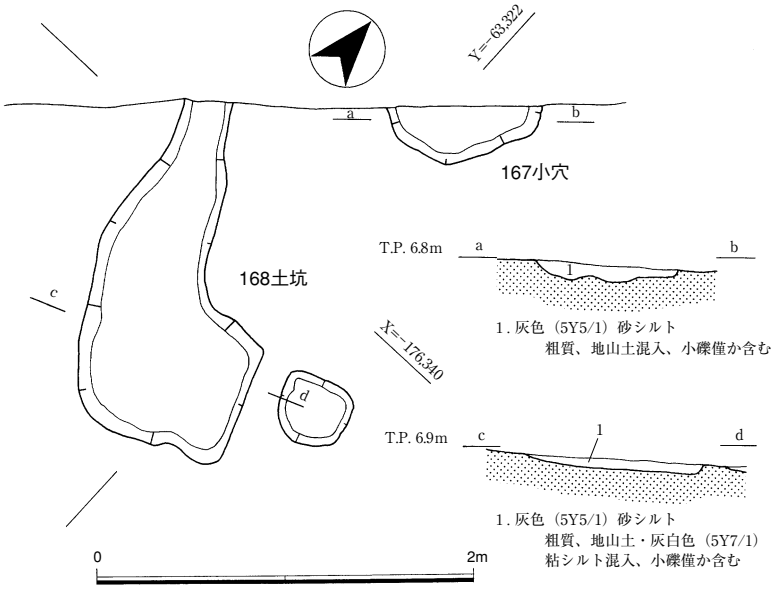
167小穴（第27図）

５区西辺近くに位置し、北半が調査区外に延び出ている。現状の最大長は0.8mである。深さは10cmほどで、立上がりは比較的明瞭である。覆土は灰色砂シルトの単一層。出土遺物はなかった。

168土坑（第27図）

５区西辺に位置する。北西部分が調査区外に延び出ているため全形は不明であるが、現状では長さ1.8m、幅0.95mを測る。南東部が幅広く、平面はＬ字状を呈する。深さは５cmほどである。

覆土は灰色砂シルトの単一層である。出土遺物はなかった。



第27図　167小穴・168土坑

169落込み（第26図）

５区の中央付近に位置する。攪乱が著しく、遺構検出面でも本遺構上には攪乱が広がっていたため、東辺と底面の一部を捉えたにすぎない。14年度調査のＰ区の落込みにつながる。覆土は、南壁で捉えたが、攪乱のため長さ1.1m、高さ0.45mの範囲が残存していたにすぎない。

最下層は灰色粗砂であり、14年度調査の成果と等しい。自然流路の可能性もある。出土遺物はなく、この点も14年度の成果と同じである。

４　出土遺物

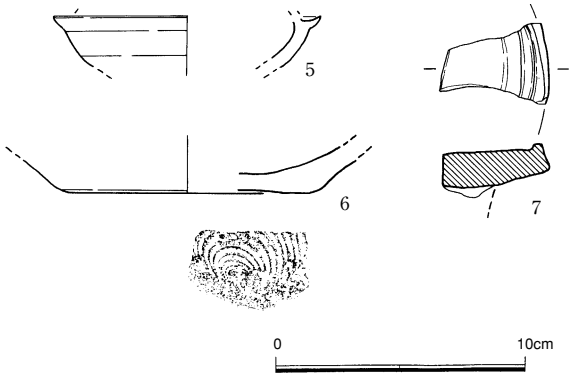
出土遺物には須恵器、磁器、陶器、土器、土製品、瓦器、瓦質土器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品などがある。そのうち、磁器と陶器については製作年代の比較的明らかなものを、瓦については文様の残る軒瓦を中心に、それ以外は形態復元の可能なものを図示した。

なお第１層、第２・２′層および各遺構から出土したもののほか、盛土・攪乱から出土したものも掲載している。これは、調査地内の攪乱が多く、本来包含層や遺構覆土内に含まれていた遺物が攪乱土内に多量に混入しているためである。また時期的矛盾をきたさない盛土・攪乱出土の遺物を併せて掲載することで、調査地の歴史的な性格をより豊かに読み取ることができると考えたことにもよる。

図示した遺物は315点を数える。そのうち135点は管状の土錘である。この土錘に関しては第４章第２節で詳しく述べることとし、ここではそれ以外の遺物について記述する。

（１）須恵器（第28図）

図示した須恵器は３点である。これ以外にも破片が36点出土している。５は杯身で、受部の立上がりは短く、欠損する口縁部も同様に短いとみられる。受部のある杯身の最終段階であるＴＫ217型式に比定できよう。７は円面硯の身端部の破片である。縁辺の立上がりが認められ、底部には透孔の痕跡もみられる。

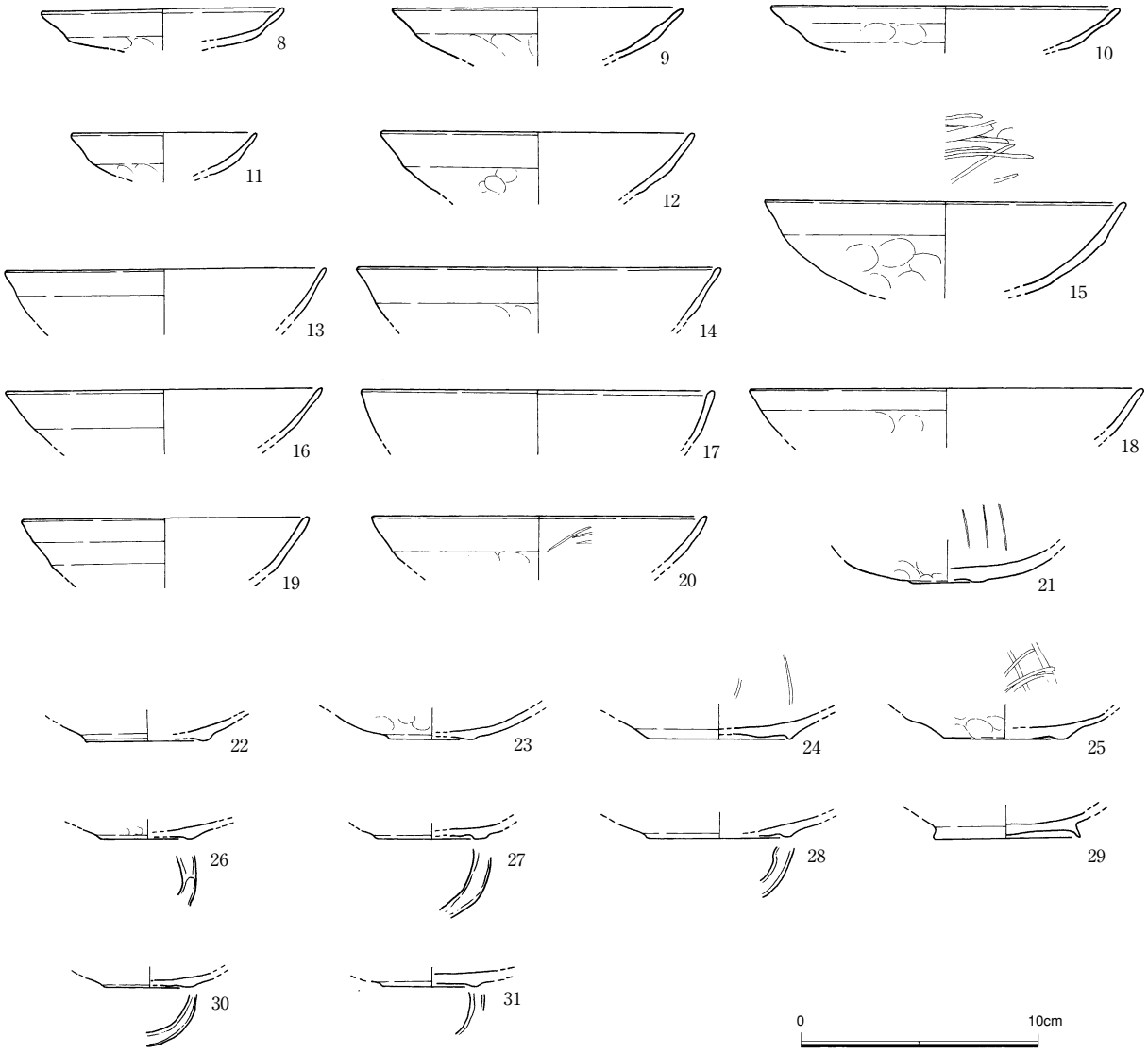


第28図　須恵器

（２）瓦器（第29図）

瓦器は203点出土している。瓦器は第１層・耕作土や第１遺構面検出の遺構内覆土から出土したものもあるが、図示し得るほどの一定の大きさを保ったものは、ほとんどが４区西端寄り以西に広がる第２・２′層からである。

図示した瓦器は、皿４点（８～11）、椀20点（12～31）である。いずれも破片であり、全形を復元できるものはない。皿は口径や身高に乏しい。また口縁部が若干外反するものの、立上がりはほぼ直線的である。いずれも13世紀代に比定できよう。



第29図　瓦器

瓦器椀もまた口縁部にかけて直線的に立上がるものが多い。その中にあって、15はやや内湾気味に立上がり、口縁部は僅かに外反する。身高のあるこの15や、それと形態が類似するとみられる17・18などは図示したものの中では古相を示していて、12世紀後半に比定できる。これに対して口縁部への立上がりが直線的な13・14・16・20はより新しく、13世紀前半と考えられる。

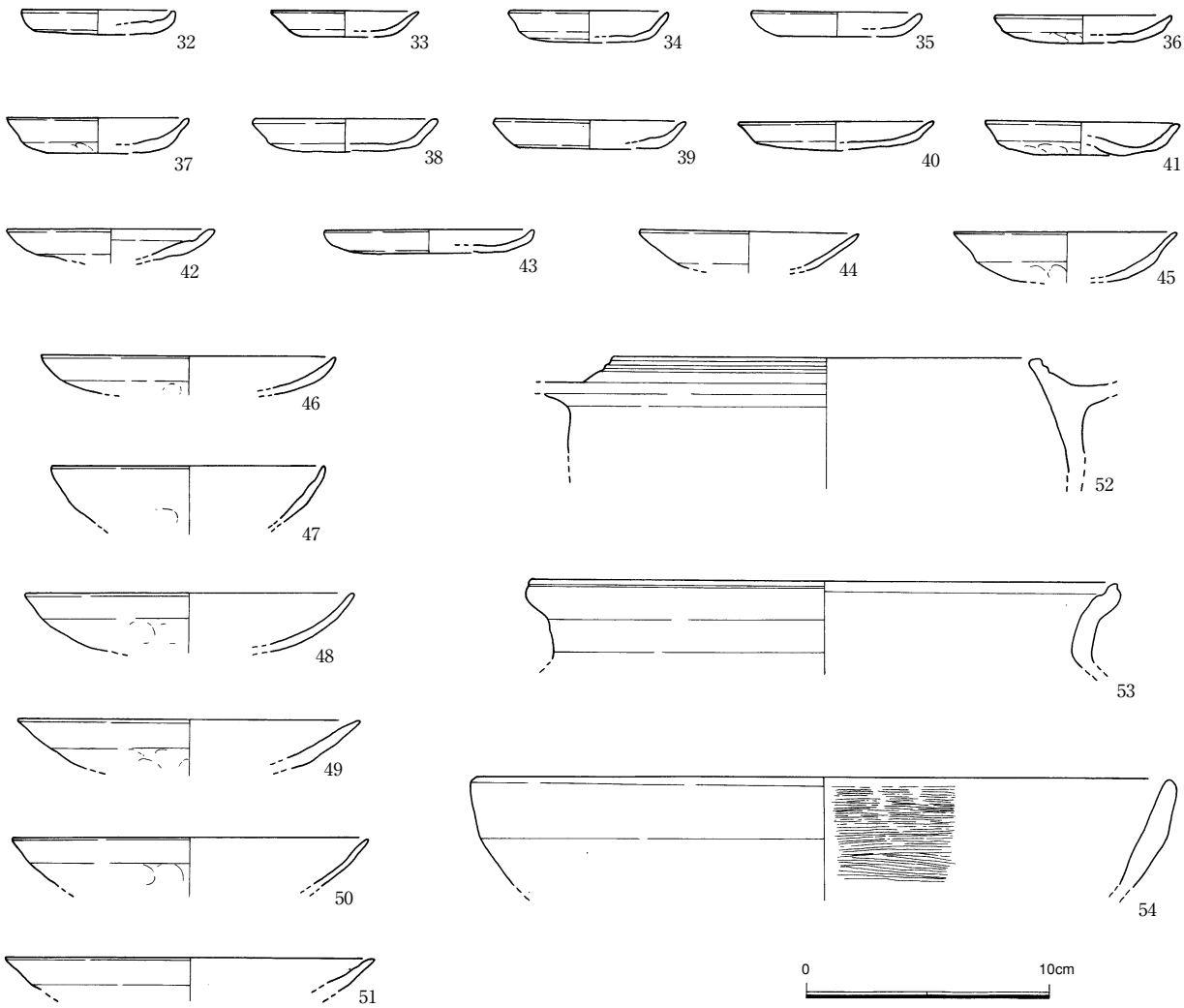
高台部の破片をみると、高さを保ち、断面三角形を呈する29は13世紀前半に収まろうが、扁平となり、退化の顕著なほとんどのものは13世紀中葉以降に比定でき、そのなかでも21や23は13世紀後葉に位置付けられよう。

（3）土器（中世）（第30図）

瓦器と共伴する土器類もまた大半が2・2′層からの出土である。口径や身高に差はみられるが、口縁部への立上がりの短いものが多い。口縁部の外反形状を留める37・40や内湾気味に立上がる48は12世紀代に遡る可能性もあるが、ほとんどのものは13世紀代とみられる。

さらに、胴部から口縁部へ直線的に立上がり、口縁部下のユビナデが弱い44・49・51などは14世紀代に下る可能性が高い。

皿以外には羽釜（52）、甕（53）、鉢（54）がある。52は口縁部の立上がりが短く、胴部は丸味を欠いている。15世紀代に比定できよう。



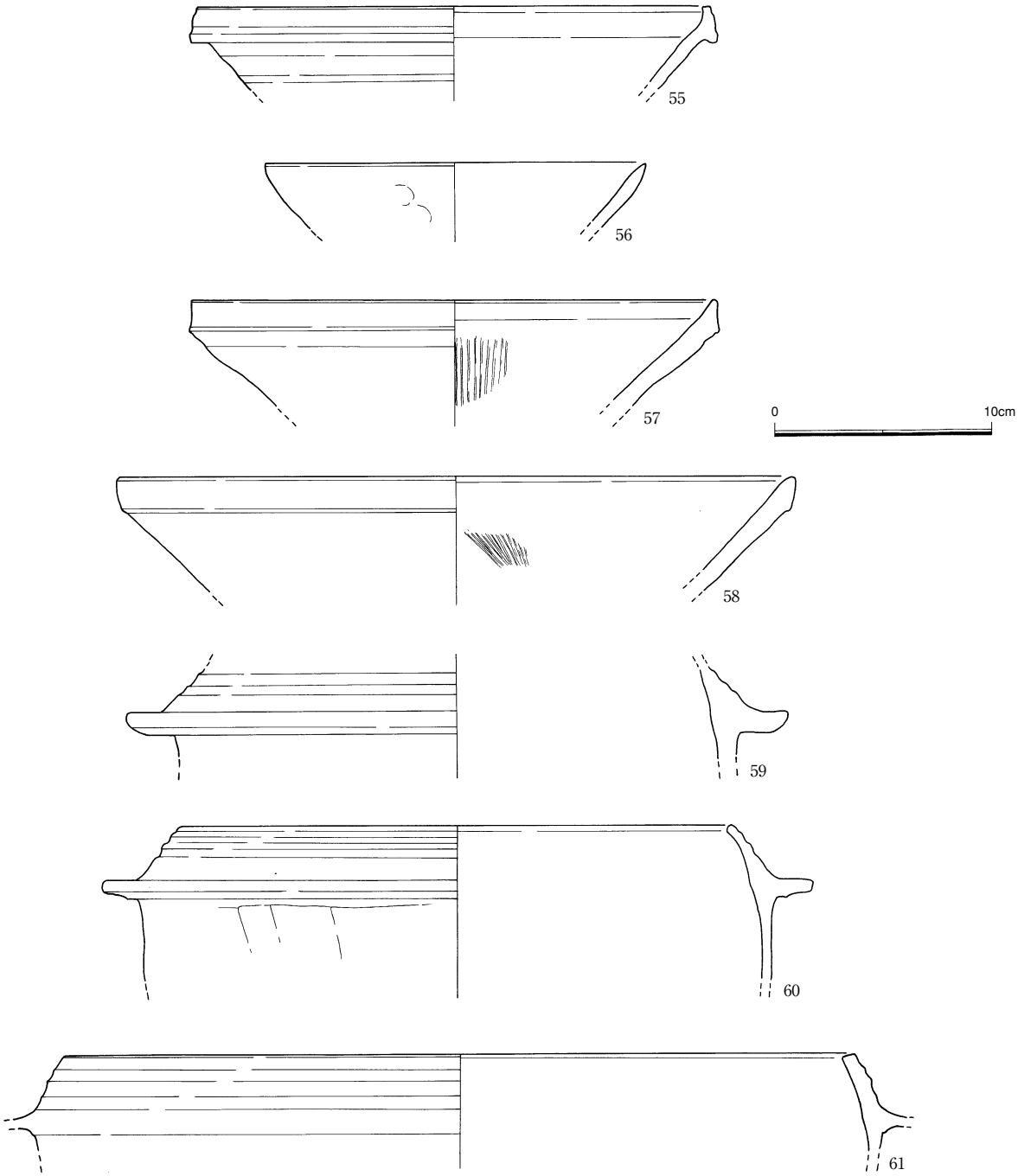
第30図　土器（中世）

（４）須恵質・瓦質土器（第31図）

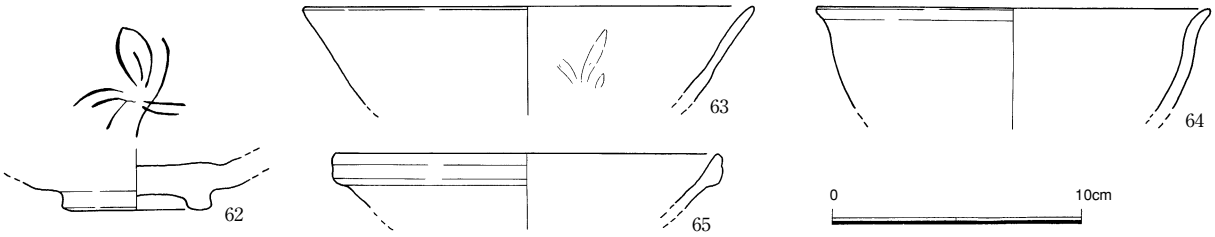
須恵質土器のうち、図示し得たのは55の捏鉢１点のみである。口縁部端は直立し、かつ下方にも張り出している。器壁は薄く、成形はよい。14世紀前半に比定できる。

56～61は瓦質土器である。56は鉢である。口縁部にかけて直線的に立上がり、端部は尖り気味である。外面ユビオサエ、内面ユビナデ調整がなされている。器壁はやや厚めである。57・58は擂鉢である。前者は口縁部の直立が明瞭であるが、後者はそれほどでもない。ともに15世紀代に位置付けられよう。

59～61は羽釜である。59は鍔部とその上下僅かな部分のみの破片であるので詳細を得ないが、60・61は口縁部にかけて内湾し、それに対して胴部は丸味を欠いているとみられる。ともに15世紀代に位置付けられ、59も同時期のものと推測される。



第31図　須恵質・瓦質土器



第32図　青・白磁

（5）青・白磁（第32図）

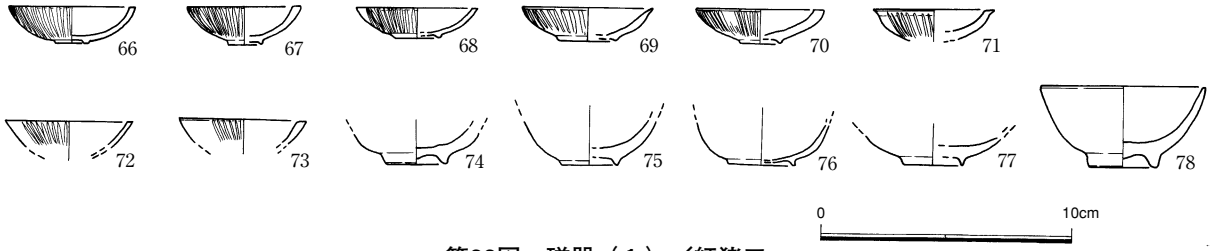
62～64は青磁、65は白磁である。いずれも碗である。62は高台内部を除いて釉が厚く掛けられていて、底部内面に印花文が認められる。器壁も厚く、龍泉窯産とみられる。63は口縁部にかけて直線的に立上がる。胴部内面に文様が施されているようにもみられるが、施釉の厚さと器面の荒れのため判然としない。これも龍泉窯産の可能性がある。64は胴部に丸味があり、口縁部は端反りとなる。62・63に比べて釉は薄い。

65は口縁部が肥厚し、端面は直立する。釉は厚く施されている。

（6）磁器（第33～35図）

磁器には碗、鉢、蓋、杯、皿などの器種がある。注目されるのは66～78の紅猪口である。

調査地およびその近接地は、近世代には水田耕作地であった。農家が存在したことは否定できないが、複数の家屋が建ち並んでいたとは想定しがたい。そうした状況の中で、図示し得ただけでも13点の紅猪口が認められた。２分の１以下の破片もあるが、形状が異なることから、それぞれは別個体とみられ、13点は個体数を示している。



第33図　磁器（１）／紅猪口

66～73は外面型押により菊花形に成形されたものである。内外面に白磁釉がやや厚く掛けられている。いずれも肥前系で17世紀末～18世紀中葉の製作とみられる。74～78は丸形で、酒杯との区分は難しいが、76の内面には紅が僅かに残り、他の４点は76より器壁が厚く、後述の酒杯よりも明らかに厚手であることから、紅猪口と捉えた。74～78もまたすべて肥前系とみられるが、それらは18世紀後半以降の製作年代が考えられる。

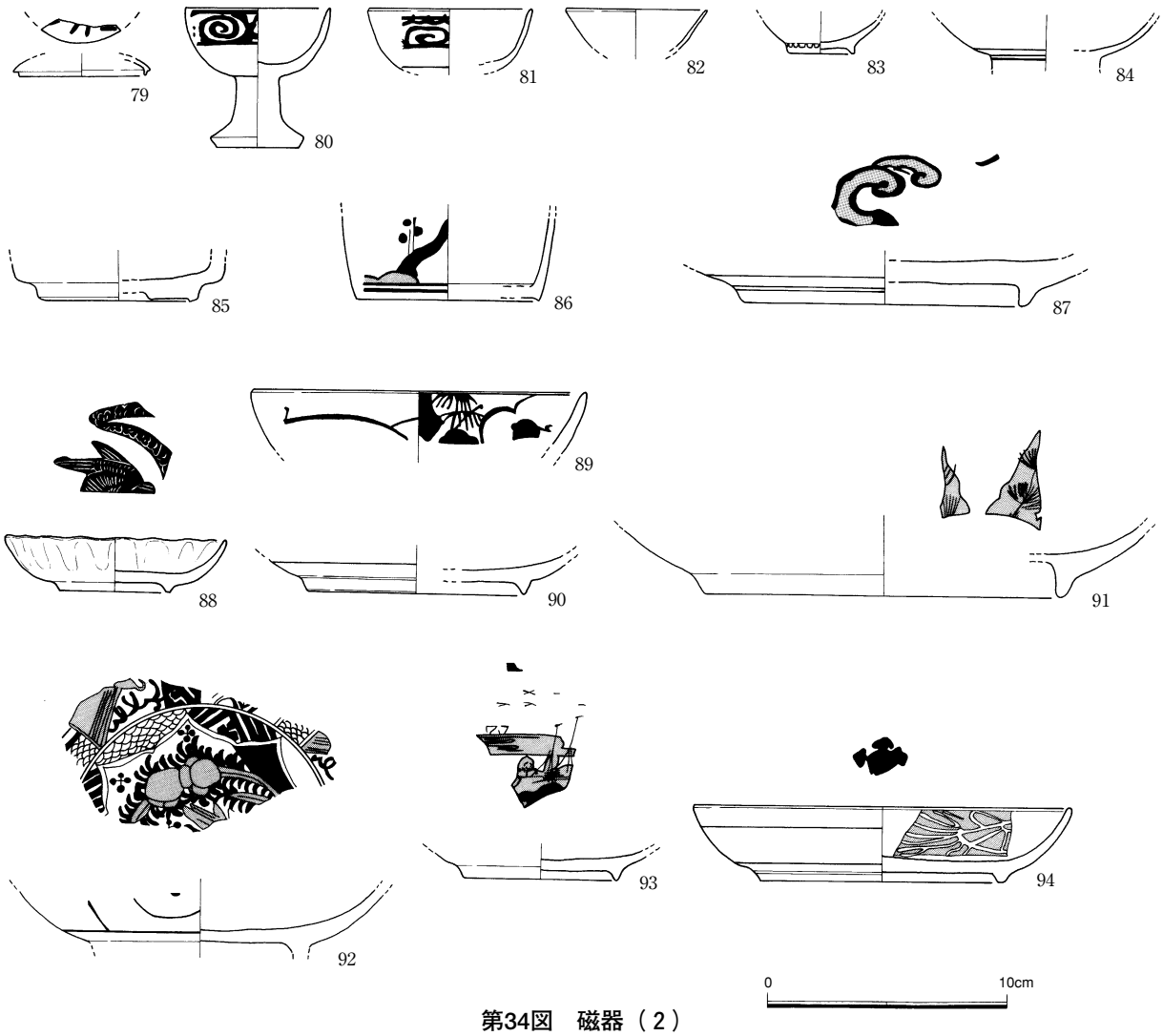
紅猪口以外に「町場」との関連を窺わせる器種は明確ではないが、酒杯や猪口、大鉢などは関連する可能性がある。

79は赤・青色の絵付けがなされた蓋である。合子の蓋であろう。80・81は仏飯器。

82と83は酒杯である。器壁が薄く、先にみた丸形の紅猪口とは明らかに厚みが異なる。84は丸形の小杯。肥前系で、製作年代は17世紀末～18世紀後葉に求められる。

85は半筒形の火入。肥前系で17世紀末～18世紀後葉に時期比定できる。

86は桶形の猪口である。外面に梅枝文を描く。肥前系で17世紀末～18世紀後葉の製作年代が求められ



第34図　磁器（２）

る。87は肥前系大鉢である。17世紀末～18世紀後葉に比定できる。

88は瀬戸・美濃系の小皿で、19世紀初頭～19世紀中葉に製作年代が求められ、第１層・耕作土の下限年代に近いものである。90は肥前系小皿、91は肥前系中皿、92・93は肥前系五寸皿で、いずれも17世紀末～18世紀後葉の製作年代が考えられる。94は肥前系五寸皿で、18世紀中葉～18世紀後葉のものとみられる。

95～101は碗蓋である。このうち95・97・101は肥前系で17世紀末～18世紀中葉、96・98・99は肥前系だが18世紀末～19世紀中葉、100は瀬戸・美濃系で19世紀前葉～19世紀中葉の製作年代が求められる。

102～122は小碗あるいは中碗である。このなかでも105は外面に草文を描いた初期伊万里様式の小碗で、17世紀前半代に比定される。ただし、17世紀前半代に年代付けられる磁器はこの１点のみで、第１層・耕作土から出土したとはいえ、耕作土の形成がそこまで遡るかは不明である。

碗類の多くは17世紀末～18世紀後葉のもので、106・107・114・121が19世紀代まで下る可能性がある。したがって、第１層・耕作土は17世紀末～19世紀中葉、あるいはその時間幅を若干広げた期間中に形成され続けたと考えられる。

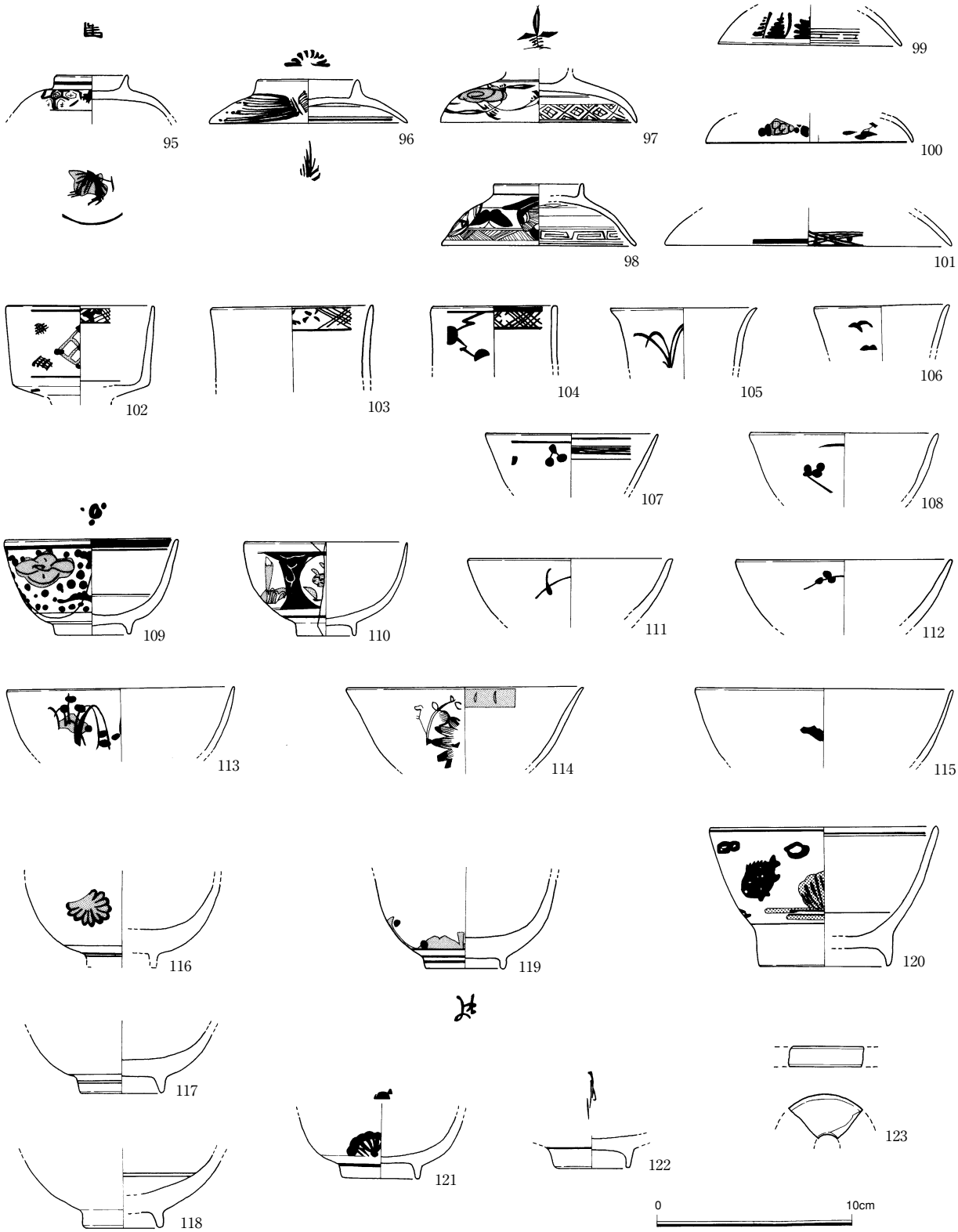
（７）陶器（第36図）

陶器も、数多くの破片が出土している。しかし、器形の復元が一定度可能で、しかも産地や製作年代

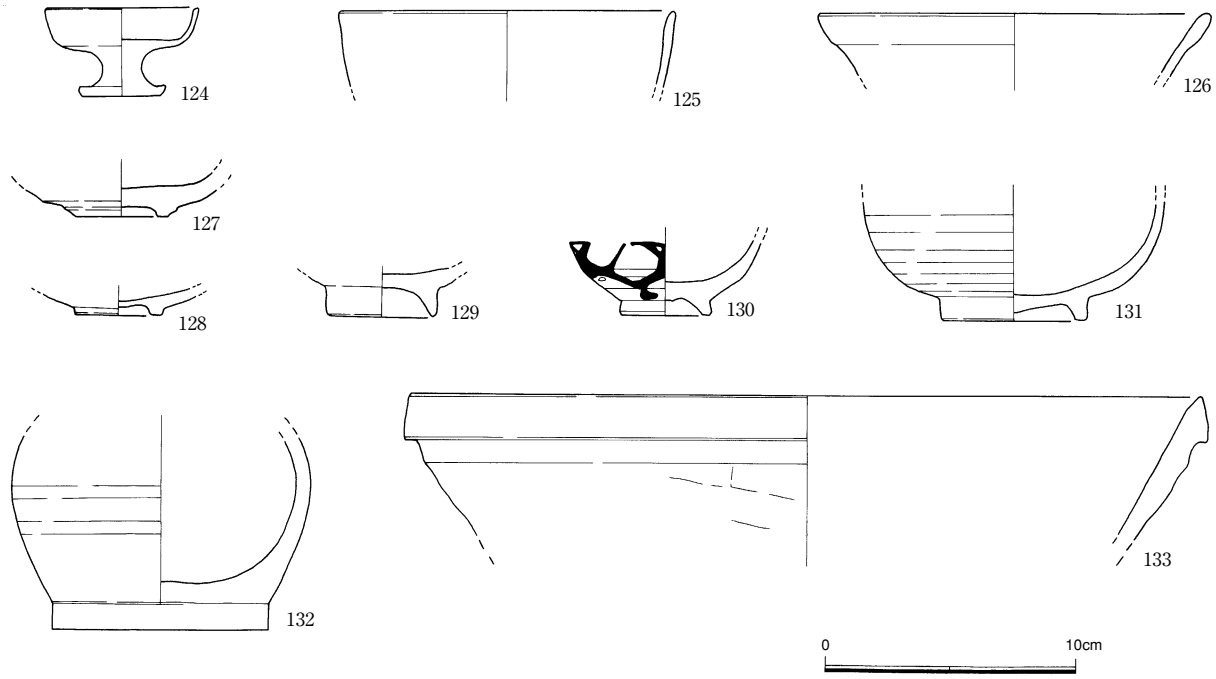
の比定も可能なものは数限られていた。そうした基準から図示し得たものは10点に留まった。

産地は主に瀬戸・美濃系だが、126・130の萩焼、128の京焼系、129の肥前系、132の備前焼、133の備前系などもある。また図示できなかったが、唐津焼、志野焼の存在も認められる。

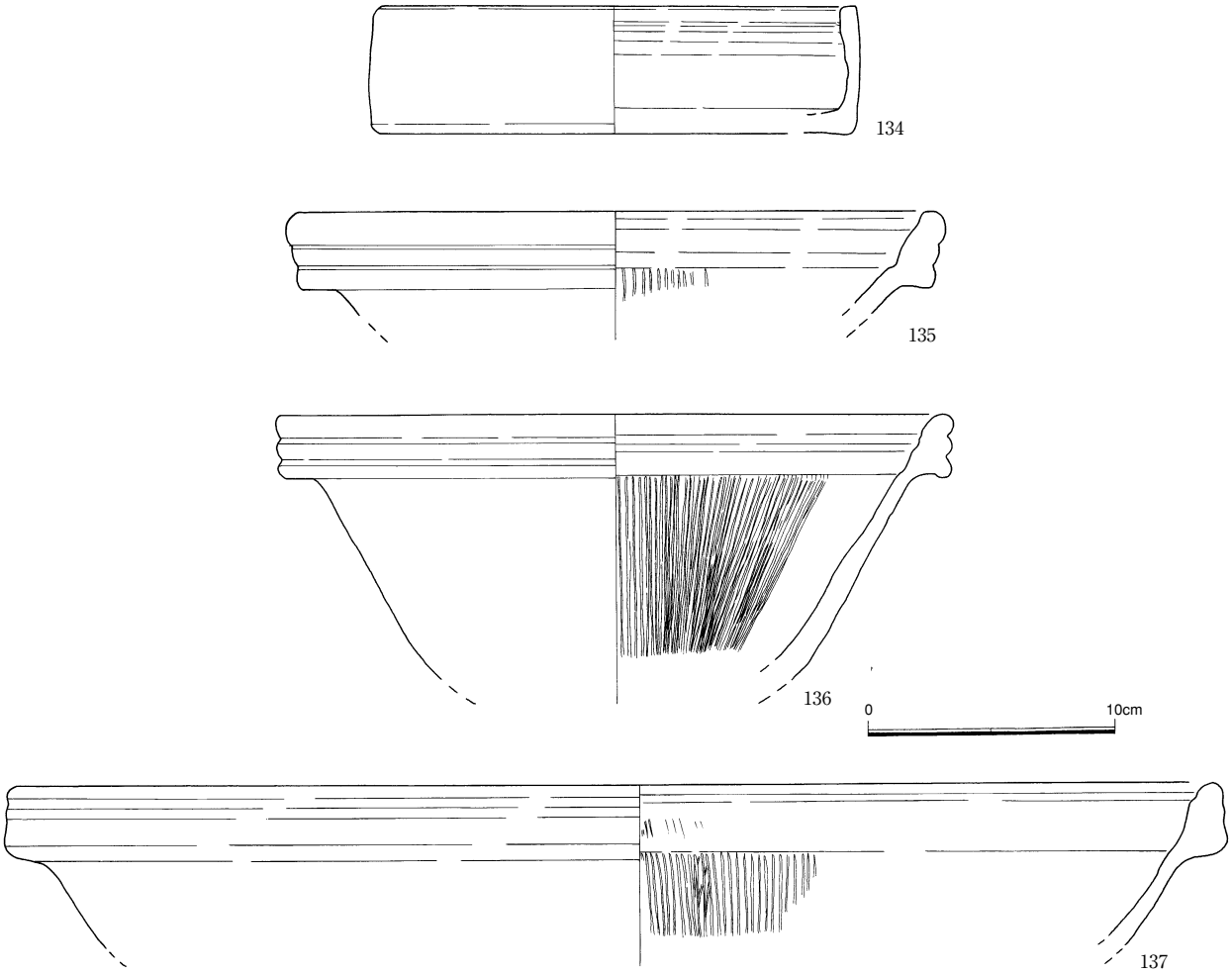
製作年代については、133を除いて、磁器の公約的な時間幅と大差がなく、おおよそ17世紀後葉～19世紀中葉の間に収まる。その中にあって、129の肥前系中碗は古く、17世紀代のものと考えられる。



第35図　磁器（３）



第36図　陶器



第37図　炻器

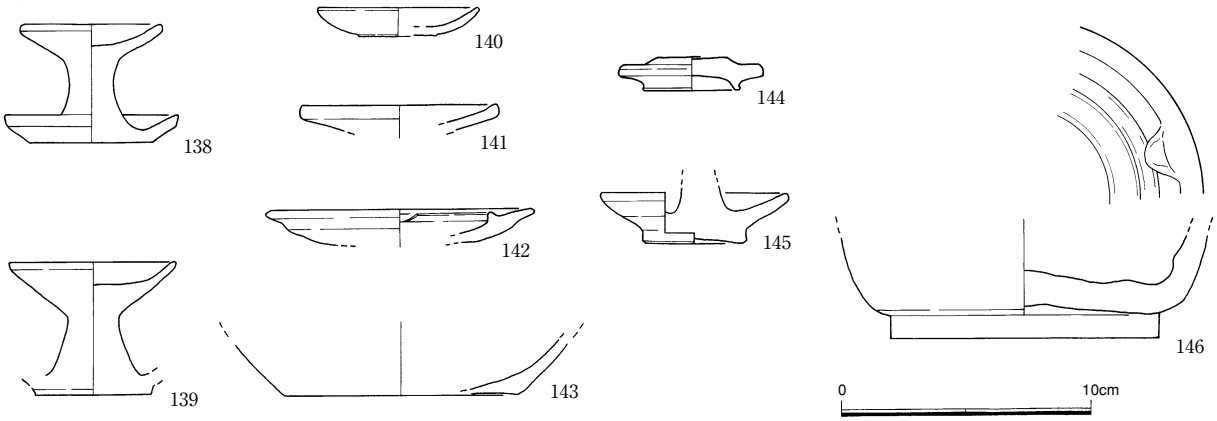
（８）炻器（第37図）

炻器は４点を図示した。134を除くといずれも第１層・耕作土からの出土である。134は備前系の火入、135～137は擂鉢である。135は堺焼で18世紀後半、136は備前焼で18世紀前半、そして137は堺焼で18世紀後半～19世紀前半にそれぞれ産地・時期比定でき、磁器や陶器にみられた製作年代の時間幅と一致している。

（９）土器（近世）・軟質陶器（第38図）

138・139・145は軟質陶器、それ以外は土器である。

138～143は灯明皿、144は蓋、145は秉燭、146は火入とみられる。灯明皿の138・139は台皿がつく。また142には仕切が環状にまわり、１箇所に切込みが入る。厳密には灯明受皿というべきかも知れない。



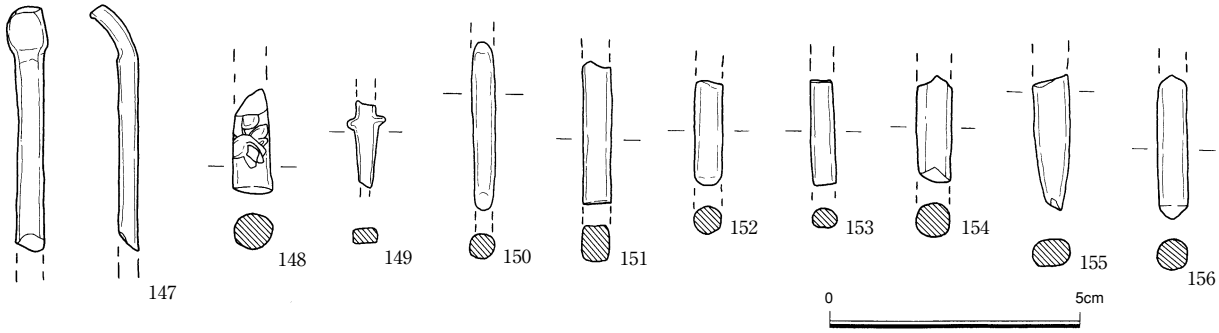
第38図　土器（近世）・軟質陶器

（10）簪（第39図）

簪とみられる破片10点を図示した。全形を捉えることができるものはない。147～149は簪として大過ないであろうが、150～156は不確実である。しかし、150～153はガラス製品であり、直径が147と類似している。また154～156は石製品であるが、断面形状がやはり150～153と似ている。こうしたことから150～156もまた簪の一部であると捉えた。147と150以外は第１層・耕作土からの出土である。

147はやや透明感のある青色を呈する。先端が耳掻状になっている。148は淡青色の本体に紺色のガラスを付加して文様を描いている。小片のため構図は不明瞭であるが、花ではないかとみられる。149は端部近くの破片で、小突起が左右に延び出ている。

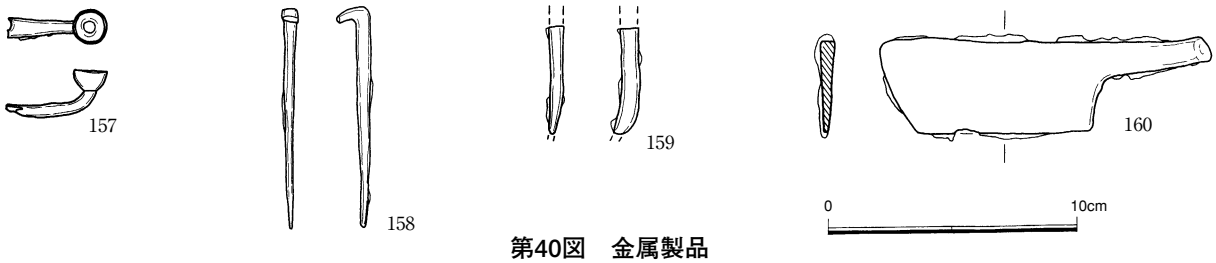
これらの簪は、紅猪口とともに「佐野町場」に関連するものではないかと考えられる。



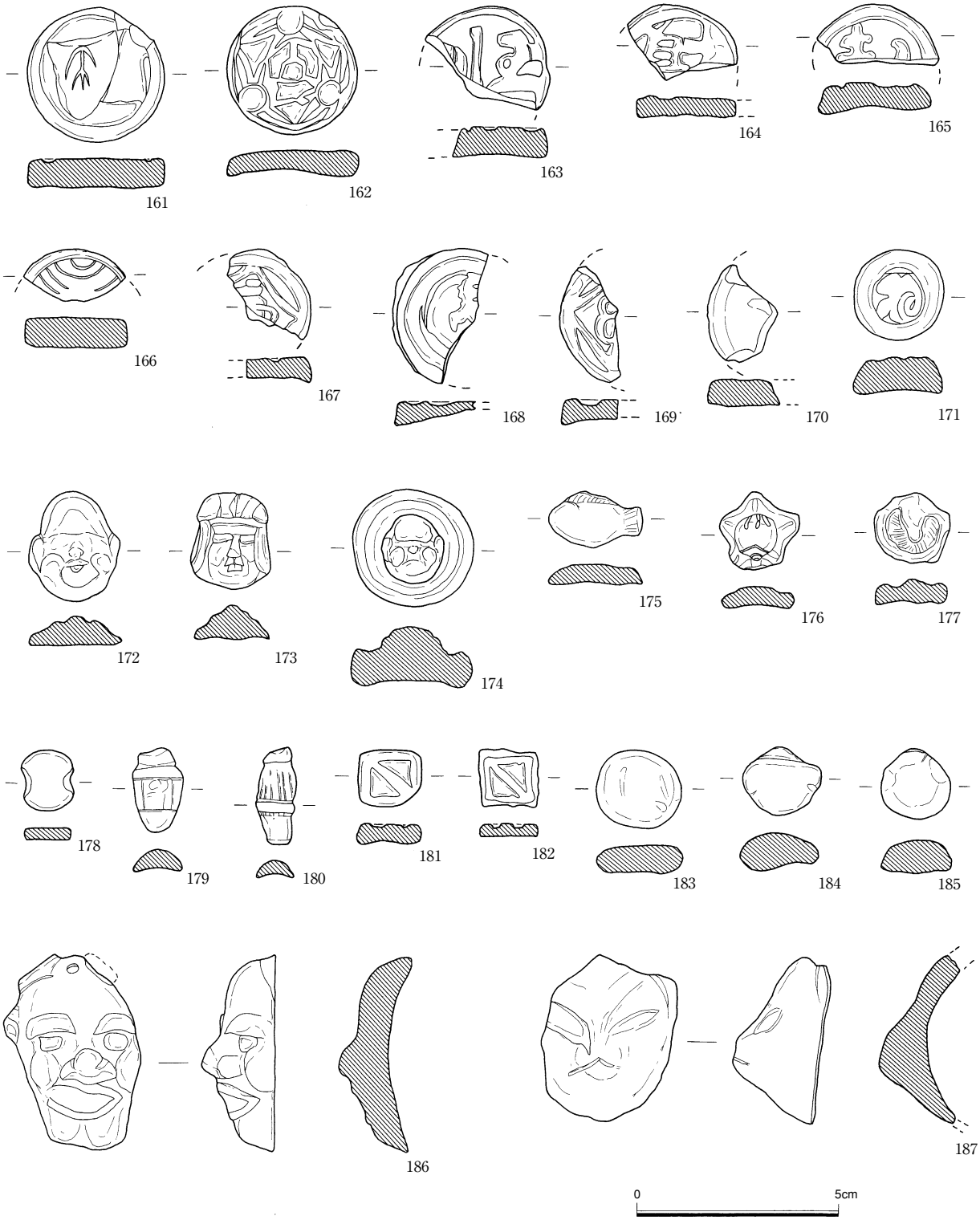
第39図　簪

（11）金属製品（第40図）

金属製品には青銅製品と鉄製品がある。前者は157の煙管の雁首が、後者には158・159の釘、160の鉈



第40図　金属製品



第41図　玩具（１）

がある。160は形状が庖丁にも似ているが、背部に厚みのあることから鉈とみた。

（12）玩具（第41・42図）

玩具には土製品のほか、ガラス製品、磁器、陶器があり、また土製品の中には泥面子、芥子面、面摸および像が認められた。

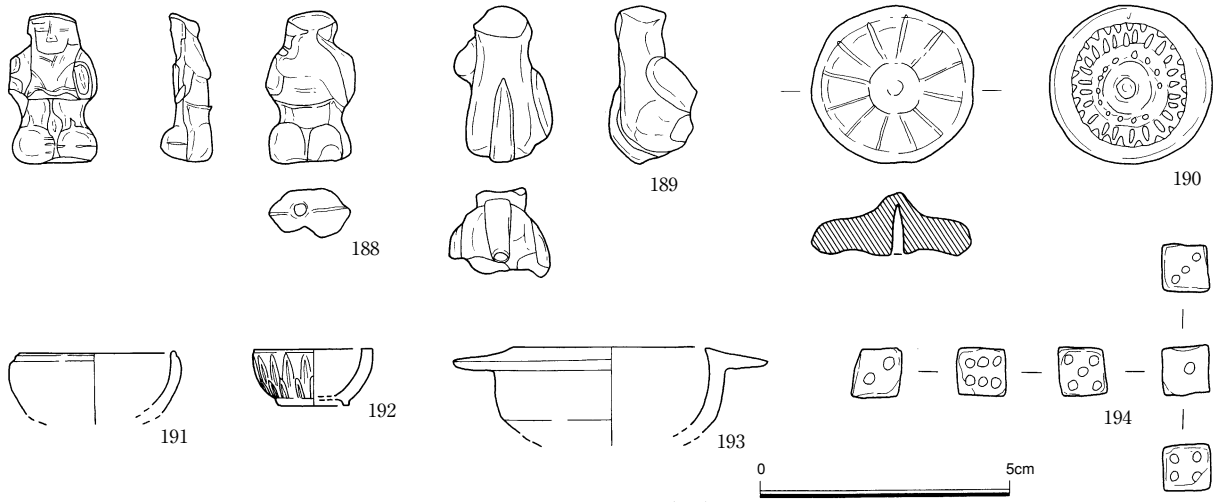
型作りで円盤形をなすものを泥面子とした。161～171である。161・162および171は全形を留めるが、他は破損品である。いずれも文様や文字が型押により表わされているが、171の「ね」を除くと表現内容が判然としない。ただこの171は、他のものに比べて小振りであるにもかかわらず厚味があり、泥面子の範疇で捉えてよいか疑問も残る。

泥面子と同じく型作りであるが、円盤形ではなく、像形そのものを表現し、裏面がユビナデにより窪んだものを芥子面とした。これは玩具というよりも遊興具であり、「佐野町場」との関連が濃く考えられるものである。なお芥子面は、19世紀代に入り製作され始めたといわれている。172～174は人顔、175は魚を表わしている。その他については、178の分銅、179の三身虫とみられるものもあるが、多くは表現内容が不明である。

186・187は型作りされた顔面部分である。186の頭頂部には紐孔がみられる。本来は後頭部もあり、空洞内部に土玉を入れた鈴であった可能性もある。187は狐を表した面摸である。

188は大黒天、189は犬の像である。ともに穿孔部があり、棒状のものが差し込まれたのであろう。190は玩具の笠部分あるいは独楽とみられる。

191と193は陶器、192は磁器のミニチュアである。194はガラス製のサイコロである。遺構や包含層に伴わないため時期比定に問題は残るが、ガラスの質や風化具合から近世のものと考えられる。



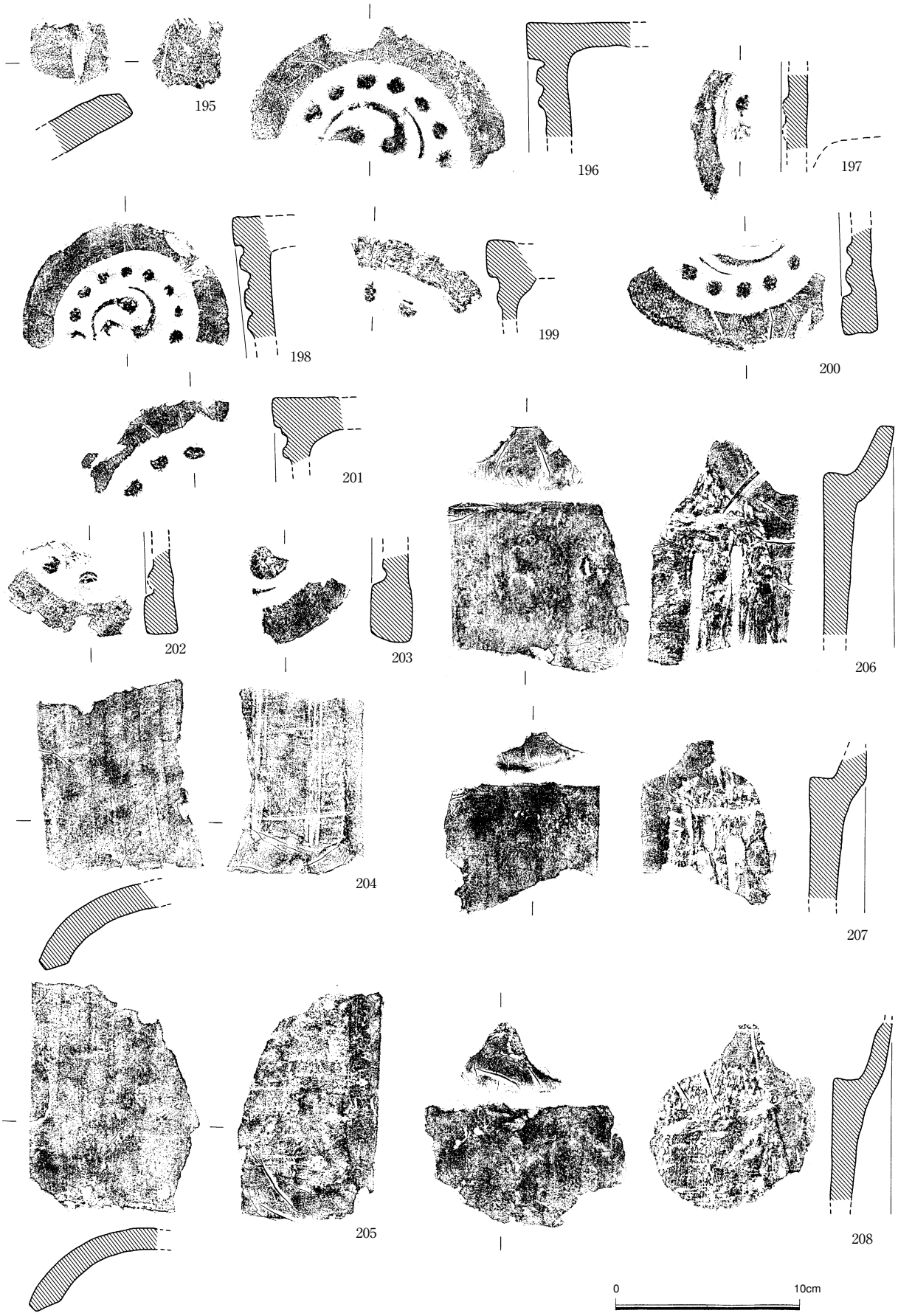
第42図　玩具（２）

（13）瓦（第43図）

14点の瓦の拓影を掲載した。195は平瓦の小片である。須恵質で、表面に布目圧痕を残していて、平安時代のものとみられる。同種の瓦片は３区066土坑からさらに１点出土しているが、瓦類の中では極めて少量である。

本調査地の東約1.3㎞には平安時代の創建といわれる檀波羅密寺がある。また白鳳期に創建されたとみられる禅興寺もあるが、これは調査地から南約３㎞の地点である。よって、この須恵質の瓦は檀波羅密寺のものではないかと推定される。

文様が残るのは軒丸瓦のみである。196～202では外区に珠文、内区に巴文を配しているが、203は巴



第43図　瓦

文のみであるとみられる。

204・205は平瓦、206～208は丸瓦で、これらは図示した以外にも数多く出土している。195以外、いずれも燻瓦であり、中～近世のものである。調査地周辺に瓦葺の家屋があった可能性とともに、熊野街道沿いの集落や「佐野町場」からもたらされたとも考えることができる。

（14）石製品（第44図）

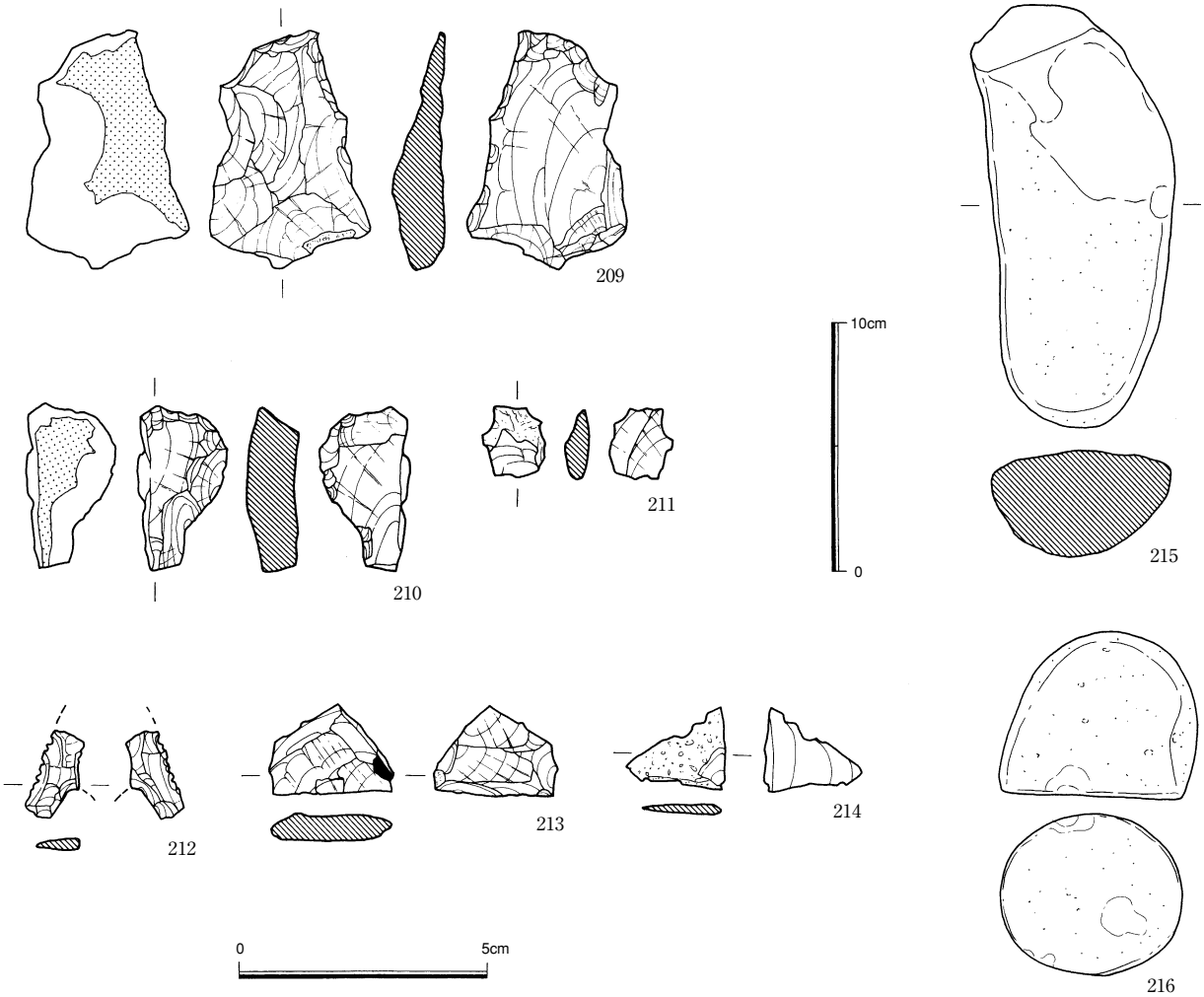
209～211は緑色チャートの火打石である。209と210では実測図の網掛け部分がより磨れている。211は小片であり、破損した一部であろう。

212はサヌカイト製の石鏃である。側辺が細部調整により鋸歯状になっている。縄文時代のものであろう。213・214はサヌカイトの剥片である。時期比定はできない。215・216は磨石である。ことに216の底面はよく磨れている。これらも時期比定できないが、212の石鏃とともに縄文時代のものと考えられる。

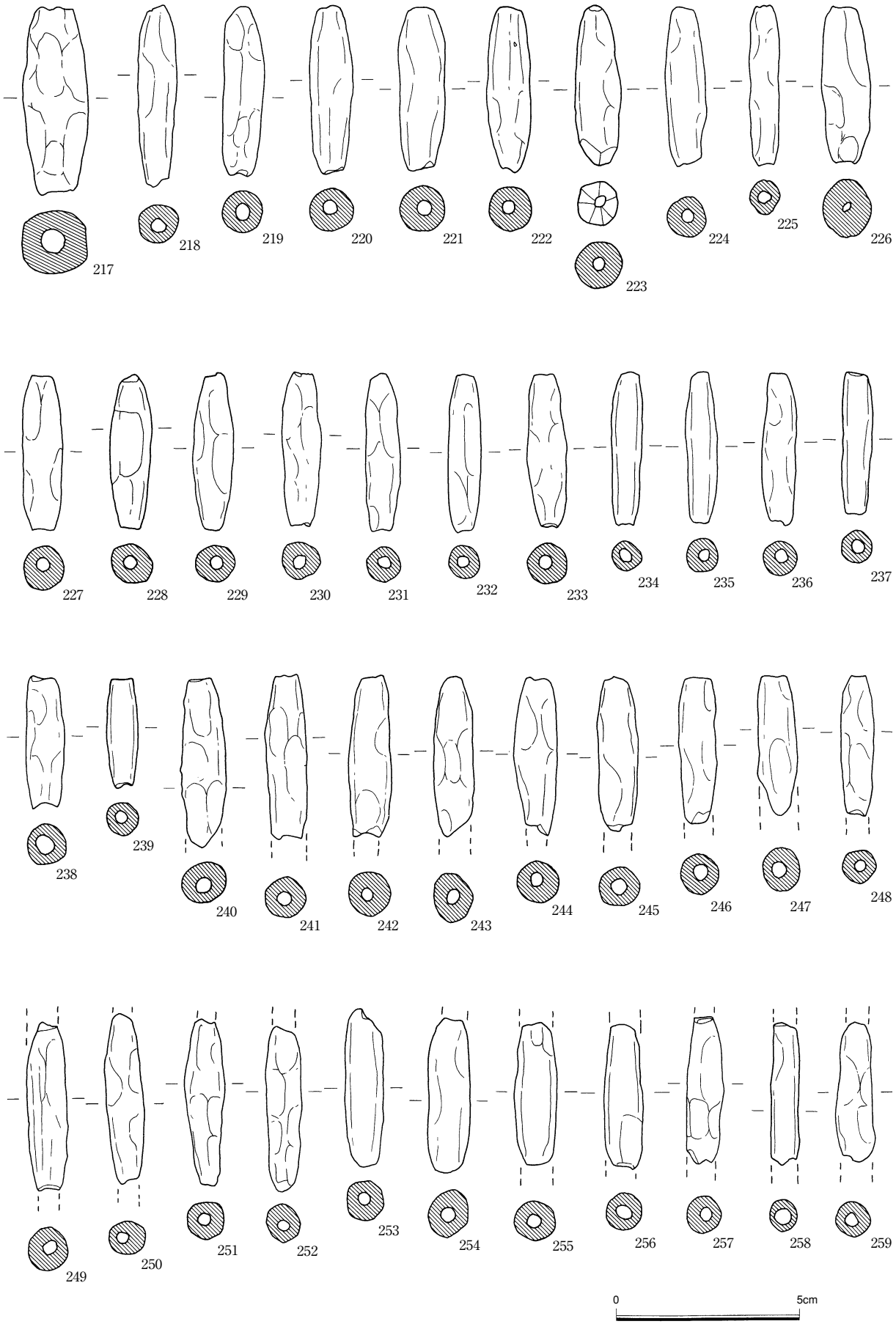
（15）土錘（第45～47図）

135点の土錘を図示した。全て管状を呈する。本来の形状を保つものは少ないが、大まかには長３～５㎝、直径１㎝にも満たない大半のものと、346～348のような長４㎝、直径３㎝ほどのもの、および長５㎝、直径６㎝ほどの算盤玉形を呈するもの（349～351）に分かれる。

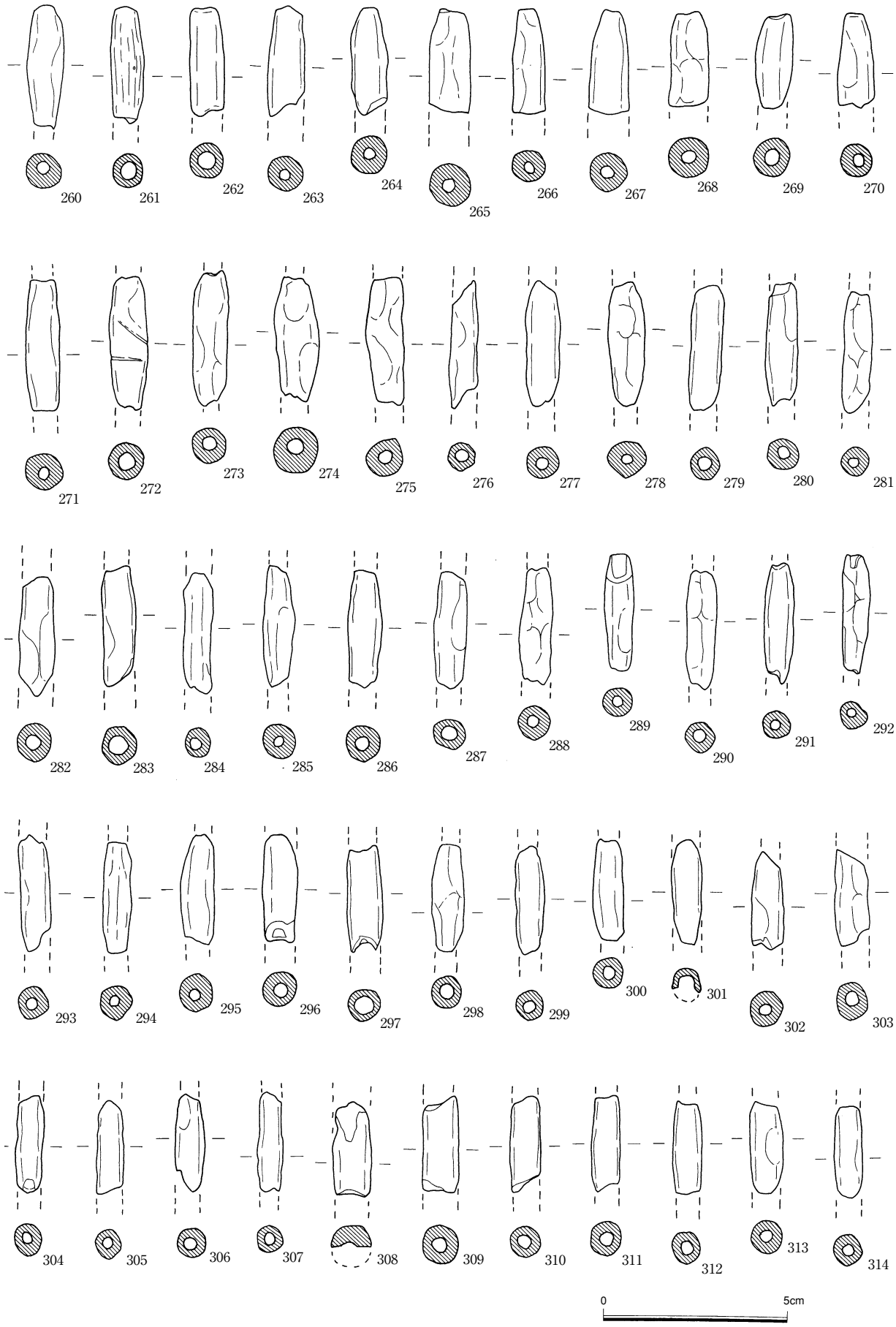
この土錘については、第４章第２節で改めて検討を行なう。



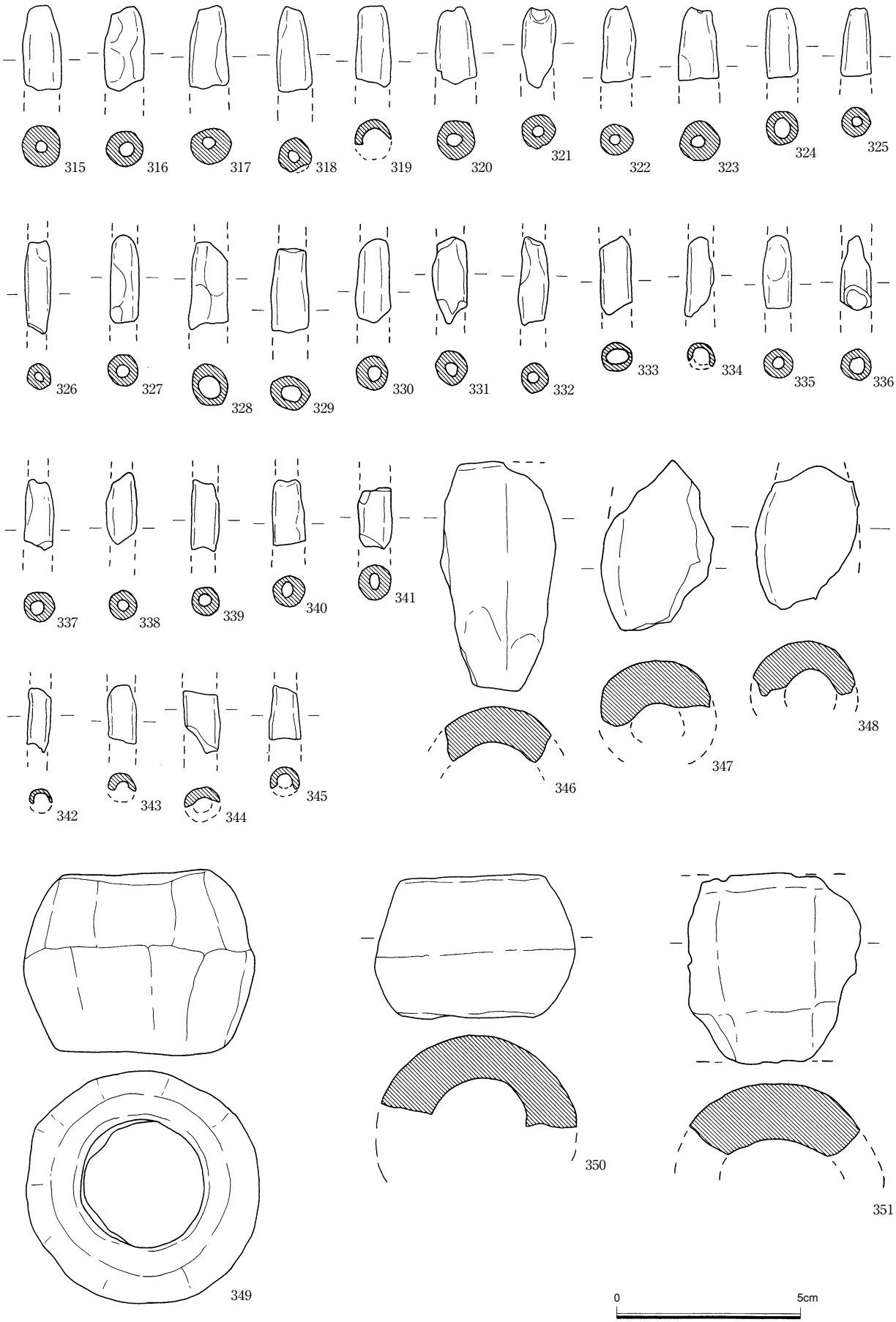
第44図　石製品


217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
0
5cm

第45図　土錘（1）


260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
0
5cm

第46図　土錘（２）


315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
0
5cm

第47図　土錘（3）

第４章　まとめ

第１節　調査地周辺の水田開発

第１層・耕作土出土の遺物から、17世紀末～18世紀中葉に調査地周辺の水田化が始まったとみた。そして、その耕作土に上面を覆われた素掘りの井戸の存在から、水田化以前は野井戸を伴う畑地であったと推測した。

調査地は「佐野町場」の北方約200ｍにあたる。したがって、調査地の発掘成果は町場の様相を直接示すものではない。しかし、ひとつは町場周辺の土地利用の在り方を知るために、いまひとつは調査地周辺の土地開発の歴史を明らかにするために、当地における水田開発の時期を確認しておく必要がある。

ところで、調査地周辺の水田開発にあたっては、溜池の開削が基本的には不可欠である。調査地をはじめとする泉州地域では主要河川の開析が深く、利用が困難である。したがって溜池からの水路が灌漑の主流となっている。

発掘成果からは、上述したように江戸時代前期後葉に水田化されたと考えられるが、当地周辺の歴史を捉える上で鍵となるのが絵図である。佐野およびその周辺地に関する中世以来の絵図が数多く残されており、歴史を明らかにする上で重要な手掛かりとなっている。

そこで、現存する溜池と絵図に描かれた溜池とを重ね合わせて絵図中に調査地の位置を当てはめ、時系的に絵図をみることで、調査地周辺の状況を捉えていきたい。

正和五（1316）年作成の「日根荘日根野村荒野絵図」には、熊野街道以東の水田開発状況が表わされている。井川水路からの導水による長滝周辺の開発と、溜池による檀波羅丘陵西麓の開発が認められる。ただし熊野街道より海側は、水田開発が進んでいなかったようである。

このことは、延慶三（1310）年頃の作と考えられている「日根荘日根野・井原両村荒野絵図」で、熊野街道以西が「荒野」と記されていることからも窺われる。なおこの絵図に表わされた井原村の水田は、村周辺が檀波羅丘陵西麓沿いに連なる溜池からの水路の下流にあたるという地理的条件によって開発されたとみられる。

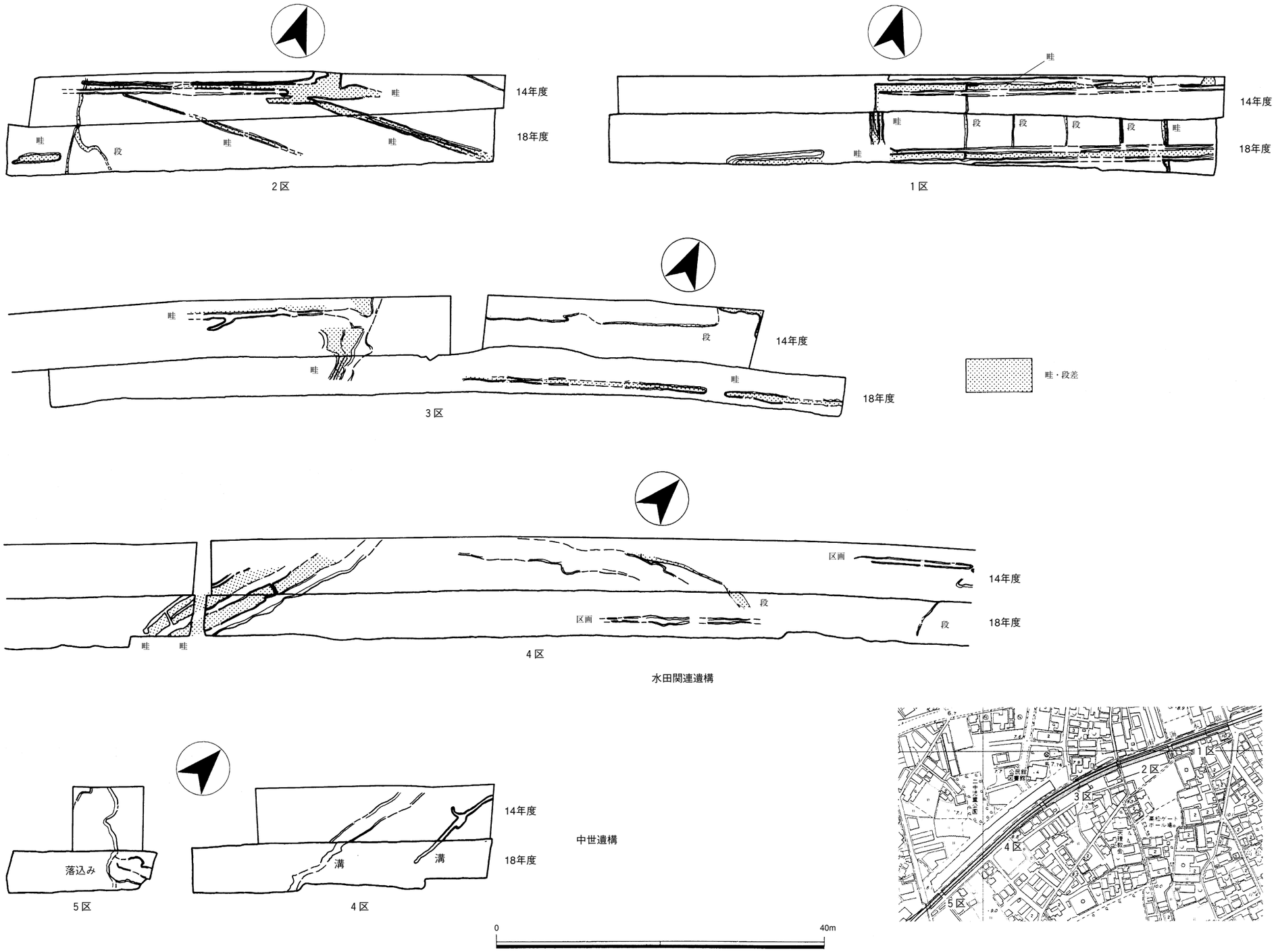
このように、14世紀前葉頃には、調査地周辺が荒野であったことがわかる。こののちしばらくの期間、調査地周辺に関わる絵図はない。

慶長十（1605）年の「和泉国四郡絵図（慶長和泉国絵図）」（写）では、「佐野」、「嘉祥寺」、「尾城」（瓦屋）、「佐野村町」（市場）の村名はみられるが、高松の地名はない。高松の名が現われるのは元禄九（1696）年の作とみられる「和泉国分間絵図」（写）からであろう。この絵図では「佐野ノ内高松」と記され、高松村が佐野村の分村であることを示している。

同じく17世紀末の絵図に「泉州日根郡佐野村領地絵図」がある。元禄十二（1699）年の製作である。佐野村の南に近接して村が描かれていて、村名の記載はないが、その位置から高松村とみられる。

これらのことから、17世紀末になって、調査地周辺から東にかけての地域に集落が形成されたと考えることができる。

さらに重要な点は、「泉州日根郡佐野村領地絵図」において調査地周辺に配水の役を担った新之池と中池が描かれていることである。しかも、ともに「新」という文字が冠されていて、開削が正保二



第48図　調査地および14年度調査の水田関連遺構・中世遺構

（1645）年以降であったことを示している。すなわち、調査地における水田開発の時期比定はおくとしても、少なくとも17世紀中葉には水田開発のための水利条件が整いつつあったことは確かであろう。

さて調査地周辺の水田開発を捉える上で最も重要なのが、「佐野村用水絵図」と「佐野村・湊村立会絵図」の２枚の絵図である。

「佐野村用水絵図」（上善寺蔵）は製作年代が不詳であるが、「佐野村・湊村立会絵図」と重複する記載内容であり、江戸時代前期後葉のものではないかと推測される。

この絵図ではおもに、熊野街道沿いの新之池、大池、道之池、そして十蔵池の四池付近から海までの間の溜池や水路が丁寧に描かれている。この図により、溜池と水路との関係を知ることができる。

溜池の位置を手掛かりとしてこの「佐野村用水絵図」に調査地を入れ込むと、調査地周辺へは新之池、中池および越中池からの水路が貫通していることがわかる（第50図）。先にみた「泉州日根郡佐野村領地絵図」には越中池の記載がなかったが、元禄期初葉には開削がなされていたと考えられる。

「佐野村用水絵図」と全体の絵図構成が似るものの、水路がより細部にわたって描かれているのが「佐野村・湊村立会絵図」（第51図）である。この絵図には裏書がなされていて、元禄二（1689）年五月二一日の製作であることが記されている。

絵図全体に網目状に巡らされた水路が描かれていて、複雑な水利関係をより詳細に窺うことができる。そして調査地周辺への配水は、「佐野村用水絵図」と同じく、新之池、中池および越中池によっていることが示されている。この３つの溜池が調査地周辺の水田化の鍵である。

この２枚の絵図からみると、17世紀末には３つの溜池が既に開削されていて、そこから下流に当たる調査地周辺方面への灌漑水路が完備されたとみて大過ないであろう。つまりこの時期、水田開発のための条件は整っていたといえる。

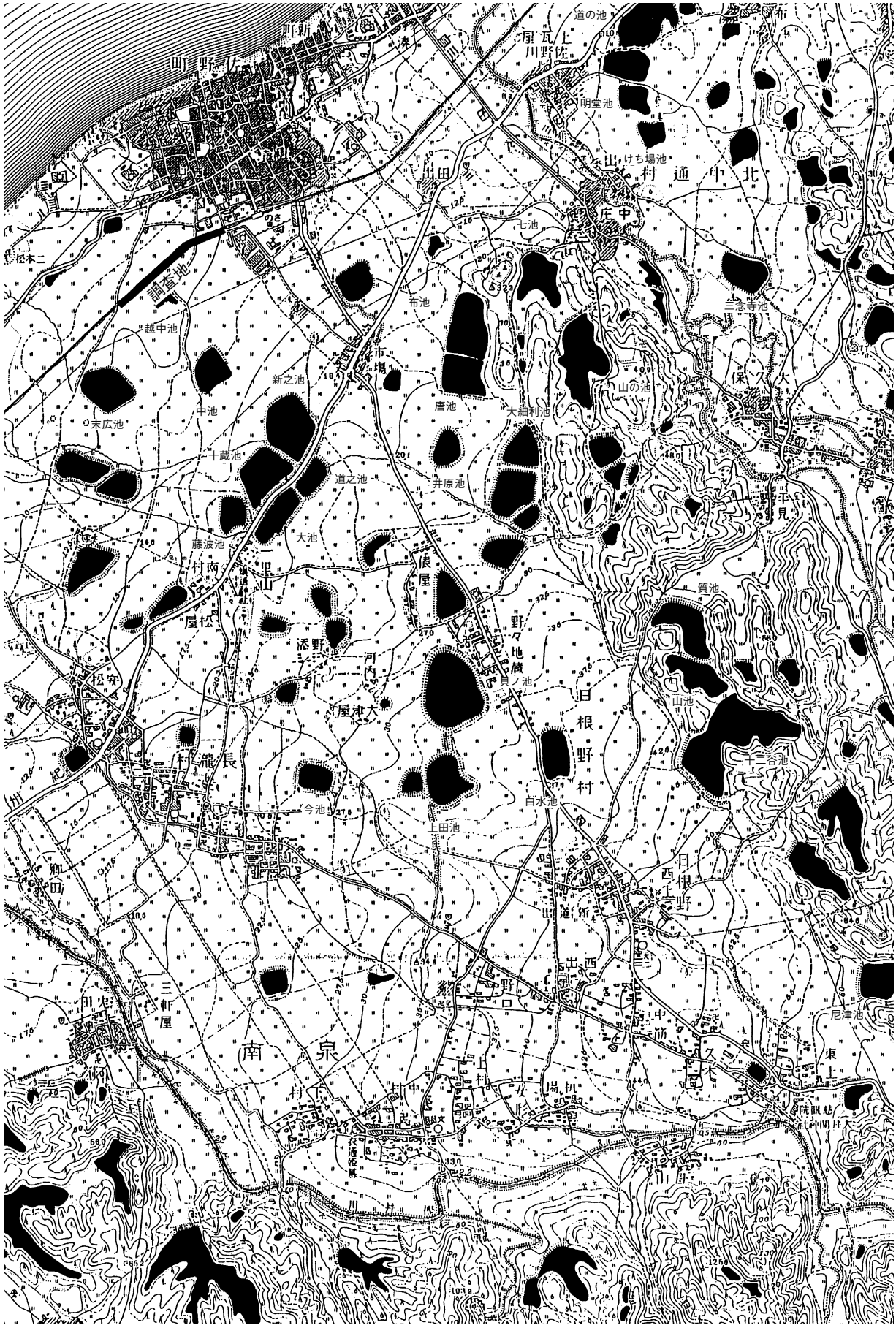
ところで、宝暦十一（1761）年の「日根野村井川用水絵図」、「日根野村庄屋・年寄口上」（写）および宝暦十四（1764）年の「日根野村庄屋・年寄口上草案」から、日根野村に対し佐野村が用水路の分岐を求めたことがわかる。このことから、18世紀中葉においても佐野村周辺の灌漑需要が満されていなかったことを推測することができる。そして、調査地周辺の状況を直接示すのではないが、18世紀中葉においてもなお水田開発の残された地点があったことが推定される。

さらにまた、「日根郡鶴原村絵図」（寛政十（1798）年頃作）をもとに藤本清二郎は、新しい溜池（今池）の構築によってその下流域では畑地が水田化されたことを指摘している（藤本1997）。この絵図には畑地と水田の入り混じった状況が描かれていて、面的に水田化が進んだのではないこと、また水路の脇であっても必ずしも水田になっているとは限らないことを知り得る。

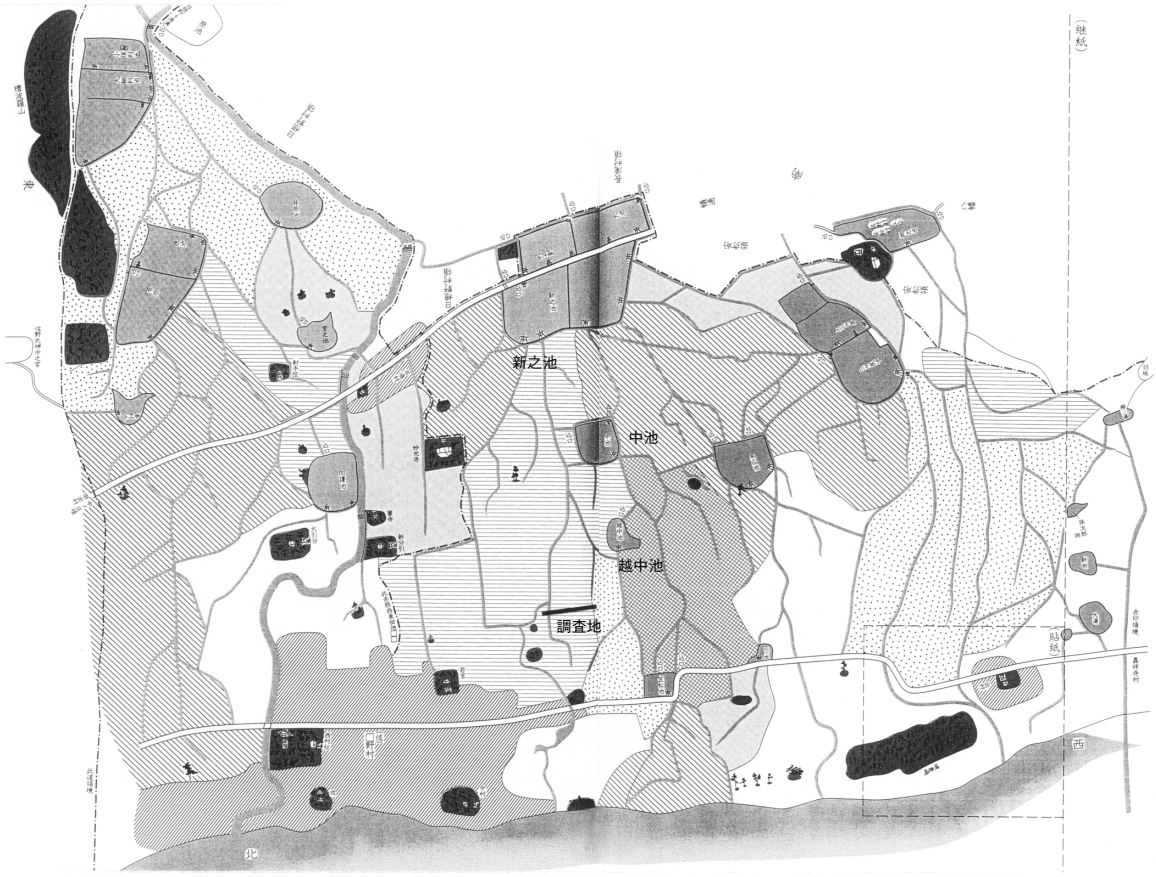
こうした状況は、江戸中期の作とみられる「佐野浦町浜絵図」にも認められる。この絵図においても、畑地と水田が併存しているのである。

つまり江戸中期においても、鶴原村や佐野浦では一円的に水田化が進んでいたのではなく、灌漑の整った地点から順次畑地から水田に造りかえられていったと考えられる。そしてこのことは、調査地周辺にも当てはまろう。すなわち、17世紀末頃より水田化が進められる一方で、旧来の畑地も残っていたが、遅れてそれらも次第に水田になったという流れを想定することができる。

調査地の第１層・耕作土からは17世紀末～19世紀中葉の遺物が出土している。このことから、18世紀中葉には既に水田開発がなされたと考えた。そして絵図から判読できる状況もまた、その開発時期をほぼ裏付けるものであった。



第49図　泉佐野周辺の溜池



第50図　佐野村用水絵図と調査地（新修泉佐野市史第13巻より転載・改変）

第51図　佐野村・湊村立会絵図と調査地（新修泉佐野市史第13巻より転載・改変）

なお出土遺物の平均重量と平均面積についてみると、磁器が１点平均3.0ｇ、3.6㎠で、１辺２㎝足らずの大きさ、陶器は１点平均7.0ｇ、5.9㎠で、１辺2.5㎝足らずの大きさである。瓦にしても１点平均19.5㎠であるので、１辺4.5㎝足らずである。つまり遺物破片の小ささからすると、耕作時の取り除きが考えられるが、破片数の多いことから、それらは耕作土を形成する客土や町場から運ばれた下肥の中に混入していた可能性が高い。調査地では、洪積礫層上の粘土層が薄いため、かなりの量の客土がなされて耕作土が形成されたと考えられるのである。

したがって調査地周辺での水田開発は、水利条件の整備とともに、客土の確保も必要であったろう。そして紅猪口や簪の出土から、客土の供給元もまた「佐野町場」周辺であるとみられる。町場の拡張に伴って掘削された土が利用されたと考えられる。

また、水田化される前は、「日根郡鶴原村絵図」や「佐野浦町浜絵図」から窺えたように畑地であったとみられる。このことは、既述したように、第１層・耕作土下で検出された野井戸である素掘りの井戸の存在からも裏付けられる。

ただし、この畑地がいつ本格的に形成されたかは明らかにできない。上町遺跡や上町東遺跡における集落の存在から、14世紀以降にその周辺に耕作地が広がっていた可能性はある。ただしそれが本調査地まで広がっていたかは不明であるし、17世紀代まで継続されていたと考えるのも難しい。上町遺跡では15世紀代に集落が廃絶し、そののち耕作地となったとみられている（泉佐野市教育委員会1991）。これをふまえれば、一定度の範囲にわたって畑地となったのは、16世紀代とみることが可能かもしれない。

表１　第１層・耕作土出土遺物の大きさ

種類	点数	平均重量(g)	平均面積(㎠)
土　　器	600	6.2	5.3
須 恵 器	27	10.0	8.5
黒色土器	59	1.4	3.0
瓦　　器	103	1.6	3.0
瓦質土器	20	14.6	10.9
炻　　器	75	18.8	9.8
磁　　器	722	3.0	3.6
陶　　器	695	7.0	5.9
瓦	160	45.0	19.5

第２節　土錘について

土錘は全ての調査区から135点以上出土している。遺構からの出土は10点と少なく、ほとんどが第１層からの出土である。泉佐野市教育委員会による既往の調査の際にも近世陶・磁器とともに多量の管状土錘が出土していること、そして005溝などでは近世陶・磁器とともに出土し、さらに多くの土錘が出土した第１層からも近世～近代にかけての陶・磁器が出土していることから、当遺跡から出土した土錘は近世～近代にかけての遺物であると考える。出土した土錘はいずれも管状土錘である。完形品は28点であるが、残存状態が良好なものが多く、出土したものを可能な限り図化した。個体ごとの記述は観察表にゆずり、ここでは土錘にみられる特徴について述べることにする。

当遺跡から出土した完形品の法量によって、長さ３～５㎝、幅１㎝前後の小型、長さ５㎝前後、幅６㎝前後の大型に大別することができる。さらに、完形品ではないが幅が３㎝前後に復元できるものも存

在することから、これらを中型として分類する。この分類は、完形品以外にも適応でき、小型品は128点（218～345)、中型品は２点（347・348)、大型品は４点となる。大型品にはさらに、中央部に稜を作り出して算盤玉形を呈すもの（349・350）と、稜がなく平滑なものがある（346・351)。なお、217は形が不整形で他に比べて胎土も粗く、焼成が不良である。類例がなく、ここでは類型化せずに例外としておく。

小型品の平均重量は4.0ｇである。中型品は完形品がないため不明であるが、大型品は147.0ｇである。

小型品の孔径は、0.3㎝前後に集中することから一定の規格を有していたことがうかがえる。また、孔内に長軸と平行する繊維状圧痕がみられ､竹櫛のような棒状工具に粘土塊を巻きつけて成形している。226は、一方の端部が内側に入り込み、もう一方の端部が外側に突出しており、工具から引き抜いた痕と考えられる。また、多くの個体において孔内が均質に焼成を受けていることから、工具から粘土塊を引き抜いた後に乾燥させ、その乾燥中に同一工具に新たな粘土塊を巻きつけ、その作業を繰り返すことによって大量に生産したと考えられる。中・大型品も同様の方法で製作されたと考えられるが、小型品とは違い孔内には長軸と直交するナデが施されている。

１点のみではあるが片方の端部を削ることによって長さを調整したものが存在する（223)。

胎土に含まれる砂礫粒は、主に石英・長石・チャート・くさり礫・赤色粒子である。含まれる砂礫の量と種類から胎土を大きく４つに分類することができる。砂礫粒を多量に含むもの（ｉ類)、少量含むもの（ii類)、ほとんど含まないもの（iii類)、くさり礫・赤色粒子を多量に含むもの（iv類）である。ｉ・ii類は、大・中・小型品といった形態に関係せずにみられるが、iii・iv類は小型品でしかみられない特徴がある。

それでは当遺跡から出土した管状土錘は何に使用したものであろうか。管状土錘を網錘とするかどうか使用痕などがみられないため遺物から判定する材料は乏しい。しかし、同形同大の土錘が多量に出土していること、さらに泉佐野市地域は中世末から近世にかけて漁業・廻船業の町として発展してきた地域であることからこれらの土錘は網錘と考えることができる。それでは、どのような網を使用し、そして何を捕っていたのであろうか。瀬戸内海沿岸地域の土錘の民俗例を分析した真鍋篤之は、孔径が大きく［0.25＜Ｌ（孔径の二乗)］、ずんぐりとした形態［０＜Ｐ（長さを最大幅で徐する）＜２］のものは地曳網や舟曳網など雑多な網に使用されているのに対して、孔径が小さく［０＜Ｌ≦0.25］、細長い形態［２＜Ｐ＜4.5］のものは刺網・投網に使用されたものであることを明らかにしている（真鍋1994)。真鍋の方法を利用して検討したのが第52図である。当遺跡出土の小型品は［０＜Ｌ≦0.25］［２＜Ｐ＜4.5］におさまり、刺網・投網に使用された錘、大型品は［Ｌ＝10.89］［Ｐ＝0.79］となり地曳網・舟曳網などの雑多な網に使用されていた錘となる。

ここで近世の泉佐野市周辺における漁法について記されている文献史料をあげてみたい。

寛永17（1640）年『佐野浦書上』

浦役銭相調申事は、釣人・手繰引・大網・小網・諸商人廻船猟船所有

承応２（1652）年『岡田浦玉田文書』

一、（前略）佐野浦住吉川北之流迄を限、両川之間を大網入相引可被申事

一、かけあミ・手くり網之儀は、

延享３（1746）年（『泉佐野市史』257頁記載）

（前略）和泉灘漁師共之漁事場故、手繰引揚并立網等立置申候所江

寛政８（1796）年『和泉名所図会』「深日浦漁船」

「てくりのあみ」「おきひき」

明治15（1882）年『大阪府漁撈一斑』

佐野村「大網」「壺網」「打瀬網」「建網」「雑魚網」

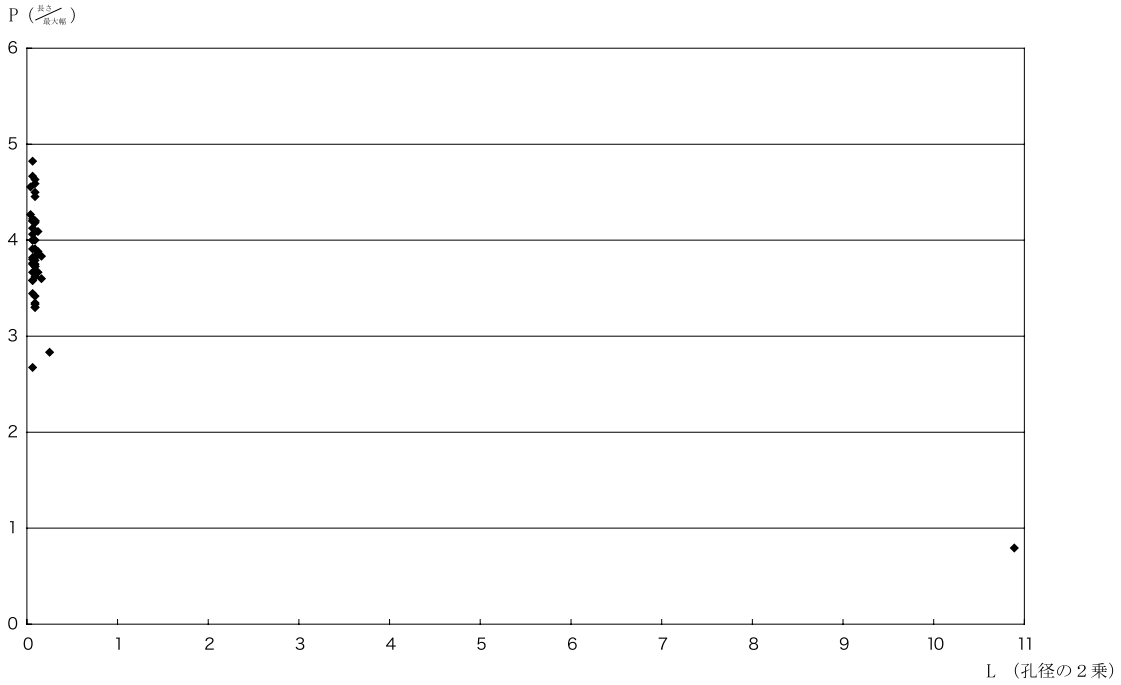
また、佐野漁民が遠く対馬で操業していた「佐野網」では、主要な漁法として地曳網と八駄網を使用して操業していたらしい（『泉佐野市史』261頁）。

５つの史料にみられる網を『日本水産捕採誌』に準拠して分類すると、「小網」「壺網」「雑魚網」は不明であるが、「手繰」「手くり網」「てくりあみ」「打瀬網」は繰網、「かけあミ」「八駄網」は敷網、「立網」「建網」は定置網または刺網、「大網」は地曳網、「沖引き」は舟曳網と推察される。

以上のように文献史料と先ほどの検討と照らし合わせると当遺跡から出土した小型管状土錘は「建網」、大型品は「大網」または「沖引き」に使用する網錘である可能性が非常に高いのである。そして、「建網」は大阪湾沿岸地域で使用されていたもので、主にチヌ鯛、鰯、鰈、鱧などを漁獲物としていたらしい（『泉佐野市史』259頁）。

「佐野町場」の範囲に位置する若宮遺跡、上町東遺跡からも近世遺物と管状土錘がともに出土している。「佐野町場」として中世末から近世に漁業を中心に発達したとするこれまでの研究と符合する。また、少し北の「湊村」に位置する湊遺跡から多量に出土する有孔棒状土錘が「佐野町場」の範囲ではほとんど出土しないことは、遺跡の性格の違いを表わしている可能性がある。

明治時代においてもなお、多くの土錘は漁夫自製でまかなわれていたらしい。しかし、当遺跡出土の土錘は、胎土と形態に一定の有機的関係がみられる。これは個別的に土錘を生産していたのではなく、ある一定のまとまりにおいて生産されていたことを想定できるのかもしれない。また、今回の調査では出土しなかったが浮子、魚骨などを検討することによりさらに中世～近世にかけての泉佐野市地域における漁業の実態を復元できるものと考えられる。



第52図　大西遺跡出土土錘法量統計

遺物観察表

遺物No.	挿図No.	図版No.	調査区	遺構・層	実測図No.	種別	時期・系統	器種	残存率	法量（cm）	器形の特徴	整・成形の特徴
1	20	13	3区	064 井戸	310	陶器	近世	小鉢	B	（口）14.2 （高）現3.1	浅丸形	【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
2	20		3区	064 井戸	329	磁器	近世	小皿	A	（口）12.1 （高）現2.3	丸形、くらわんか手	【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
3	20	11	3区	064 井戸	343	磁器	近世	中碗	B	（口）9.5 （高）4.7	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
4	20	11	3区	064 井戸	342	磁器	近世	中碗	A	（口）9.5 （高）4.7	丸形、くらわんか手	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
5	28		4区	攪乱・盛土	202	須恵器	TK217	杯身	A	（受部）10.6 （高）2.0	受部立上がり短い	【胴部】（外）ユビナデ・ヘラケズリ（内）ユビナデ
6	28		4区	第2′層	287	須恵器	古代	—	A	（底）9.6 （高）現1.8	底部ほぼ平坦	【底部】（外）回転糸切り（内）ユビナデ・ヘラナデ
7	28		1区	第1層	223	須恵器	古代	円面硯	A	（口）14.7 （高）現2.2	口縁部端立上がり僅か	【円面部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
8	29		5区	第2層	275	瓦器	中世	皿	A	（口）10.2 （高）現1.7	口縁部外反	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
9	29		5区	第2層	199	瓦器	中世	皿	A	（口）12.2 （高）現2.1	胴部～口縁部内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
10	29		5区	第2層	198	瓦器	中世	皿	A	（口）14.6 （高）現1.8	胴部～口縁部内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
11	29		4区	第2′層	205	瓦器	中世	皿	B	（口）7.8 （高）現1.3	胴部～口縁部内湾	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
12	29	8	4区	第2′層	269	瓦器	中世	椀	A	（口）13.2 （高）現2.6	やや直線的胴部～口縁部	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
13	29		4区	第2′層	263	瓦器	中世	椀	A	（口）13.4 （高）現2.2	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
14	29	8	4区	第2′層	268	瓦器	中世	椀	A	（口）15.2 （高）現2.1	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
15	29	8	4区	第2′層	286	瓦器	中世	椀	B	（口）15.1 （高）現3.9	胴部～口縁部内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
16	29		4区	攪乱・盛土	265	瓦器	中世	椀	A	（口）13.3 （高）現2.3	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
17	29	8	4区	第2′層	277	瓦器	中世	椀	A	（口）14.8 （高）現2.2	口縁部内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
18	29	8	4区	第2′層	285	瓦器	中世	椀	A	（口）16.6 （高）現2.0	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
19	29		4区	第2′層	284	瓦器	中世	椀	A	（口）12.0 （高）現2.4	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
20	29		5区	第2層	270	瓦器	中世	椀	A	（口）14.0 （高）現2.0	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
21	29		1区	005溝	282	瓦器	中世	椀	A	（底）3.8 （高）現1.4	高台退化	【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
22	29		4区	第2′層	264	瓦器	中世	椀	A	（底）5.0 （高）現1.0	高台退化	【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
23	29		5区	第2′層	276	瓦器	中世	椀	A	（底）3.5 （高）現1.3	高台退化	【胴部】（外）ユビナデ・ユビオサエ（内）ユビナデ
24	29		5区	第2′層	267	瓦器	中世	椀	A	（底）5.8 （高）現1.2	高台退化	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
25	29	8	4区	第2′層	279	瓦器	中世	椀	A	（底）5.0 （高）現1.2	高台退化	【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
26	29		4区	第2′層	283	瓦器	中世	椀	A	（底）3.9 （高）現1.2	高台退化	【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
27	29		4区	第2′層	278	瓦器	中世	椀	A	（底）4.8 （高）現1.2	高台退化	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
28	29		4区	第2′層	271	瓦器	中世	椀	A	（底）6.0 （高）現0.9	高台退化	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
29	29	8	5区	第2′層	266	瓦器	中世	椀	A	（底）6.2 （高）現2.1	高台断面長三角形	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
30	29		4区	第2′層	280	瓦器	中世	椀	A	（底）3.8 （高）現1.1	高台退化	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
31	29		4区	第2′層	281	瓦器	中世	椀	A	（底）3.9 （高）現1.2	高台退化	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
32	30	8	5区	第2′層	196	土器	中世	皿	B	（口）6.3 （高）1.0	口縁部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
33	30		5区	第2層	219	土器	中世	皿	B	（口）6.0 （高）1.1	胴部～口縁部外反気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
34	30	8	4区	攪乱・盛土	220	土器	中世	皿	B	（口）6.5 （高）1.3	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
35	30		4区	第2′層	204	土器	中世	皿	B	（口）7.0 （高）1.0	受部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
36	30	8	5区	第2′層	200	土器	中世	皿	A	（口）7.3 （高）1.2	口縁部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ

文様の特徴	焼成	外/表	内/裏	備考	胎土
	良好			肥前系（京焼風）、1690～1740年代	黒色粒子
交叉文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
草花文	良好			肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
二重網目文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
	良好	N5/0	N6/0		白色粒子、黒色粒子
	良好	N6/0	N6/0		白色粒子
	良好	10YR5/1	10YR5/1		白色粒子、黒色粒子
	やや不良	N2/0	N2/0	13世紀	長石、石英、白色粒子
	良好	7.5Y8/1	7.5Y8/1	13世紀前半	長石、石英、黒色粒子
	やや不良	2.5Y7/2	2.5Y7/2	13世紀前半	石英、チャート、酸化赤粒
	やや不良	7.5YR7/1	7.5YR7/1	13世紀	長石、チャート、白色粒子
	良好	N3/0	N3/0	13世紀前半	長石、石英、白色粒子
	やや不良	7.5Y3/1	7.5Y3/1	13世紀前半	長石、黒色粒子
	やや不良	N2/0	N2/0	13世紀前半	長石、白色粒子
	良好	N2/0	N2/0	内面ミガキ、12世紀後半	長石、白色粒子
	良好	N2/0	N2/0	13世紀前半	長石、白色粒子
	やや不良	N3/0	N3/0	12世紀後半	長石、白色粒子
	良好	N5/0	N6/0	12世紀後半	長石、白色粒子
	良好	N5/0	7.5Y7/1	12世紀後半	長石、チャート、白色粒子
	良好	N3/0	N3/0	内面ミガキ、13世紀前半	長石、白色粒子、黒色粒子
	良好	N8/0	N7/0	内面ミガキ、13世紀後半	長石、チャート、白色粒子
	やや不良	5Y8/1	5Y8/1	13世紀中葉	長石、黒色粒子
	良好	N6/0	N6/0	13世紀後半	長石、黒色粒子
	良好	N4/0	N4/0	内面ミガキ、13世紀中葉	長石、黒色粒子
	良好	N5/0	N5/0	内面ミガキ、13世紀中葉	長石、白色粒子
	やや不良	N3/0	N3/0	13世紀中葉	長石、白色粒子
	やや不良	2.5Y6/4	2.5Y6/4	13世紀中葉	長石、白色粒子
	良好	N6/0	N6/0	13世紀中葉	長石、黒色粒子
	良好	N2/0	N2/0	12世紀後半	長石、白色粒子、黒色粒子
	不良	N3/0	N3/0	13世紀中葉	長石、白色粒子
	やや不良	5Y7/1	5Y7/1	13世紀中葉	長石、白色粒子
	やや不良	7.5YR7/4	7.5YR7/4	13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	良好	10YR6/3	10YR6/3	13世紀	石英、白色粒子
	良好	7.5YR8/4	7.5YR8/4	13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	良好	7.5YR5/6	7.5YR5/6	13世紀	石英、酸化赤粒
	やや不良	10YR7/3	10YR7/3	13世紀	長石、石英、酸化赤粒

実測遺物観察表 1

遺物No.	挿図No.	図版No.	調査区	遺構・層	実測図No.	種別	時期・系統	器種	残存率	法量（cm）	器形の特徴	整・成形の特徴
37	30	8	4区	第2′層	221	土器	中世	皿	B	（口）7.4 （高）1.5	胴部～口縁部 外反気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
38	30		4区	第2′層	211	土器	中世	皿	B	（口）7.6 （高）1.4	口縁部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ヘラケズリ（内）ユビナデ
39	30		5区	第2′層	222	土器	中世	皿	A	（口）7.8 （高）1.2	口縁部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
40	30		5区	第2層	218	土器	中世	皿	B	（口）8.0 （高）1.2	口縁部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
41	30	8	4区	第2′層	212	土器	中世	皿	B	（口）8.0 （高）1.3	口縁部立上がり短い	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
42	30	8	1区	第1層	215	土器	中世	皿	A	（口）8.6 （高）現1.3	口縁部屈曲	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
43	30	8	4区	第2′層	216	土器	中世	皿	B	（口）8.6 （高）1.0	胴部～口縁部 内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
44	30		5区	第2′層	225	土器	中世	皿	A	（口）9.0 （高）現1.5	胴部～口縁部 直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
45	30		5区	第2層	226	土器	中世	皿	B	（口）9.2 （高）現2.0	胴部～口縁部 内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
46	30		5区	第2層	224	土器	中世	皿	B	（口）12.0 （高）現1.6	胴部～口縁部 内湾気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
47	30		5区	第2層	197	土器	中世	皿	A	（口）11.3 （高）現2.3	胴部～口縁部 直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）— 【胴部】（外）ユビナデ（内）—
48	30		5区	第2層	214	土器	中世	皿	A	（口）13.4 （高）現2.3	胴部～口縁部 内湾	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
49	30		5区	第2層	217	土器	中世	皿	A	（口）14.0 （高）現2.0	胴部～口縁部 直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
50	30		4区	第2′層	206	土器	中世	皿	A	（口）14.6 （高）現2.0	胴部～口縁部 外反気味	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
51	30	8	4区	第2′層	201	土器	中世	皿	A	（口）15.0 （高）1.3	口縁部立上がり短い？	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
52	30		4区	第1層	243	土器	中世	羽釜	A	（口）17.4 （高）現3.9	口縁部内湾	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
53	30		5区	第2層	234	土器	中世	甕	A	（口）22.3 （高）現3.5	口縁部端立上がる	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
54	30		4区	第1層	203	土器	中世	鉢	A	（口）28.8 （高）4.4	胴部～口縁部 直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ハケ 【胴部】（外）ヘラケズリ（内）ハケ
55	31		5区	第2′層	274	須恵質土器	中世	捏鉢	A	（口）23.4 （高）現3.8	口縁部端直立	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
56	31		5区	095溝	213	瓦質土器	中世	鉢	A	（口）17.4 （高）現3.0	胴部～口縁部 直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビオサエ（内）ユビナデ
57	31		1区	第1層	257	瓦質土器	近世	擂鉢	A	（口）24.0 （高）現4.9	口縁部端直立	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
58	31		1区	第1層	272	瓦質土器	近世	擂鉢	A	（口）31.0 （高）現5.3	口縁部端やや直立	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
59	31		4区	攪乱・盛土	236	瓦質土器	中世	羽釜	A	（鍔）33.6 （高）現4.2	鍔部厚みあり	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ・ヘラナデ 【胴部】（外）ヘラケズリ（内）ユビナデ・ヘラナデ
60	31		4区	第1層	239	瓦質土器	中世	羽釜	A	（口）25.0 （高）現7.0	口縁部内湾	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ヘラケズリ（内）ユビナデ・ヘラナデ
61	31		4区	第1層	235	瓦質土器	中世	羽釜	A	（口）36.0 （高）現4.5	口縁部端平坦	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ヘラナデ
62	32	8	5区	第2′層	183	青磁	中世	碗	A	（底）5.9 （高）現7.1	高台大きい	【胴部】（外）青磁釉（内）青磁釉
63	32	8	5区	第2層	186	青磁	中世	碗	A	（口）17.8 （高）現3.8	胴部～口縁部 直線的	【口縁部】（外）青磁釉（内）青磁釉 【胴部】（外）青磁釉（内）青磁釉
64	32	8	5区	第2層	185	青磁	中世	碗	A	（口）15.6 （高）現4.1	口縁部外反	【口縁部】（外）青磁釉（内）青磁釉 【胴部】（外）青磁釉（内）青磁釉
65	32		4区	第2層	184	白磁	中世	碗	A	（口）15.1 （高）現2.2	口縁部肥厚	【口縁部】（外）白磁釉（内）白磁釉 【胴部】（外）白磁釉（内）白磁釉
66	33	10	4区	第1層	295	磁器	近世	紅猪口	B	（口）5.0 （高）1.4	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
67	33	10	2区	第1層	294	磁器	近世	紅猪口	C	（口）4.5 （高）1.5	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
68	33	10	4区	第1層	296	磁器	近世	紅猪口	B	（口）4.8 （高）1.2	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
69	33	10	4区	攪乱・盛土	191	磁器	近世	紅猪口	B	（口）5.2 （高）1.3	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
70	33	10	4区	攪乱・盛土	179	磁器	近世	紅猪口	B	（口）5.1 （高）現1.4	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
71	33	10	1区	第1層	177	磁器	近世	紅猪口	A	（口）4.8 （高）現1.2	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
72	33		4区	077溝	297	磁器	近世	紅猪口	A	（口）5.0 （高）現1.0	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉

文様の特徴	焼成	外/表	内/裏	備考	胎土
	やや不良	10YR8/3	10YR8/3	12～13世紀	長石、酸化赤粒
	良好	5YR5/8	5YR5/8	13世紀中葉	長石、酸化赤粒、白色粒子
	良好	5YR6/6	5YR6/6	13世紀	長石、白色粒子、黒色粒子
	やや不良	10YR7/4	10YR7/4	13世紀	長石、白色粒子、雲母
	良好	10YR8/6	10YR8/6	13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	良好	10YR7/4	10YR7/4	12～13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	やや不良	10YR6/4	10YR6/4	13世紀	長石、白色粒子
	やや不良	10YR7/4	10YR7/3	13～14世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	不良	2.5Y8/4	2.5Y8/2	13世紀	長石、白色粒子
	不良	2.5Y8/1	2.5Y8/1	13世紀	長石、白色粒子、黒色粒子
	やや不良	10YR7/4	10YR7/4	13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	やや不良	5Y8/1	7.5YR8/3	12～13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	やや不良	7.5YR7/1	7.5YR7/1	14世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	やや不良	10YR8/3	10YR8/3	13世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	不良	2.5Y8/4	2.5Y8/4	14世紀	長石、石英
	やや不良	2.5Y7/4	2.5Y7/4	15世紀	長石、石英、白色粒子
	やや不良	10YR5/3	10YR7/4		長石、チャート、酸化赤粒
	良好	2.5Y4/2	2.5Y4/2		長石、石英、チャート
	やや不良	5YR8/2	2.5Y8/1	14世紀前半	長石、石英、チャート、白色粒子
	やや不良	5Y8/3	5Y8/3		長石、白色粒子
	良好	N4/0	7.5Y8/1	15世紀	長石、チャート
	良好	N3/0	N3/0	15世紀	長石、白色粒子
	やや不良	7.5Y3/1	5Y7/1	15世紀	長石、酸化赤粒、白色粒子
	良好	2.5Y7/2	N4/0	胴部外面煤付着、15世紀	長石、白色粒子
	良好	N4/0	N4/0	15世紀	長石、白色粒子
印花文	良好	10GY6/1	10GY6/1	龍泉窯	
文様？	良好	7.5GY6/1	7.5GY6/1	龍泉窯？	
	良好	5GY6/1	5GY6/1		
	良好	7.5Y7/1	7.5Y7/1		黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	長石、黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	長石、黒色粒子
	良好	7.5Y8/1	7.5Y8/1	肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	長石

実測遺物観察表 2

遺物No.	挿図No.	図版No.	調査区	遺構・層	実測図No.	種別	時期・系統	器種	残存率	法量（cm）	器形の特徴	整・成形の特徴
73	33		1区	第1層	178	磁器	近世	紅猪口	A	（口）5.0 （高）現1.9	菊花形	【胴部】（外）型押・白磁釉（内）白磁釉
74	33		1区	攪乱・盛土	181	磁器	近世	紅猪口	B	（底）2.4 （高）現1.2	丸形	【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉
75	33		1区	攪乱・盛土	182	磁器	近世	紅猪口	B	（底）2.1 （高）現1.7	丸形	【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉
76	33		3区	攪乱・盛土	176	磁器	近世	紅猪口	B	（底）2.6 （高）現1.6	丸形	【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉
77	33		4区	攪乱・盛土	180	磁器	近世	紅猪口	B	（底）1.4 （高）現1.1	丸形	【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉
78	33		1区	攪乱・盛土	192	磁器	近世	紅猪口	B	（口）6.5 （高）2.8	丸形	【口縁部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉 【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉
79	34		1区	攪乱・盛土	188	磁器	近世	蓋	A	（口）5.2 （高）現0.7	器壁薄い	【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
80	34	12	4区	第1層	304	磁器	近世	仏飯器	C	（口）6.1 （高）5.8		【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【脚部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
81	34	13	2区	第1層	299	磁器	近世	仏飯器	B	（口）6.8 （高）現2.6		【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
82	34		4区	第1層	187	磁器	近世	酒杯	A	（口）5.9 （高）現1.7	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉 【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉
83	34		4区	第1層	328	磁器	近世	酒杯	B	（底）4.8 （高）現1.4		【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
84	34		2区	第1層	330	磁器	近世	小杯	A	（高）現1.8	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
85	34		4区	090 土坑	318	磁器	近世	火入	A	（底）6.6 （高）現1.6	半筒形、蛇ノ目凹形高台	【胴部】（外）ロクロ・青磁釉（内）ロクロ
86	34		1区	第1層	320	磁器	近世	猪口	B	（底）7.6 （高）現3.4	桶形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
87	34	10	1区	攪乱・盛土	348	磁器	近世	大鉢	A	（底）11.7 （高）現2.0	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ
88	34	11	2区	第1層	344	磁器	近世	小皿	B	（口）9.2 （高）2.2	丸形輪花	【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
89	34		1区	攪乱・盛土	319	磁器	近世	小皿	A	（口）13.8 （高）現2.5	丸形、くらわんか手	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
90	34		2区	第1層	326	磁器	近世	小皿	B	（底）9.0 （高）現1.7	丸形	【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
91	34	11	4区	091 井戸	347	磁器	近世	中皿	A	（底）14.8 （高）現2.9	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ
92	34	10	1区	攪乱・盛土	351	磁器	近世	五寸皿	B	（高）2.7	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
93	34	10	4区	第1層	349	磁器	近世	五寸皿	A	（底）6.4 （高）現1.3	丸形狭底	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ
94	34	10	1区	攪乱・盛土	350	磁器	近世	五寸皿	B	（口）15.7 （高）3.2	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
95	35	13	1区	攪乱・盛土	306	磁器	近世	中碗蓋	B	（高）現2.1		【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
96	35	11	4区	攪乱・盛土	345	磁器	近世	中碗蓋	C	（口）10.0 （高）2.2	広東形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
97	35	11	4区	攪乱・盛土	346	磁器	近世	中碗蓋	B	（口）10.0 （高）現2.5	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
98	35	11	2区	攪乱・盛土	341	磁器	近世	中碗蓋	B	（口）9.8 （高）3.1	端反蓋	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
99	35		2区	第1層	339	磁器	近世	中碗蓋	A	（口）9.3 （高）現1.7	端反形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
100	35		3区	第1層	321	磁器	近世	中碗蓋	A	（口）10.5 （高）現1.3	丸形	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
101	35		3区	第1層	335	磁器	近世	中碗蓋	A	（口）14.5 （高）現1.6		【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
102	35	13	1区	攪乱・盛土	308	磁器	近世	小碗	B	（口）7.6 （高）現4.6	半筒形	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
103	35		1区	第1層	313	磁器	近世	中碗	A	（口）8.1 （高）現3.7	半筒形	【口縁部】（外）ロクロ・青磁染付（内）ロクロ・青磁染付 【胴部】（外）ロクロ・青磁染付（内）ロクロ・青磁染付
104	35	13	1区	第1層	307	磁器	近世	小碗	B	（口）6.3 （高）現3.0	半筒形	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
105	35		3区	第1層	333	磁器	近世	小杯	A	（口）7.4 （高）現3.0	端反形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
106	35		4区	第1層	327	磁器	近世	小碗	A	（口）6.8 （高）現2.2	端反形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
107	35	13	1区	第1層	305	磁器	近世	中碗	A	（口）8.7 （高）2.8	丸形	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
108	35	13	4区	第1層	298	磁器	近世	中碗	A	（口）9.6 （高）現3.3	丸形、くらわんか手	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉

文様の特徴	焼成	外/表	内/裏	備考	胎土
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
	良好	10Y8/1	10Y8/1	肥前系、1780年～	黒色粒子
	良好	5GY8/1	5GY8/1	肥前系、1780年～	黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1780年～、紅僅か残る	黒色粒子
	良好	5Y8/1	5Y8/1	肥前系、1780年～	黒色粒子
	良好	N8/0	N8/0	肥前系、1780年～	黒色粒子
色絵（赤・青）	良好			肥前系	黒色粒子
蛸唐草文	良好			肥前系、1690～1860年代	黒色粒子
蛸唐草文	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
	良好			肥前系	黒色粒子
櫛歯文	良好			瀬戸・美濃系、1800～1860年代	黒色粒子
	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
梅枝文	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
波頭文	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
三日月鳥文	良好			瀬戸・美濃系、1800～1860年代	黒色粒子
唐花文、竹草文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	白色粒子、黒色粒子
	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
松文	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
唐花草文、底「□明成□」銘	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
風景文	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
五弁花（コンニャク印判）、半菊文、唐花文	良好			肥前系、1740～1780年代	黒色粒子
亀甲繋文、若松文	良好			肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
稲束文	良好			肥前系、1780～1860年代	黒色粒子
草花文、四方襷文、花文	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
花蝶文、雷文、花文	良好			肥前系、1780～1860年代	黒色粒子
蹣跚縞文、工字文	良好			肥前系、1780～1860年代	黒色粒子
草花文	良好			瀬戸・美濃系、1800～1860年代	黒色粒子
内容不明	良好			肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
四方襷文	良好			肥前系、1750～1780年代	黒色粒子
四方襷文	良好			肥前系、1740～1780年代	黒色粒子
雷文、四方襷文	良好			肥前系、1750～1780年代	黒色粒子
草文	良好			肥前系、1630～1650年代、初期伊万里様式	黒色粒子
内容不明（墨弾き）	良好			瀬戸・美濃系、1800～1860年代	黒色粒子
七宝文繋ぎ、三ツ星文	良好			肥前系、1780～1860年代	黒色粒子
草花文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子

実測遺物観察表 3

遺物No.	挿図No.	図版No.	調査区	遺構・層	実測図No.	種別	時期・系統	器種	残存率	法量（cm）	器形の特徴	整・成形の特徴
109	35	12	1区	攪乱・盛土	303	磁器	近世	中碗	C	（口）8.8 （高）3.8	丸形	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
110	35	12	4区	091 井戸	302	磁器	近世	小碗	B	（口）8.3 （高）4.7	丸形	【口縁部】（外）ロクロ（内）ロクロ 【胴部】（外）ロクロ・透明釉・上絵付（内）ロクロ・透明釉
111	35		1区	第1層	314	磁器	近世	小碗	A	（口）10.3 （高）現3.0	丸形、くらわんか手	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
112	35		4区	第1層	312	磁器	近世	中碗	A	（口）10.9 （高）現3.4	丸形、くらわんか手	【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
113	35	13	3区	第1層	300	磁器	近世	中碗	A	（口）11.5 （高）現3.2	丸形、くらわんか手	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
114	35		2区	第1層	337	磁器	近世	小碗	A	（口）12.0 （高）現4.1	端反形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
115	35		3区	第1層	331	磁器	近世	中碗	A	（口）13.0 （高）現3.5	丸形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
116	35	13	1区	第1層	309	磁器	近世	中碗	B	（高）現3.9	丸形、くらわんか手	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
117	35		2区	第1層	334	磁器	近世	中碗	B	（底）4.2 （高）現3.1	丸形、くらわんか手、見込蛇ノ目釉ハギ	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
118	35		1区	第1層	332	磁器	近世	中碗	B	（底）4.0 （高）現3.7	丸形	【胴部】（外）ロクロ・青磁釉（内）ロクロ・青磁染付
119	35		4区	攪乱・盛土	336	磁器	近世	中碗	B	（底）4.2 （高）現4.5	丸形、くらわんか手	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
120	35	11	4区	攪乱・盛土	340	磁器	近世	中碗	B	（口）11.5 （高）7.0	広東形（厚手）	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
121	35		1区	第1層	324	磁器	近世	中碗	B	（底）4.0 （高）現3.2	端反形	【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉
122	35		1区	第1層	325	磁器	近世	中碗	A	（底）3.8 （高）現1.7		【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉
123	35		3区	第1層	195	磁器	近世	戸車	B	（径）復元5.3 （厚）1.0		
124	36	12	2区	第1層	301	陶器	近世	仏飯器	C	（口）6.0 （高）3.5		【口縁部】（外）ロクロ・鉄釉（内）ロクロ・鉄釉 【脚部】（外）ロクロ・鉄釉（内）回転糸切り
125	36	13	2区	第1層	311	陶器	近世	中碗	A	（口）13.2 （高）現3.0	丸形	【口縁部】（外）ロクロ・灰釉（内）ロクロ・灰釉 【胴部】（外）ロクロ・灰釉（内）ロクロ・灰釉
126	36		4区	第1層	338	陶器	近世	中碗	A	（口）15.4 （高）現2.5	轆轤形	【胴部】（外）ロクロ・緑釉・白泥釉・透明釉（内）ロクロ・緑釉・白泥釉・透明釉
127	36		3区	第1層	315	陶器	近世	香炉	A	（底）3.7 （高）現1.8	無三足轆轤浅筒形	【胴部】（外）ロクロ・灰釉・付高台（内）ロクロ
128	36		3区	070 土坑	316	陶器	近世	小碗	A	（底）3.5 （高）現1.1	「せんじ碗」	【胴部】（外）ロクロ・透明釉・削出高台（内）ロクロ
129	36		2区	攪乱・盛土	317	陶器	近世	中碗	A	（底）4.2 （高）現1.9	呉器形	【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉
130	36		4区	攪乱・盛土	323	陶器	近世	小碗	B	（底）5.6 （高）現2.9	甕形	【胴部】（外）ロクロ・白泥釉・鉄釉・透明釉（内）ロクロ・透明釉
131	36		1区	攪乱・盛土	322	陶器	近世	中碗	C	（底）5.8 （高）現4.7	丸形	【胴部】（外）ロクロ・灰釉（内）ロクロ・灰釉
132	36		2区	第1層	242	陶器	近世	瓶	B	（底）8.5 （高）現6.6	底部平坦	【胴部】（外）ロクロ・鉄釉（内）ロクロ
133	36		4区	第2層	273	陶器	中世	捏鉢	A	（口）31.1 （高）現5.1	胴部～口縁部直線的	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ヘラケズリ（内）ユビナデ
134	37		2区	攪乱・盛土	244	炻器	近世	火入	B	（口）19.0 （高）5.1	胴部～口縁部直立	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
135	37		2区	第1層	238	炻器	近世	擂鉢	A	（口）26.3 （高）現5.2	口縁部肥厚	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
136	37		2区	第1層	240	炻器	近世	擂鉢	A	（口）27.0 （高）現10.5	口縁部肥厚	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ヘラケズリ（内）ユビナデ・ヘラナデ
137	37		1区	第1層	237	炻器	近世	擂鉢	A	（口）50.8 （高）現6.4	口縁部肥厚	【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ヘラナデ（内）ユビナデ・ヘラナデ
138	38	12	4区	攪乱・盛土	232	軟質陶器	近世	灯明皿	C	（口）5.7 （高）4.7	口縁部に切込みなし	【口縁部】（外）ロクロ・白泥釉（内）ロクロ・白泥釉・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・白泥釉（内）ロクロ・白泥釉・透明釉
139	38	12	3区	第1層	233	軟質陶器	近世	灯明皿	C	（口）6.6 （高）5.2	口縁部僅か内湾	【口縁部】（外）ロクロ・白泥釉・透明釉（内）ロクロ・白泥釉・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・白泥釉・透明釉（内）ロクロ・白泥釉・透明釉
140	38		1区	第1層	190	土器	近世	灯明皿	B	（口）6.4 （高）1.2	胴部～口縁部僅か内湾	【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉（上半）
141	38		2区	第1層	189	陶器	近世	灯明皿	A	（口）7.8 （高）現1.0	口縁部僅か肥厚	【口縁部】（外）ロクロ・灰釉（内）ロクロ・灰釉 【胴部】（外）ロクロ・灰釉（内）ロクロ
142	38		4区	攪乱・盛土	209	土器	近世	灯明皿	B	（口）10.6 （高）現1.3		【口縁部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ 【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
143	38		1区	005溝	208	土器	近世	灯明皿	B	（底）9.2 （高）現2.2	底部平坦	【胴部】（外）回転ヘラケズリ（内）白泥釉
144	38		1区	攪乱・盛土	210	土器	近世	蓋	D	（頂）2.7 （高）1.2		【頂部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ

文様の特徴	焼成	外/表	内/裏	備考	胎土
草花文，焼継	良好			肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
窓絵花文	良好			瀬戸・美濃系、1800～1860年代	黒色粒子
草花文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
草花文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
草花文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
草花文	良好			肥前系、1780～1860年代	黒色粒子
内容不明	良好			肥前系、1690～1740年代	黒色粒子
菊花文（コンニャク印判）	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
	良好			肥前系、1740～1780年代	長石、黒色粒子
草花文	良好			波佐見・平戸系、1690～1790年代	黒色粒子
鯛文（コンニャク印判）	良好			波佐見・平戸系、1780～1820年代	黒色粒子
花文、草文	良好			瀬戸・美濃系、1800～1860年代	黒色粒子
内容不明	良好			肥前系、1690～1780年代	黒色粒子
	良好			瀬戸・美濃系	黒色粒子
	良好			瀬戸・美濃系、1750～1770年代	黒色粒子
	良好			瀬戸・美濃系、1670～1750年代	白色粒子、黒色粒子
	良好			萩焼系、1800年代～	白色粒子、黒色粒子
	良好			瀬戸・美濃系、1670～1770年代	石英、黒色粒子
	良好			京焼系、1740～1820年代	長石、黒色粒子
	良好			肥前系、1650～1690年代	長石
ビラ掛け	良好			萩焼系、1800年代～	白色粒子、黒色粒子
	良好			瀬戸・美濃系、1670～1750年代	長石、黒色粒子
	良好			備前焼、16世紀末～17世紀前半	長石、チャート
	やや不良			備前系	白色粒子
	良好	5YR3/1	5YR3/1	備前系	長石、白色粒子
	良好	10YR3/1	7.5YR4/3	堺焼、18世紀後半	長石、白色粒子
	良好	2.5Y4/1	7.5YR6/6	備前焼、18世紀前半	長石、白色粒子、黒色粒子
	良好	5YR4/4	5YR4/4	堺焼、18世紀後半～19世紀前半	長石、白色粒子
	良好	5Y8/2	7.5YR6/6	全体に煤付着	白色粒子
	良好	5Y8/2	7.5YR6/6	全体に煤付着	白色粒子
	良好	5Y7/8	5Y7/8		酸化赤粒、黒色粒子
	良好	5Y7/2	5Y7/2		黒色粒子
	良好	7.5YR6/6	7.5YR6/6	内面煤付着	長石、酸化赤粒、白色粒子
	良好	7.5YR6/6	5Y8/1	内面煤付着	長石、白色粒子、黒色粒子
	良好	7.5YR7/4	7.5YR7/4		長石、酸化赤粒、白色粒子

実測遺物観察表 4

遺物No.	挿図No.	図版No.	調査区	遺構・層	実測図No.	種別	時期・系統	器種	残存率	法量（cm）	器形の特徴	整・成形の特徴
145	38	12	4区	攪乱・盛土	231	軟質陶器	近世	秉燭	C	（口）7.5 （高）現2.2	上げ底気味	【口縁部】（外）ロクロ・鉄釉（内）ロクロ・鉄釉 【胴部】（外）ロクロ（内）ロクロ
146	38		2区	攪乱・盛土	241	土器	近世	火入	B	（底）10.6 （高）現3.1	上げ底	【胴部】（外）ユビナデ（内）ユビナデ
147	39	10	3区	070土坑	167	ガラス製品	近世	簪	B	（長）現4.9 （幅）0.5	断面楕円形	
148	39	10	1区	第1層	166	ガラス製品	近世	簪	A	（長）現2.1 （幅）1.2	端部幅広	
149	39	10	3区	第1層	175	ガラス製品	近世	簪	A	（長）現1.7 （幅）0.5	端部尖る、端部近くに突起	
150	39		4区	攪乱・盛土	174	ガラス製品	近世	簪	A	（長）現3.3 （幅）0.5	断面円形	
151	39		4区	第1層	173	ガラス製品	近世	簪	A	（長）現2.8 （幅）0.6	断面方形	
152	39		4区	第1層	172	ガラス製品	近世	簪	A	（長）現2.1 （幅）0.6	断面円形	
153	39		2区	第1層	169	ガラス製品	近世	簪	A	（長）現2.1 （幅）0.5	断面楕円形	
154	39		3区	第1層	170	石製品	近世	簪	A	（長）現2.1 （幅）0.7	断面円形	
155	39		2区	第1層	171	石製品	近世	簪	A	（長）現2.7 （幅）0.7	断面楕円形、端部尖る	
156	39		3区	第1層	168	石製品	近世	簪	A	（長）現2.9 （幅）0.6	断面円形	
157	40	10	1区	005溝	229	青銅製品	近世	煙管	B	（長）現4.0 （幅）0.8		
158	40		4区	攪乱・盛土	227	鉄製品	近世	釘	D	（長）8.8 （幅）0.6	折釘	
159	40		4区	第2′層	228	鉄製品	中世	釘	B	（長）現4.3 （幅）0.8		
160	40		4区	第1層	245	鉄製品	近世	鉈	C	（長）13.1 （幅）3.6	厚みあり	
161	41	9	2区	攪乱・盛土	162	土製品	近世	泥面子	D	（縦）3.4 （横）3.4	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
162	41	9	4区	第1層	161	土製品	近世	泥面子	D	（縦）3.2 （横）3.2	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
163	41	9	1区	005溝	163	土製品	近世	泥面子	C	（縦）現2.5 （横）現3.1	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
164	41	9	2区	第1層	160	土製品	近世	泥面子	B	（縦）現1.9 （横）現2.8	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
165	41	9	3区	第1層	156	土製品	近世	泥面子	B	（縦）現1.5 （横）現3.1	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
166	41	9	2区	第1層	165	土製品	近世	泥面子	A	（縦）現1.4 （横）現2.5	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
167	41		4区	第1層	157	土製品	近世	泥面子	B	（縦）現2.2 （横）現2.1	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
168	41	9	2区	攪乱・盛土	164	土製品	近世	泥面子	B	（縦）現3.4 （横）現2.3	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
169	41	9	4区	攪乱・盛土	158	土製品	近世	泥面子	B	（縦）現2.9 （横）現1.4	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
170	41		5区	攪乱・盛土	159	土製品	近世	泥面子	B	（縦）現2.4 （横）現1.7	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
171	41	9	2区	第1層	145	土製品	近世	泥面子	D	（縦）2.3 （横）2.2	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
172	41	9	4区	第1層	150	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.8 （横）2.2	裏面ほぼ平坦	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
173	41	9	3区	第1層	144	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.5 （横）2.0	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
174	41	9	3区	第1層	154	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.9 （横）3.0	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
175	41	9	4区	第1層	148	土製品	近世	芥子面	D	（縦）1.5 （横）2.2	裏面僅か窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
176	41	9	3区	第1層	141	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.0 （横）2.0	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
177	41	9	4区	攪乱・盛土	142	土製品	近世	芥子面	D	（縦）1.8 （横）1.9	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
178	41	9	4区	第1層	138	土製品	近世	芥子面	D	（縦）1.5 （横）1.3	裏面ほぼ平坦	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
179	41	9	1区	第1層	152	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.1 （横）1.2	裏面僅か窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
180	41		1区	第1層	155	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.4 （横）1.0	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ

文様の特徴	焼成	外/表	内/裏	備考	胎土
	やや不良	N3/0	2.5Y7/3		長石、黒色粒子
	良好	10YR6/3	10YR6/3		長石、酸化赤粒、白色粒子
		青色			
花？		淡青色			
		淡青白色			
		5Y7/2			
		5Y7/2			
		7.5Y6/1			
		7.5Y7/1			
		5Y8/1			
		N8/0			
		10YR7/2			
葉	良好	5YR6/6	5YR6/6		長石、白色粒子、黒色粒子
内容不明	良好	5Y5/6	5Y5/6		チャート、酸化赤粒、白色粒子
文字「川玉」？	良好	7.5Y7/3	7.5Y7/3		長石、酸化赤粒、黒色粒子
文字「鳥」或は「島」	良好	5YR8/4	5YR8/4		石英、酸化赤粒
文字「寿」？	良好	7.5Y8/3	7.5Y8/3		長石、酸化赤粒
内容不明	良好	5YR6/8	5YR6/8		長石、白色粒子
文字不明	良好	5YR6/8	5YR6/8		長石、白色粒子
文字「寿」？	良好	5YR6/8	5YR6/8		チャート、白色粒子
不明	良好	5YR6/8	5YR6/8		長石、酸化赤粒、白色粒子
不明	良好	5YR6/8	5YR6/8		長石、酸化赤粒、白色粒子、雲母
文字「ね」	良好	5YR8/4	5YR8/4		石英、白色粒子、黒色粒子
お多福	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6		長石、酸化赤粒、白色粒子
人物	良好	5YR5/4	5YR5/4	外面赤彩？	長石、白色粒子、黒色粒子
お多福	良好	7.5YR8/6	7.5YR8/6		長石、酸化赤粒
魚	良好	7.5YR8/4	7.5YR8/4		酸化赤粒
内容不明	良好	7.5YR7/3	7.5YR7/3		長石、白色粒子
内容不明	良好	5YR6/8	5YR6/8		長石、酸化赤粒、白色粒子
分銅	良好	7.5YR7/8	7.5YR7/8		長石、黒色粒子
三身虫	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6		酸化赤粒、白色粒子
内容不明	良好	5YR6/6	5YR6/6		長石、白色粒子

実測遺物観察表 5

遺物No.	挿図No.	図版No.	調査区	遺構・層	実測図No.	種別	時期・系統	器種	残存率	法量（cm）	器形の特徴	整・成形の特徴
181	41	9	2区	第1層	147	土製品	近世	玩具	D	（縦）1.5 （横）1.6	裏面僅か窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
182	41	9	1区	第1層	140	土製品	近世	芥子面	D	（縦）1.5 （横）1.5	裏面ほぼ平坦	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
183	41		1区	第1層	136	土製品	近世	芥子面	D	（縦）2.0 （横）2.1	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
184	41		2区	第1層	137	土製品	近世	芥子面	D	（縦）1.6 （横）1.9	裏面窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
185	41		4区	第1層	139	土製品	近世	芥子面	D	（縦）1.8 （横）1.7	裏面僅か窪む	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
186	41	9	2区	第1層	149	土製品	近世	玩具	B	（縦）4.9 （横）現3.4	空洞作り	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
187	41	9	2区	第1層	143	土製品	近世	面摸	B	（縦）現4.1 （横）現3.3		【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビオサエ
188	42	9	3区	第1層	151	土製品	近世	玩具	D	（縦）3.0 （横）1.7	底部に穿孔	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビナデ
189	42	9	1区	第1層	153	土製品	近世	玩具	C	（長）3.1 （幅）2.0	尻部穿孔	【器面】（背）ユビナデ（腹）ユビナデ
190	42	9	2区	第1層	146	土製品	近世	玩具	D	（縦）3.1 （横）3.2	穿孔	【器面】（表）ユビナデ（裏）ユビナデ
191	42		4区	第1層	207	陶器	近世	ミニチュア	A	（口）3.1 （高）現1.2	胴部～口縁部内湾	【口縁部】（外）緑釉（内）緑釉 【胴部】（外）緑釉（内）緑釉
192	42		1区	第1層	193	磁器	近世	ミニチュア碗	C	（口）2.3 （高）1.5		【胴部】（外）型押・青磁釉（内）青磁釉
193	42		1区	第1層	194	陶器	近世	ミニチュア・土釜	B	（口）3.8 （高）現1.7	口縁部立上がり低い	【胴部】（外）ロクロ・鉄釉（上半）（内）ロクロ・鉄釉
194	42	10	4区	攪乱・盛土	230	ガラス製品	近世	サイコロ	D	（縦）1.0 （横）1.0	やや歪	
195	43		1区	第1層	249	瓦	古代	平	A	（高）現2.7		【器面】（表）ヘラケズリ・布目圧痕（裏）ヘラケズリ
196	43	8	2区	攪乱・盛土	258	瓦	中～近世	軒丸	C	（高）現6.2		【器面】（裏）ユビナデ・ヘラナデ
197	43		1区	005溝	248	瓦	中～近世	軒丸	A	（高）現4.0		
198	43	8	3区	攪乱・盛土	251	瓦	中～近世	軒丸	B	（高）現6.5		【器面】（裏）ユビナデ・ヘラナデ
199	43		2区	第1層	252	瓦	中～近世	軒丸	A	（高）現4.3		【器面】（裏）ユビナデ
200	43	8	4区	攪乱・盛土	253	瓦	中～近世	軒丸	B	（高）現5.7		【器面】（裏）ユビナデ
201	43		2区	第1層	256	瓦	中～近世	軒丸	A	（高）現3.7		【器面】（裏）ユビナデ
202	43		2区	第1層	247	瓦	中～近世	軒丸	A	（高）現4.6		
203	43		4区	攪乱・盛土	255	瓦	中～近世	軒丸	A	（高）現4.9	厚みあり、文様大きい	【器面】（裏）ユビナデ
204	43		2区	第1層	262	瓦	中～近世	丸	B	（長）現10.0		【器面】（表）ヘラケズリ（裏）ヘラケズリ・布目圧痕
205	43		2区	第1層	261	瓦	中～近世	丸	B	（長）現12.1		【器面】（表）ヘラケズリ（裏）ヘラケズリ・布目圧痕
206	43		2区	第1層	259	瓦	中～近世	丸	C	（長）現11.2		【器面】（表）ヘラケズリ（裏）ユビナデ・布目圧痕
207	43		1区	攪乱・盛土	250	瓦	中～近世	丸	B	（長）現8.0		【器面】（表）ヘラケズリ（裏）ユビナデ・布目圧痕
208	43		1区	攪乱・盛土	254	瓦	中～近世	丸	B	（長）現9.6		【器面】（表）ヘラケズリ（裏）ユビナデ・布目圧痕
209	44	12	4区	第1層	288	石製品	近世	火打石	—	（長）4.7 （幅）3.3		
210	44	12	4区	第1層	289	石製品	近世	火打石	—	（長）3.3 （幅）1.8		
211	44		4区	第1層	290	石製品	近世	火打石	—	（長）1.4 （幅）1.2		
212	44		4区	第2′層	291	石製品	縄文	石鏃	B	（長）現1.8 （幅）現1.2		
213	44		1区	027溝	293	石製品	—	剥片		（長）現2.5 （幅）現1.8		
214	44		3区	第1層	292	石製品	—	剥片	—	（長）現1.6 （幅）現2.0		
215	44		2区	第1層	260	石製品	縄文？	磨石	C	（長）15.9 （幅）7.2	表面よく磨れている	
216	44		4区	攪乱・盛土	246	石製品	縄文？	磨石	D	（長）7.3 （幅）6.6	底面よく磨れている	

文様の特徴	焼成	外/表	内/裏	備考	胎土
	良好	5YR8/2	5YR8/2	四角に斜線	長石、酸化赤粒
	良好	5Y6/8	5Y6/8	四角に斜線	石英、白色粒子
不明	やや不良	7.5YR7/4	7.5YR7/4		酸化赤粒、黒色粒子
不明	やや不良	7.5YR7/4	7.5YR7/4		酸化赤粒
文様不明	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6		酸化赤粒、白色粒子
人物	良好	7.5YR8/4	7.5YR8/4	鈴？	長石、酸化赤粒
狐	良好	5YR6/8	5YR6/8		長石、チャート、白色粒子、雲母
大黒天	やや不良	7.5YR7/6	7.5YR7/6		酸化赤粒、黒色粒子
犬	良好	7.5YR7/4	7.5YR7/4		長石、白色粒子、黒色粒子
表：放射状線刻、裏：列点文	良好	7.5YR6/6	7.5YR6/6	玩具の笠あるいは独楽	酸化赤粒、白色粒子
	良好	淡緑色	淡緑色		黒色粒子
	良好	7.5GY8/1	7.5GY8/1	瀬戸・美濃系？	
	良好	2.5Y7/4	10YR4/2		白色粒子
		緑色	緑色		
	良好	7.5Y6/1	7.5Y6/1	須恵質	長石、白色粒子
	良好	N4/0	N4/0		長石、酸化赤粒、白色粒子
珠文	良好	N4/0	N4/0		長石、酸化赤粒、白色粒子
巴文・珠文	良好	N3/0	7.5Y7/1		長石、酸化赤粒、白色粒子
珠文	やや不良	N5/0	N5/0		長石、白色粒子
巴文・珠文	良好	N3/0	N3/0		長石、白色粒子
珠文	良好	N3/0	N3/0		長石、チャート、白色粒子
珠文	良好	N4/0	N4/0		長石、白色粒子、黒色粒子
巴文・珠文	良好	N3/0	N3/0		チャート、白色粒子
	良好	N3/0	N3/0		
	良好	N3/0	N3/0		
	良好	N3/0	N3/0		長石、チャート、白色粒子
	良好	N4/0	N3/0		チャート、白色粒子
	良好	N4/0	N4/0		チャート、白色粒子
				緑色チャート	
				緑色チャート	
				緑色チャート	
				サヌカイト	
				サヌカイト	
				サヌカイト	

残存率
A：～10%
B：10～50%
C：50～90%
D：90%～

実測遺物観察表 6

遺物No.	挿図No.	図版No.	実測図No.	調査区	遺構・層	焼成	胎土	類型	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	残存率
217	45	13	109	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子・赤色粒子	i	5.10	1.80	0.50	9.28	7.5YR7/6	D
218	45	13	6	3区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・黒色粒子	ii	4.90	1.10	0.30	4.31	7.5YR8/3	D
219	45		127	4区	攪乱・盛土	良好	石英・黒色粒子	iii	4.60	1.10	0.30	4.75	7.5YR8/8	D
220	45	13	67	3区	第1層	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子・赤色粒子	i	4.60	1.20	0.30	5.31	2.5YR7/6	D
221	45		100	4区	攪乱・盛土	不良	石英・黒色粒子・赤色粒子	iv	4.40	1.20	0.35	6.56	5YR5/2	D
222	45	13	99	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石	ii	4.50	1.20	0.30	5.78	5YR6/6	D
223	45	13	9	2区	第1層	良好	石英・黒色粒子	ii	4.35	1.30	0.30	6.11	2.5YR6/6	D
224	45	13	107	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子	i	4.30	1.10	0.25	4.87	2.5YR5/8	D
225	45	13	1	1区	攪乱・盛土	良好	石英	ii	4.20	1.00	0.25	2.81	5YR6/6	D
226	45	13	5	3区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・黒色粒子・くさり礫	i	4.20	1.57	0.25	4.52	5YR6/4	D
227	45	13	81	1区	第1層	良好	石英・黒色粒子･赤色粒子	ii	4.10	1.20	0.30	4.61	5YR6/4	D
228	45	13	20	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	ii	4.10	1.10	0.30	5.09	5YR6/3	D
229	45	13	60	4区	攪乱・盛土	良好	黒色粒子	ii	4.20	1.00	0.30	3.95	2.5YR6/6	D
230	45	13	2	1区	攪乱・盛土	良好	黒色粒子	ii	4.20	1.15	0.30	3.96	5YR6/6	D
231	45		55	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子	ii	4.20	1.00	0.30	2.91	2.5YR6/6	D
232	45		42	5区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・黒色粒子	ii	4.20	0.90	0.25	2.96	5YR6/6	D
233	45	13	58	1区	攪乱・盛土	良好	石英・黒色粒子	ii	4.10	1.10	0.30	4.26	5YR6/6	D
234	45	13	4	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	4.10	0.85	0.25	2.48	2.5YR7/6	D
235	45		118	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子・くさり礫	i	4.10	0.90	0.20	2.78	5YR6/6	D
236	45		54	4区	第1層	良好	—	iii	4.00	1.00	0.25	2.83	5YR6/6	D
237	45	13	87	1区	第1層	良好	石英・赤色粒子	iv	3.90	0.85	0.30	2.34	2.5YR5/6	C
238	45		45	4区	第1層	良好	石英	iii	3.50	1.10	0.40	2.71	7.5YR6/3	C
239	45		68	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・チャート	iii	3.00	0.90	0.30	1.62	7.5YR7/4	C
240	45		125	2区	第1層	良好	長石・黒色粒子	iii	4.60	1.20	0.40	3.52	2.5YR6/6	C
241	45		23	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	ii	4.40	1.10	0.35	5.15	2.5YR5/6	C
242	45	13	71	1区	第1層	良好	石英・長石	ii	4.30	1.20	0.30	5.31	2.5YR6/6	D
243	45		50	2区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子・花崗岩片	i	4.30	1.20	0.25	4.75	7.5YR7/6	C
244	45	13	70	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	i	4.20	1.10	0.30	4.67	2.5YR6/3	D
245	45		21	1区	第1層	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子・赤色粒子	ii	4.20	1.00	0.30	3.58	2.5YR7/6	C
246	45		27	3区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	4.00	1.00	0.30	4.05	7.5YR7/8	C
247	45		91	4区	第1層	良好	石英・赤色粒子・花崗岩片	i	3.20	1.20	0.30	3.48	5YR7/4	C
248	45		28	3区	第1層	やや不良	石英・黒色粒子・赤色粒子	i	3.80	0.90	0.25	2.72	7.5YR7/3	C
249	45		24	3区	第1層	良好	石英・黒色粒子・赤色粒子	ii	4.50	1.10	0.35	5.17	2.5YR6/4	C
250	45	13	12	2区	第1層	良好	石英・長石	ii	4.20	1.00	0.25	3.74	5YR5/4	C
251	45		16	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	iii	4.50	1.00	0.30	4.61	2.5YR6/6	D
252	45		30	1区	第1層	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子・赤色粒子	i	4.40	0.95	0.30	3.69	2.5YR5/6	C
253	45		76	4区	第1層	良好	石英・長石・赤色粒子	ii	4.20	1.10	0.25	3.83	2.5YR6/4	C
254	45		32	4区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	ii	4.30	1.10	0.30	4.20	7.5YR6/4	C
255	45		14	1区	第1層	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子・赤色粒子	i	3.80	1.05	0.30	4.73	7.5YR7/6	C
256	45		77	4区	第1層	やや不良	—	iii	3.20	1.00	0.40	2.84	5YR7/4	C
257	45		38	4区	攪乱・盛土	良好	—	iii	3.95	1.05	0.25	3.75	2.5YR5/8	C
258	45		22	4区	079土坑	不良	—	iii	3.88	0.75	0.40	1.54	10R6/4	C
259	45		41	3区	第1層	良好	石英・赤色粒子	iv	3.80	1.00	0.25	3.35	2.5YR7/6	C
260	46		92	4区	136溝	良好	赤色粒子	iv	3.30	1.00	0.30	2.35	2.5YR5/3	C
261	46		116	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・黒色粒子・花崗岩片	iii	3.20	0.90	0.30	1.53	7.5YR7/1	C
262	46		117	4区	攪乱・盛土	やや不良	黒色粒子・赤色粒子	iii	3.00	0.95	0.40	2.03	2.5YR7/4	C
263	46		63	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	2.95	1.00	0.25	2.35	7.5YR7/6	B
264	46		96	5区	第2′層	良好	石英・黒色粒子	iii	2.80	1.00	0.25	1.75	2.5YR6/6	B
265	46		61	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子	ii	2.90	1.15	0.25	3.52	5YR5/6	B
266	46		59	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子	ii	2.85	0.90	0.25	2.31	2.5YR5/6	B
267	46		82	1区	第1層	良好	石英・長石・チャート	ii	2.80	1.05	0.25	2.95	2.5YR5/3	B
268	46		124	3区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・黒色粒子・花崗岩片	i	2.60	1.10	0.30	2.26	10YR5/4	B
269	46		128	4区	攪乱・盛土	良好	石英・黒色粒子	ii	2.55	1.05	0.30	2.07	7.5YR6/8	C
270	46		113	4区	攪乱・盛土	やや不良	—	iii	2.60	0.90	0.25	1.95	5YR7/4	B
271	46		8	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	ii	3.70	1.05	0.25	3.24	5YR7/6	C
272	46		101	4区	第1層	不良	石英	iii	3.60	1.00	0.40	2.46	2.5YR5/1	C
273	46		85	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英	iii	3.60	0.95	0.30	2.46	5YR7/6	D
274	46		122	3区	第1層	やや不良	石英・長石・黒色粒子	ii	3.40	1.20	0.30	3.36	5YR7/4	C
275	46		18	3区	第1層	やや不良	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子・くさり礫	iv	3.30	1.00	0.30	2.73	2.5YR6/4	D
276	46		94	3区	攪乱・盛土	やや不良	石英・黒色粒子・赤色粒子・花崗岩片	ii	3.40	0.70	0.30	1.38	2.5YR7/4	B
277	46		52	2区	第1層	やや不良	石英・長石・チャート・黒色粒子・赤色粒子	i	3.50	0.85	0.25	2.30	7.5YR7/6	C
278	46		17	2区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・花崗岩片	i	3.40	0.95	0.25	2.97	2.5YR6/6	D
279	46		33	3区	第1層	不良	—	iii	3.30	0.85	0.35	1.69	2.5YR7/4	C
280	46		35	2区	第1層	良好	黒色粒子・赤色粒子	iv	3.20	0.85	0.25	1.67	2.5YR6/6	C
281	46		40	3区	第1層	やや不良	石英・黒色粒子・赤色粒子	iii	3.30	0.80	0.25	1.51	2.5YR6/3	C
282	46		51	2区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	3.20	1.00	0.30	2.59	7.5YR8/3	B
283	46		62	4区	攪乱・盛土	やや不良	—	iii	3.20	1.05	0.40	1.88	2.5YR6/4	B
284	46		66	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・赤色粒子	iii	3.30	0.80	0.25	1.33	2.5YR7/6	C

土錘観察表１

遺物No.	挿図No.	図版No.	実測図No.	調査区	遺構・層	焼成	胎土	類型	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	残存率
285	46		46	4区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	3.30	0.90	0.25	2.25	7.5YR7/3	C
286	46		10	1区	第1層	やや不良	黒色粒子・赤色粒子	iii	3.20	0.90	0.40	1.88	2.5YR6/3	C
287	46		37	1区	第1層	やや不良	赤色粒子	iii	3.15	0.90	0.40	1.36	7.5YR7/3	B
288	46		26	3区	第1層	やや不良	石英・長石・赤色粒子・くさり礫	iv	3.10	0.90	0.25	1.96	2.5YR5/8	C
289	46		120	1区	005溝	やや不良	石英・黒色粒子	iii	3.20	0.80	0.25	1.26	2.5YR5/1	C
290	46		39	4区	攪乱・盛土	やや不良	黒色粒子	iii	3.20	0.85	0.25	1.42	7.5YR6/3	C
291	46		13	2区	第1層	不良	石英・チャート・黒色粒子・花崗岩片	i	3.25	0.80	0.25	1.55	10YR8/2	C
292	46		78	4区	第1層	やや不良	石英・長石・黒色粒子	ii	3.20	0.75	0.20	1.40	2.5YR6/6	C
293	46		19	3区	第1層	やや不良	石英・長石・黒色粒子	i	3.12	0.85	0.30	1.62	2.5YR7/4	B
294	46		25	2区	攪乱・盛土	やや不良	石英・黒色粒子	ii	3.00	0.80	0.25	1.82	7.5YR5/1	D
295	46		84	1区	第1層	やや不良	石英・赤色粒子	iv	3.00	1.00	0.25	1.53	2.5YR5/6	C
296	46		129	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	2.90	1.00	0.25	2.08	7.5YR6/4	C
297	46		86	4区	079土坑	良好	黒色粒子	iii	2.80	0.85	0.40	1.12	7.5YR6/6	B
298	46		97	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子	iii	2.90	0.90	0.30	1.15	5YR6/3	C
299	46		90	4区	第1層	やや不良	石英・チャート・赤色粒子	i	2.90	0.80	0.25	1.27	7.5YR6/4	C
300	46		130	4区	攪乱・盛土	良好	石英・チャート・黒色粒子	ii	2.75	0.80	0.25	1.51	7.5YR6/6	C
301	46		93	4区	136溝	やや不良	石英	iii	2.30	—	—	0.64	5YR7/6	B
302	46		56	4区	第1層	良好	黒色粒子	iii	2.60	0.95	0.25	1.61	10YR7/2	B
303	46		36	2区	第1層	やや不良	石英・黒色粒子・赤色粒子	ii	2.60	0.90	0.40	1.55	5YR7/2	B
304	46		73	4区	第1層	やや不良	石英・長石・チャート・黒色粒子	i	2.60	0.90	0.20	1.38	5YR6/6	C
305	46		34	5区	第1層	やや不良	石英・黒色粒子・赤色粒子・花崗岩片	ii	2.60	0.70	0.25	1.05	10YR7/4	B
306	46		43	5区	攪乱・盛土	やや不良	石英・黒色粒子・くさり礫	iii	2.65	0.80	0.30	0.83	5YR6/6	B
307	46		31	3区	攪乱・盛土	やや不良	石英・長石・黒色粒子	iii	2.74	0.75	0.25	0.84	7.5YR7/3	B
308	46		111	3区	048土坑	やや不良	石英・長石・黒色粒子	ii	2.60	—	—	1.23	5YR6/8	B
309	46		103	2区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	i	2.10	1.05	0.30	2.36	7.5YR6/6	B
310	46		89	4区	第1層	不良	石英・長石	iii	2.60	0.80	0.30	1.05	7.5YR7/4	B
311	46		80	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子・赤色粒子	ii	2.65	0.90	0.30	1.74	5YR7/4	C
312	46		88	1区	第1層	不良	石英・黒色粒子	iii	2.50	0.85	0.30	1.05	2.5YR6/4	B
313	46		121	3区	攪乱・盛土	良好	石英・チャート・黒色粒子・赤色粒子	i	2.50	0.90	0.25	1.58	5YR6/6	B
314	46		11	1区	第1層	良好	石英・雲母	ii	2.54	0.80	0.25	1.02	5YR6/4	B
315	47		119	1区	005溝	良好	石英・赤色粒子	i	2.35	1.00	0.25	2.28	5YR6/6	B
316	47		75	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子	ii	2.30	1.00	0.30	1.88	5YR6/6	B
317	47		83	4区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	ii	2.20	1.10	0.30	1.67	5YR6/4	B
318	47		72	4区	第1層	やや不良	石英	iii	2.30	0.90	0.25	1.31	2.5YR6/4	B
319	47		112	3区	070土坑	やや不良	石英･長石・黒色粒子	iii	2.20	—	—	1.02	5YR7/4	B
320	47		65	4区	第1層	良好	石英・雲母・黒色粒子	ii	2.10	1.10	0.30	1.63	2.5YR6/8	B
321	47		74	4区	第1層	良好	石英・チャート・黒色粒子	i	2.15	0.90	0.25	1.38	5YR6/6	B
322	47		3	1区	攪乱・盛土	良好	石英・黒色粒子	ii	2.10	0.90	0.25	1.63	2.5YR5/6	B
323	47		79	4区	第1層	良好	石英・黒色粒子	i	2.00	1.10	0.25	2.13	2.5YR5/4	B
324	47		115	4区	攪乱・盛土	良好	赤色粒子	iii	1.90	0.90	0.30	0.86	5YR7/2	B
325	47		108	4区	第1層	やや不良	石英・黒色粒子	i	1.80	0.80	0.20	1.13	5YR7/4	B
326	47		49	3区	第1層	やや不良	石英・チャート・赤色粒子	iii	2.60	0.70	0.25	0.91	7.5YR7/4	B
327	47		123	1区	第1層	やや不良	石英・黒色粒子	iii	2.35	0.80	0.30	1.04	2.5YR7/4	B
328	47		102	4区	第1層	やや不良	—	iii	2.30	1.10	0.50	1.46	2.5YR6/6	B
329	47		48	3区	第1層	やや不良	—	iii	2.30	1.10	0.40	1.18	7.5YR7/4	B
330	47		132	4区	攪乱・盛土	良好	石英・黒色粒子	iii	2.35	0.90	0.30	1.28	10YR7/4	B
331	47		69	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・長石・赤色粒子	iv	2.30	0.90	0.25	1.15	7.5YR8/3	B
332	47		15	2区	第1層	不良	石英・黒色粒子・赤色粒子	i	2.30	0.80	0.25	1.06	5YR8/4	B
333	47		114	4区	攪乱・盛土	良好	—	iii	2.15	0.90	0.40	0.85	7.5YR7/4	B
334	47		105	2区	第1層	不良	石英・長石・黒色粒子	iii	2.15	—	—	0.45	5YR7/4	A
335	47		57	4区	第1層	やや不良	黒色粒子	iii	2.10	0.80	0.25	0.65	2.5YR6/4	B
336	47		29	3区	第1層	不良	黒色粒子・赤色粒子	iii	2.05	0.80	0.40	0.84	2.5YR7/6	B
337	47		44	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・長石・赤色粒子	iii	1.90	0.85	0.30	0.72	5YR7/4	B
338	47		7	3区	攪乱・盛土	不良	—	iii	2.00	0.80	0.25	0.63	7.5YR8/3	B
339	47		64	4区	087小穴	良好	石英・黒色粒子・赤色粒子	ii	1.95	0.80	0.25	0.93	2.5YR6/6	B
340	47		98	4区	第1層	やや不良	石英	iii	1.18	0.90	0.30	1.18	7.5YR7/6	B
341	47		131	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・赤色粒子	ii	1.60	0.95	0.30	1.28	5YR8/3	B
342	47		47	4区	第1層	やや不良	石英・長石・黒色粒子	ii	1.75	—	—	0.20	5YR7/6	A
343	47		95	4区	第1層	不良	—	iii	1.60	—	—	0.46	7.5YR8/4	A
344	47		53	2区	第1層	良好	—	iii	1.70	—	—	0.59	5YR6/3	A
345	47		104	4区	080土坑	不良	石英	iii	1.50	—	—	0.39	5YR6/3	A
346	47		135	4区	攪乱・盛土	やや不良	石英・長石・黒色粒子	i	6.15	—	—	23.97	7.5YR7/3	B
347	47		126	1区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	i	4.60	—	—	13.98	7.5YR7/6	B
348	47		106	4区	第1層	良好	石英・長石・黒色粒子	i	3.90	—	—	12.00	2.5YR6/6	B
349	47		133	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子・赤色粒子	i	5.00	6.30	3.30	147.33	7.5YR6/8	D
350	47		110	4区	第1層	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子・花崗岩片	i	3.90	—	—	51.60	5YR5/4	B
351	47		134	4区	攪乱・盛土	良好	石英・長石・チャート・黒色粒子	i	5.15	—	—	43.73	5YR6/8	B

残存率　A：～10%、B：10～50%、C：50～90%、D：90%～

土錘観察表 2

参考文献

【第１章】

（財）大阪府文化財センター2003『湊遺跡他』（（財）大阪府文化財センター調査報告書第87集）

（財）大阪府文化財センター2004『湊遺跡他Ⅱ』（（財）大阪府文化財センター調査報告書第111集）

【第２章】

泉佐野市役所1958『泉佐野市史』

泉佐野市教育委員1989『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ』

泉佐野市教育委員1995『泉佐野の歴史－中世編－』（泉佐野の歴史と文化財第３集）

泉佐野市教育委員1999『上町遺跡－98－１区の調査－』（泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告53）

泉佐野市教育委員1999『上町東遺跡－97－３区の調査－』（泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告54）

（財）大阪府埋蔵文化財協会『大場遺跡』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第56輯）

岡本圭司1995「泉州南部の中世集落の一様相」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』３

【第３章】

江戸遺跡研究会2001『図説　江戸考古学研究事典』（柏書房株式会社）

新宿区内藤町遺跡調査会1992『東京都新宿区　内藤町遺跡』

中世土器研究会1995『概説　中世の土器・陶磁器』（真陽社）

【第４章第１節】

泉佐野市史編さん委員会1999『新修泉佐野市史　第13巻　絵図地図編』（泉佐野市）

泉佐野市教育委員1991『上町遺跡－91－１区の調査－』（泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告21）

（財）大阪府埋蔵文化財協会1990『上町遺跡』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第57輯）

（財）大阪府埋蔵文化財協会1994『上町遺跡Ⅱ』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第84輯）

上田繁之1996「史料に見る佐野村水利の初期展開について－溜池発展の事例考察－」『泉佐野市史研究』第２号（泉佐野市史編さん委員会）

梶木良夫1995「宝暦十一年佐野村・日根野村用水争論絵図の成立とその背景」『泉佐野市史研究』第１号（泉佐野市史編さん委員会）

小山靖憲1995「「正和５年日根野村絵図」再考」『泉佐野市史研究』第１号（泉佐野市史編さん委員会）

土平博1996「「佐野町全図」に関する覚え書」『泉佐野市史研究』第２号（泉佐野市史編さん委員会）

藤本清二郎1997「「日根郡鶴原村絵図」を読み解く」『泉佐野市史研究』第３号（泉佐野市史編さん委員会）

【第４章第２節】

大島襄二ほか編集1998『大阪府漁業史』（大阪府漁業史編さん協議会）

泉佐野市役所1958『泉佐野市史』

堀口康生校訂1976『和泉名所図会』（同朋舎）

真鍋篤之1994「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第７号（瀬戸内海歴史民俗資料館）

農商務省水産局編1912『日本水産捕採誌』上巻

和田晴吾1985「土錘・石錘」『弥生文化の研究』第５巻（雄山閣出版）

図　　版

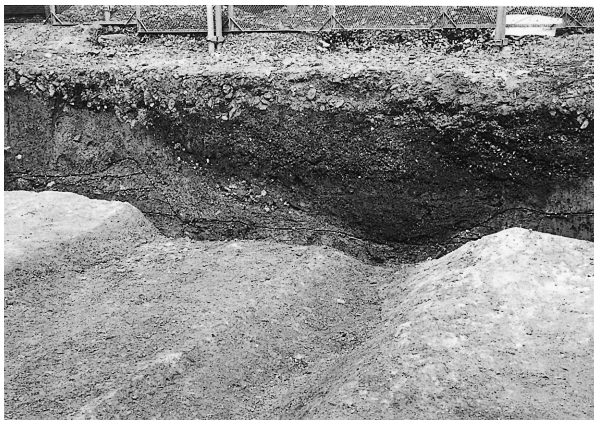
1　大西遺跡、若宮遺跡遠景（東から）

2　大西遺跡、若宮遺跡遠景（垂直）

図版２　１・２・３区第１遺構面

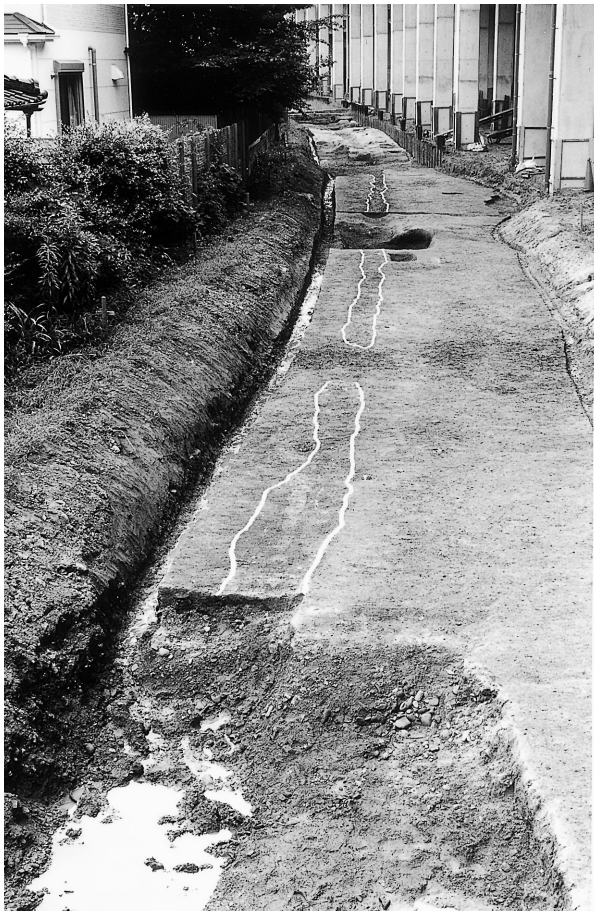
１　１区第１遺構面（東から）

２　１区第１遺構面（西から）

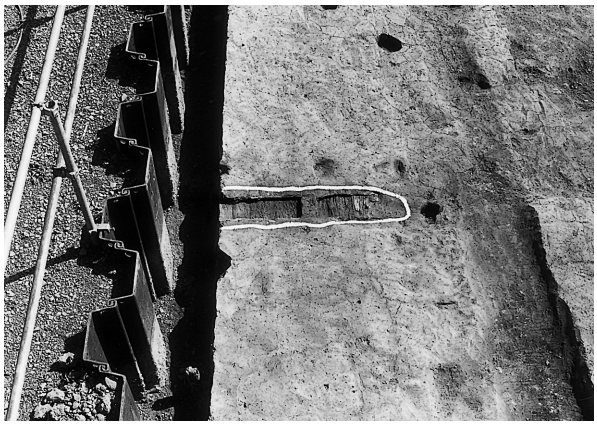


３　005・006溝土層（西から）

４　２区第１遺構面（東から）

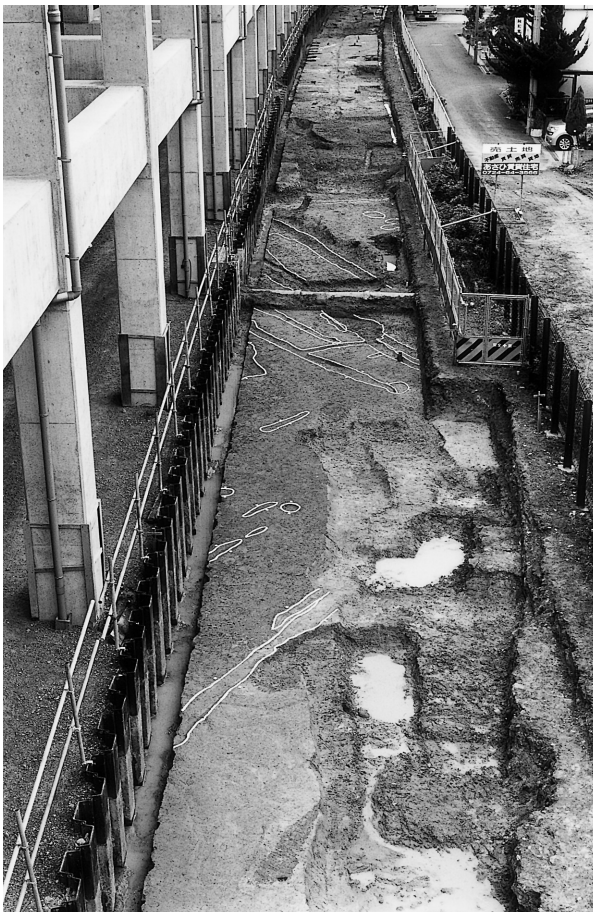


５　３区第１遺構面（東から）

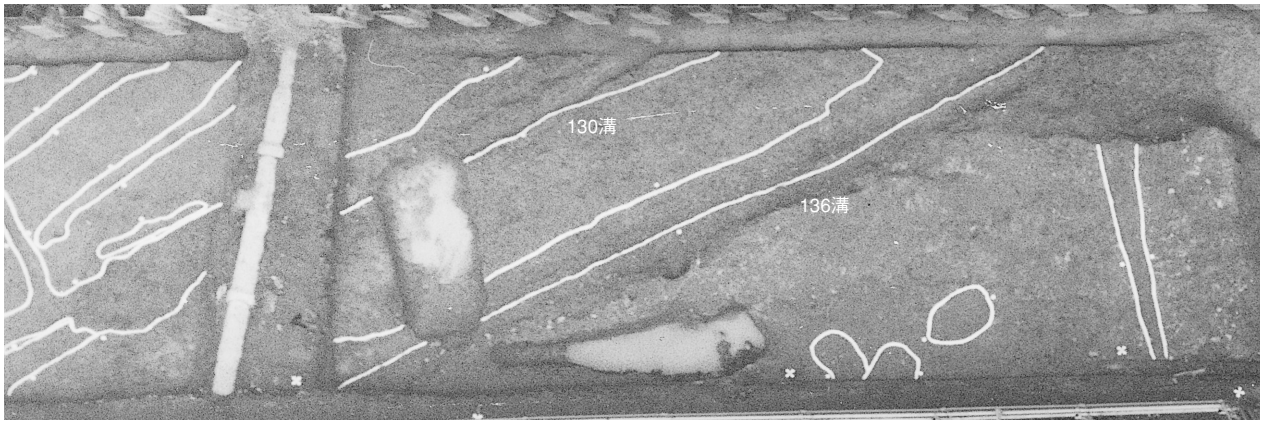


１　078樋（西から）

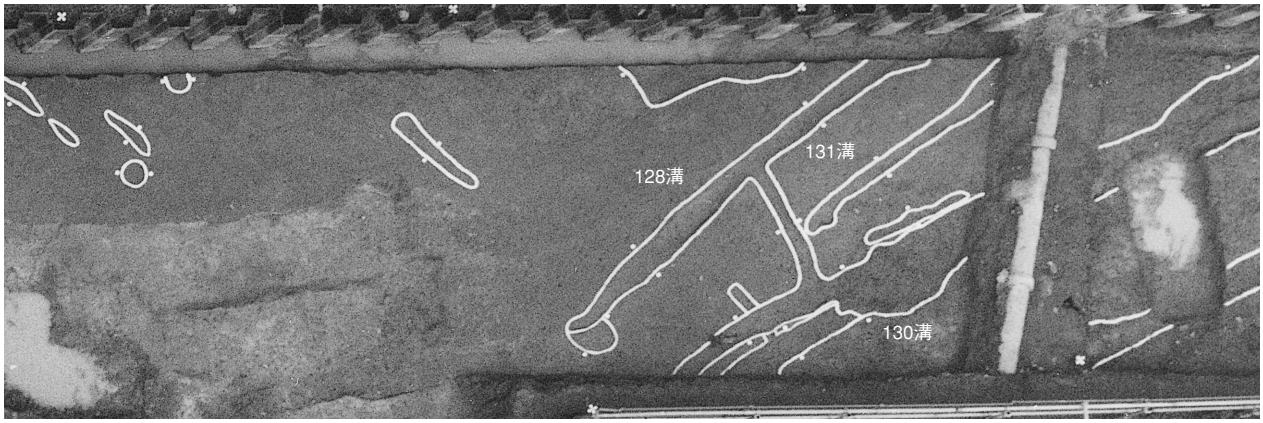
２　078樋土層（南から）



３　４区第１面（西から）

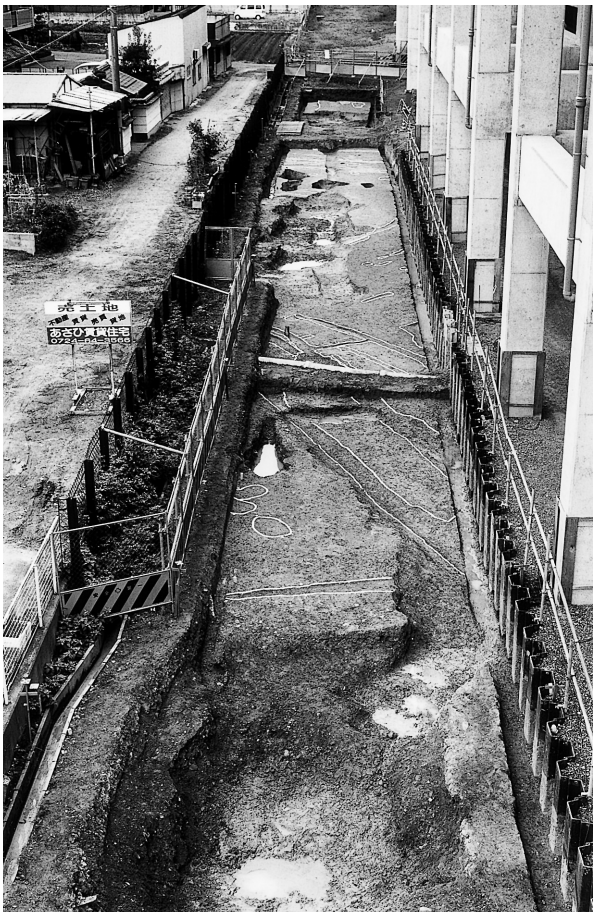


４　130・136溝（垂直）



５　128・130・131溝（垂直）

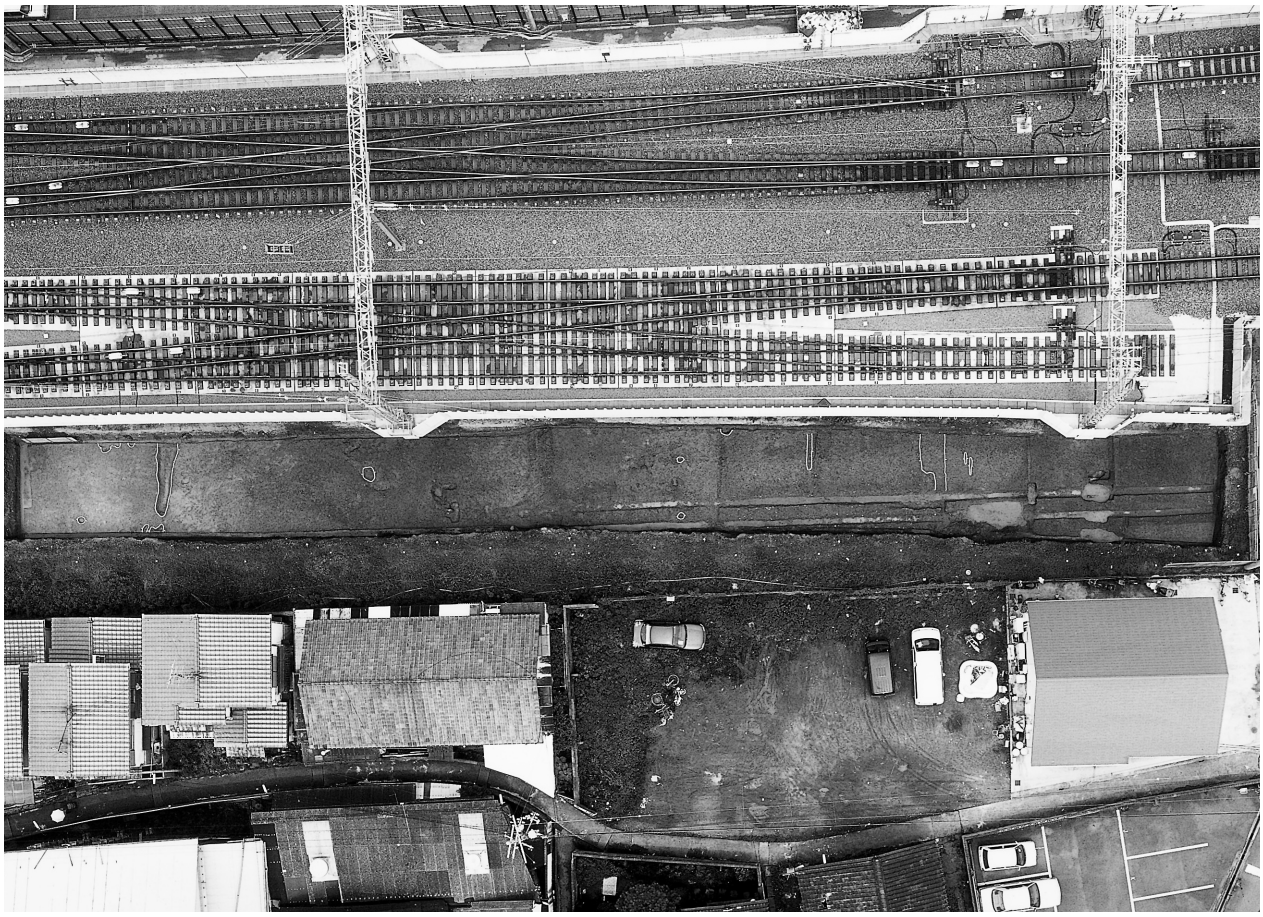
図版４　４区第１遺構面



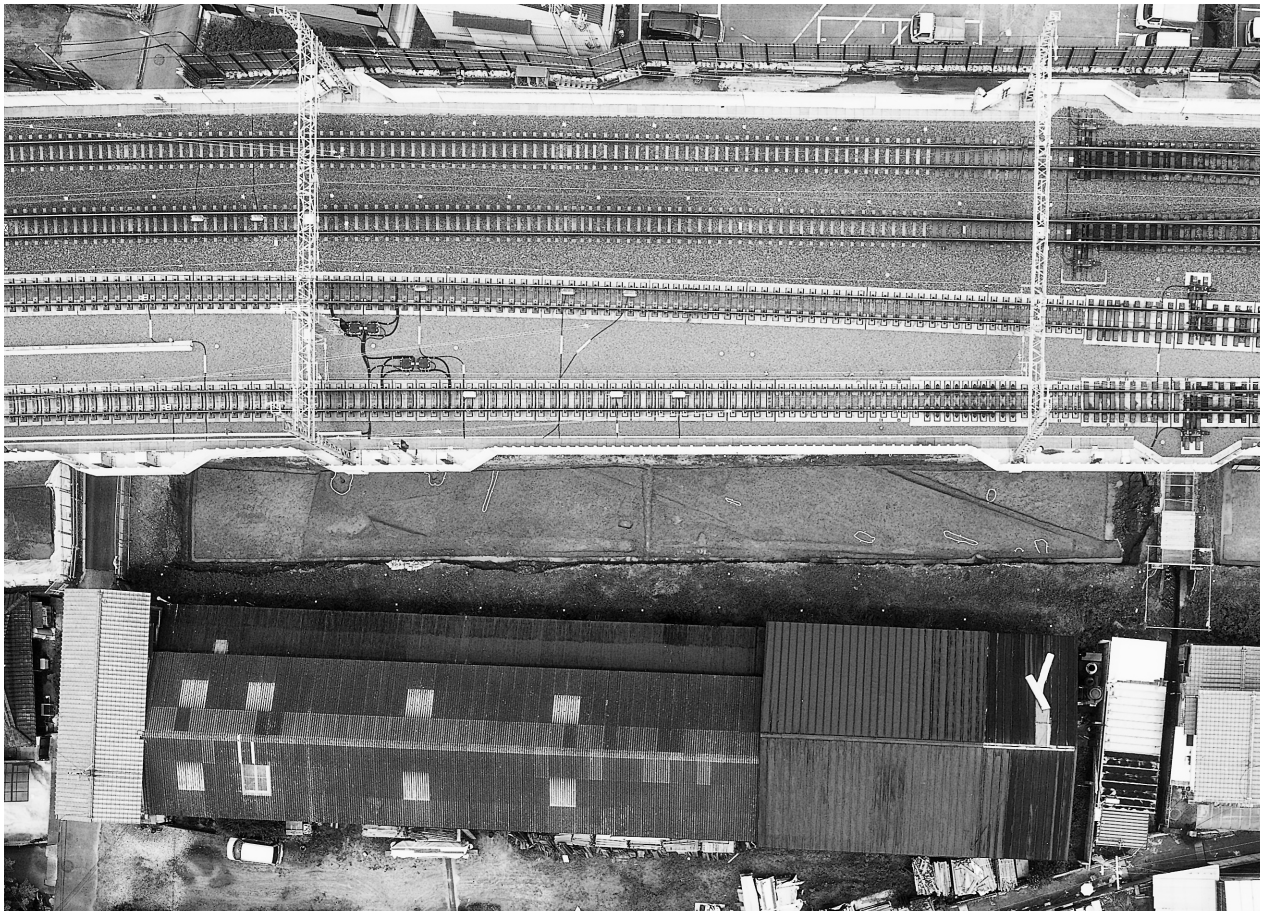
１　４区第１遺構面（東から）

２　４区西端耕作痕群（西から）

３　４区西端耕作痕群（垂直）



１　１区第２遺構面（垂直）

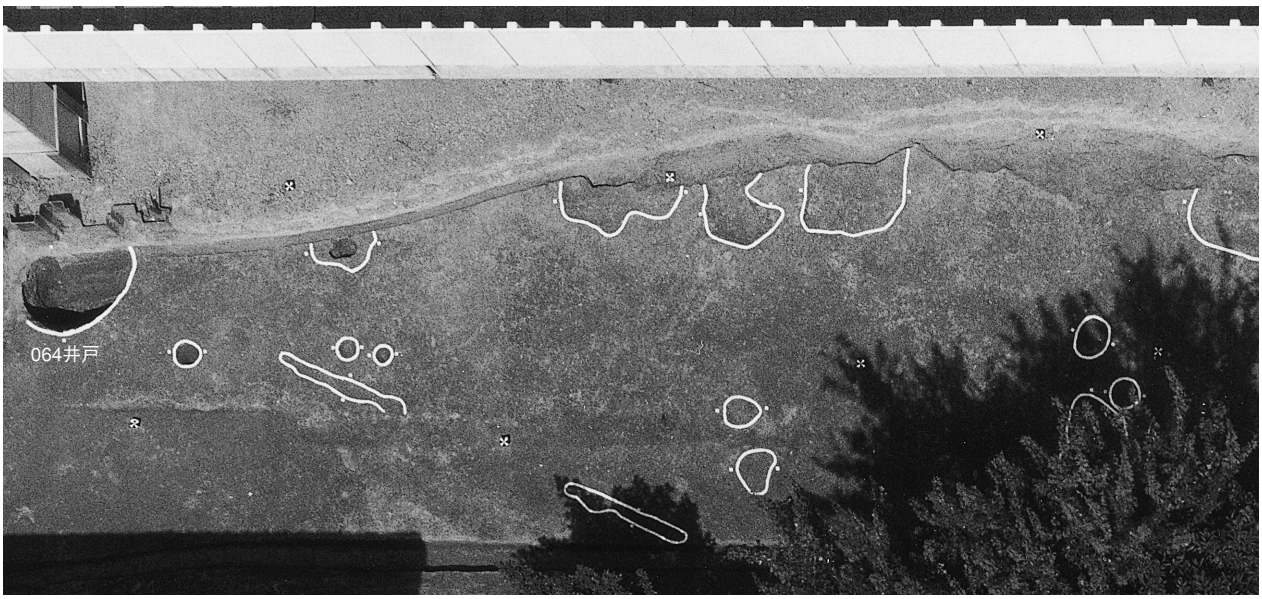


２　２区第２遺構面（垂直）

図版 6　3 区第 2 遺構面

1　3 区第 2 遺構面（垂直）

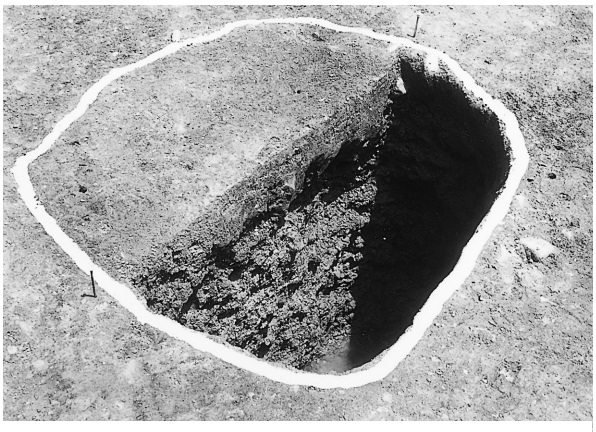
2　3 区第 2 遺構面（垂直）



3　3 区第 2 遺構面（垂直）

図版７　３区第２遺構面、４・５区第３遺構面

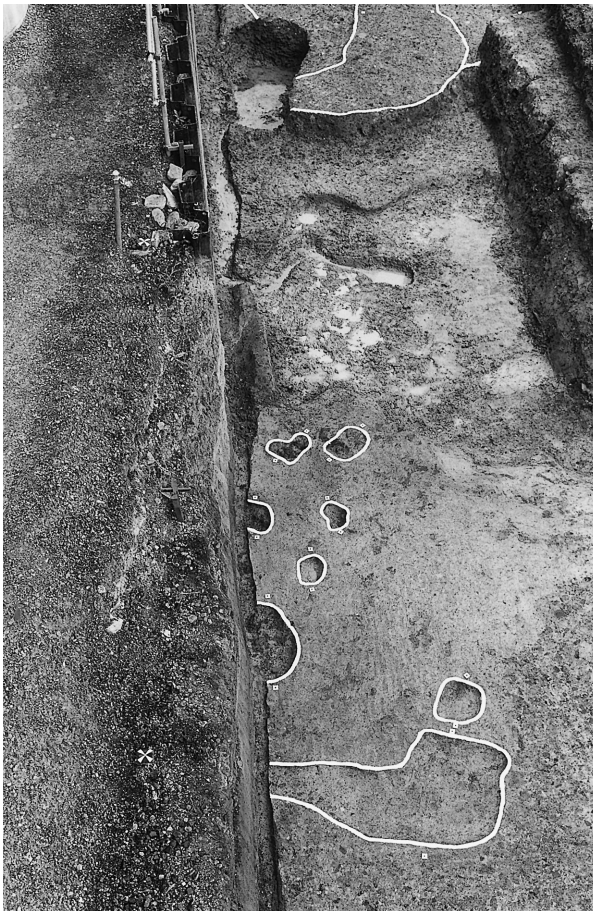
１　３区第２遺構面（東から）



２　045井戸土層（南から）

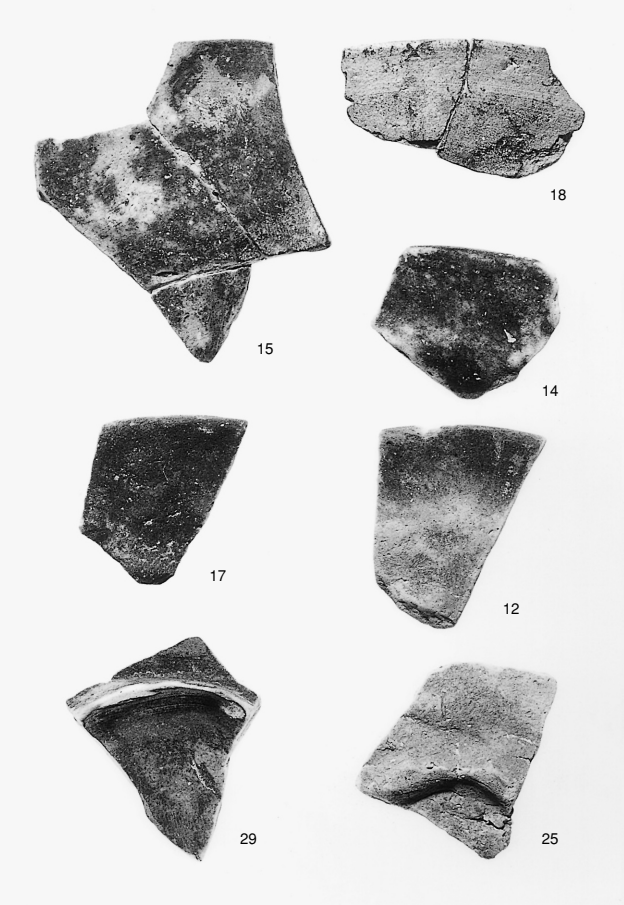
３　064井戸土層（西から）

４　４区第３遺構面（東から）

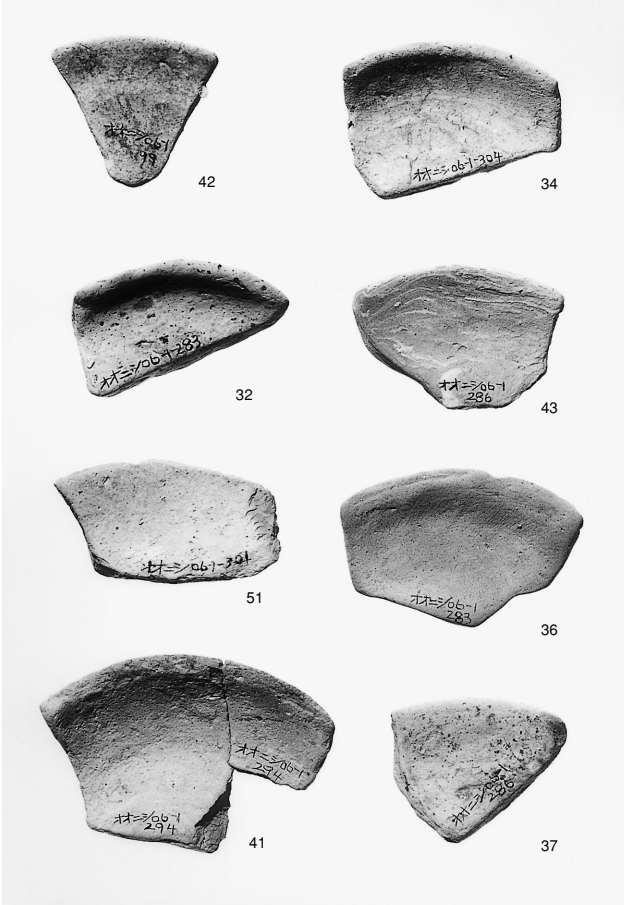


５　５区第３遺構面（西から）

図版８　出土遺物

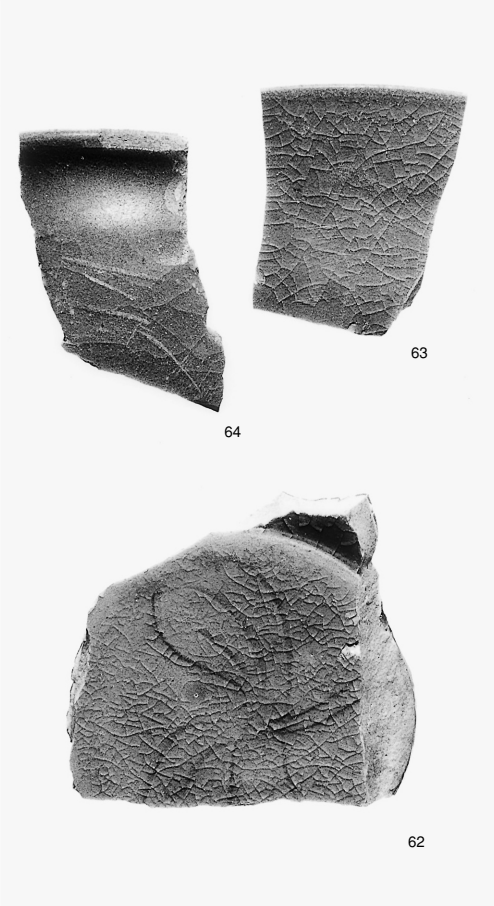


１　瓦器：椀・皿



２　土師器：皿

３　軒丸瓦

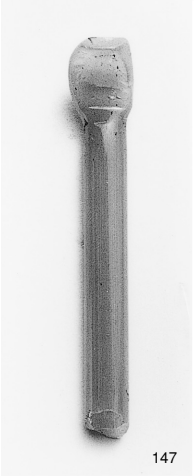


４　青磁：碗・鉢

1　泥面子、芥子面、面摸

2　芥子面、玩具

図版10　出土遺物


147

148

149

194

157

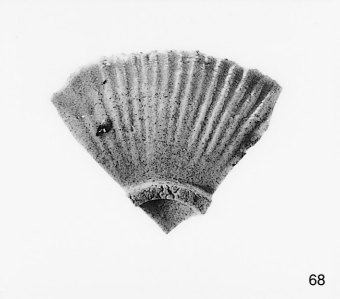
1　簪、サイコロ、煙管

66

67

69

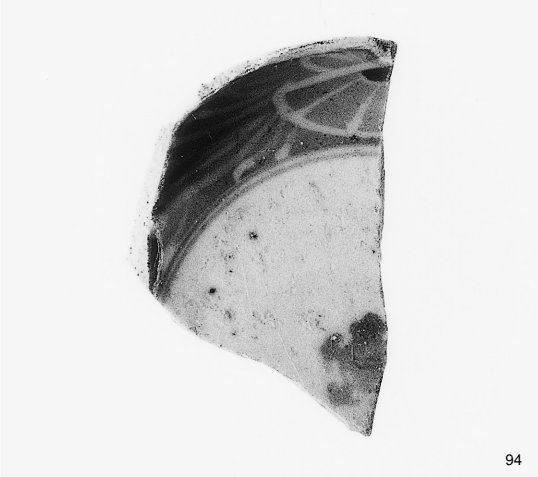
70


68

71

2　磁器：紅猪口

92

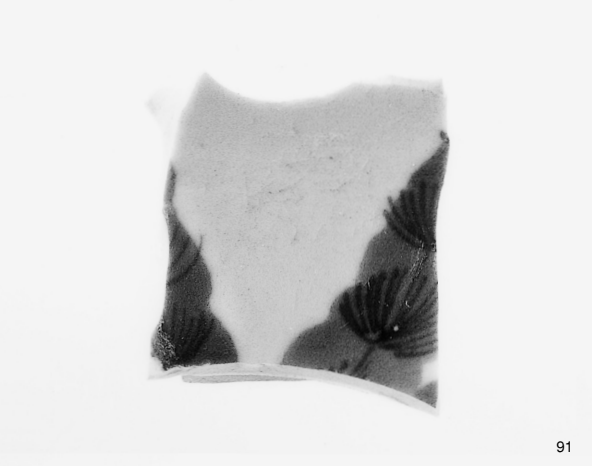

94

87

93

3　磁器：皿

88


91

97

96

1　磁器：皿・蓋

98

3

120

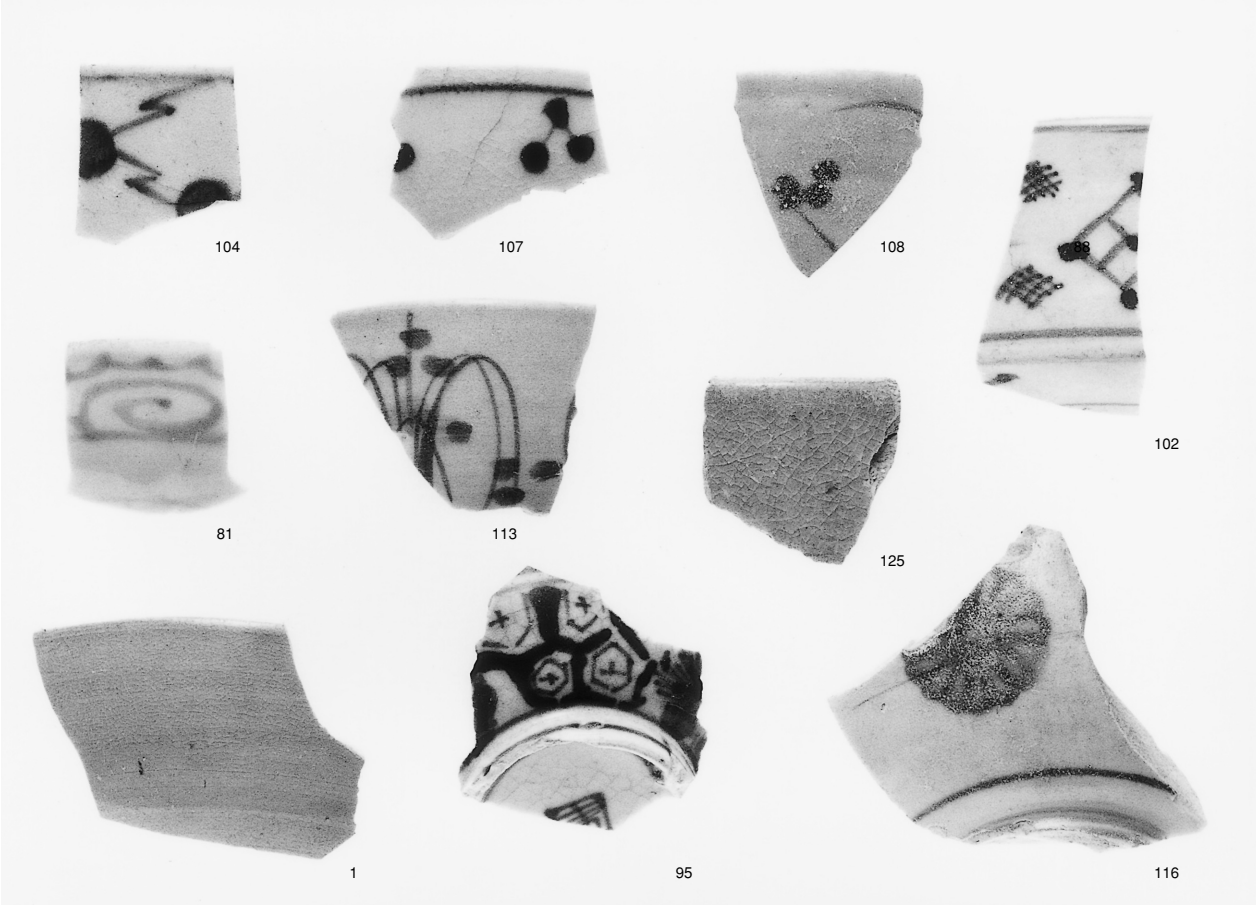
4

2　磁器：蓋・碗

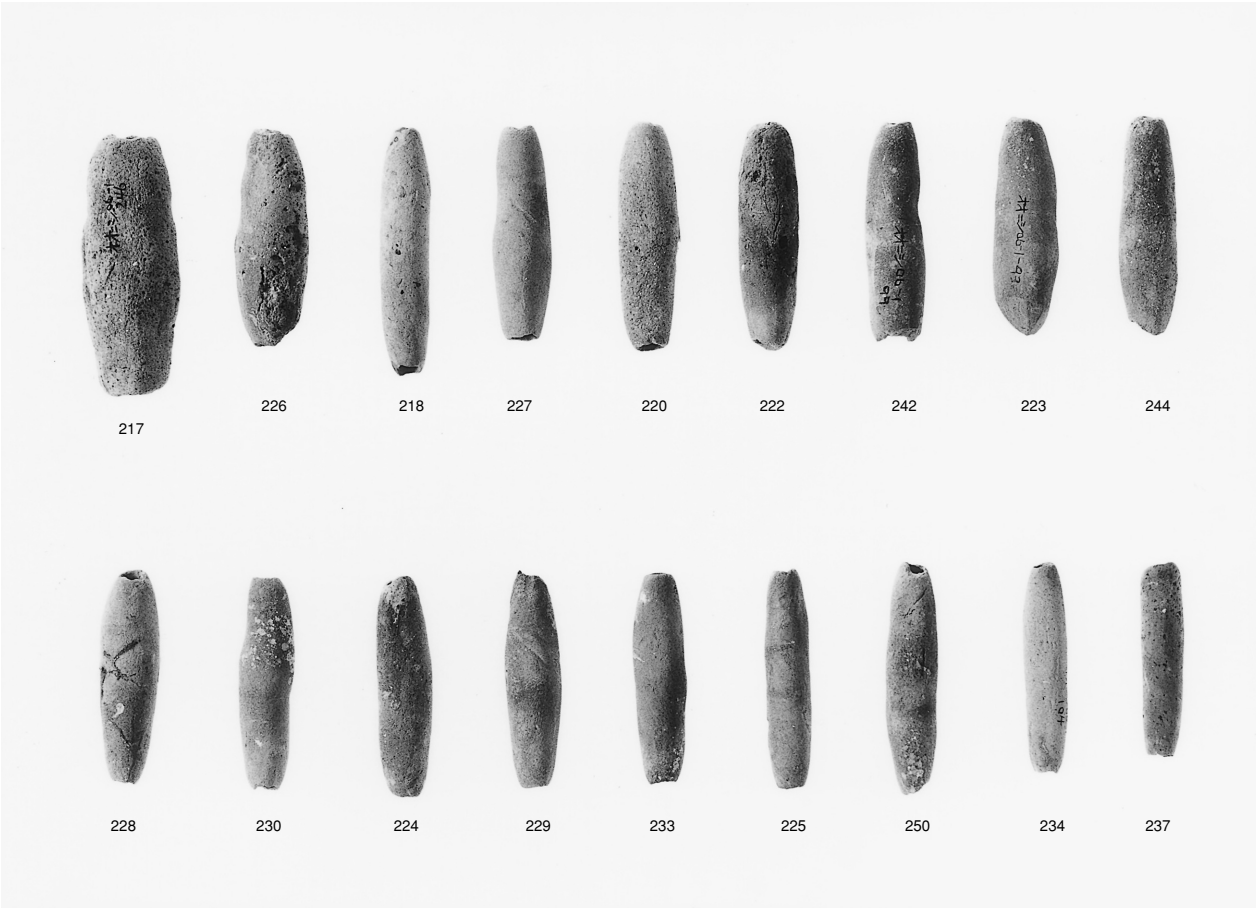
図版12　出土遺物

1　磁器：碗・仏飯器、陶器：仏飯器

2　軟質陶器：灯明皿・秉燭、火打石


104
107
108
102
81
113
125
1
95
116

1　陶・磁器


217
226
218
227
220
222
242
223
244
228
230
224
229
233
225
250
234
237

2　土錘

報告書抄録

ふりがな	おおにしいせき、わかみやいせき
書名	大西遺跡、若宮遺跡
副書名	南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その４）に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第153集
編著者名	三木　弘　奈良拓弥
編集機関	（財）大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号 TEL：072－299－8791
発行年月日	2007年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
おおにしいせき 大西遺跡 わかみやいせき 若宮遺跡	いずみさのし 泉佐野市 たかまつきた 高松北２丁目	27213	91 83	34° 24′ 35″	135° 18′ 50″	2006年5月 ～ 2006年9月	2205	南海本線連続（泉佐野市）立体化事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大西遺跡 若宮遺跡	集落	中世	溝、土坑、小穴	瓦器、青磁	「佐野町場」に関連する紅猪口、簪、土製玩具などが出土
	生産域	近世	畦、側溝、樋	陶器、磁器	

要約

今回の調査地は大西遺跡と若宮遺跡にわたったが、検出遺構の状況は両遺跡ともほぼ同様であり、18世紀中葉以前に開発された水田域と、その水田化時の削平を免れた範囲に存在する中世の遺構や遺物包含層が主なものであった。

中世の遺物としては、瓦器、瓦質土器、青磁、白磁がある。当地周辺の調査でも青磁の出土がみられ、熊野街道に近在した集落の繁栄振りがうかがわれる。

水田耕作土からは17世紀後葉以降の遺物が出土するが、なかには紅猪口、ガラス・石製簪、芥子面や泥面子などの土製玩具といった日用雑器類とは異なる遺物も認められ、約200m北に展開する「佐野町場」との関連が推定できる。耕作地への客土か下肥に混入して、町場からもたらされたのであろう。

磁器は肥前系、波佐見・平戸系、瀬戸・美濃系が主なもの、陶器では瀬戸・美濃系が多いが、京焼系、萩焼、丹波焼、備前焼、唐津焼、志野焼もある。

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第153集

大 西 遺 跡、若 宮 遺 跡

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その４）に伴う発掘調査報告書

発行年月日 ／ 2007年３月23日

編集・発行 ／ 財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁目21番４号

印刷・製本 ／ 三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300